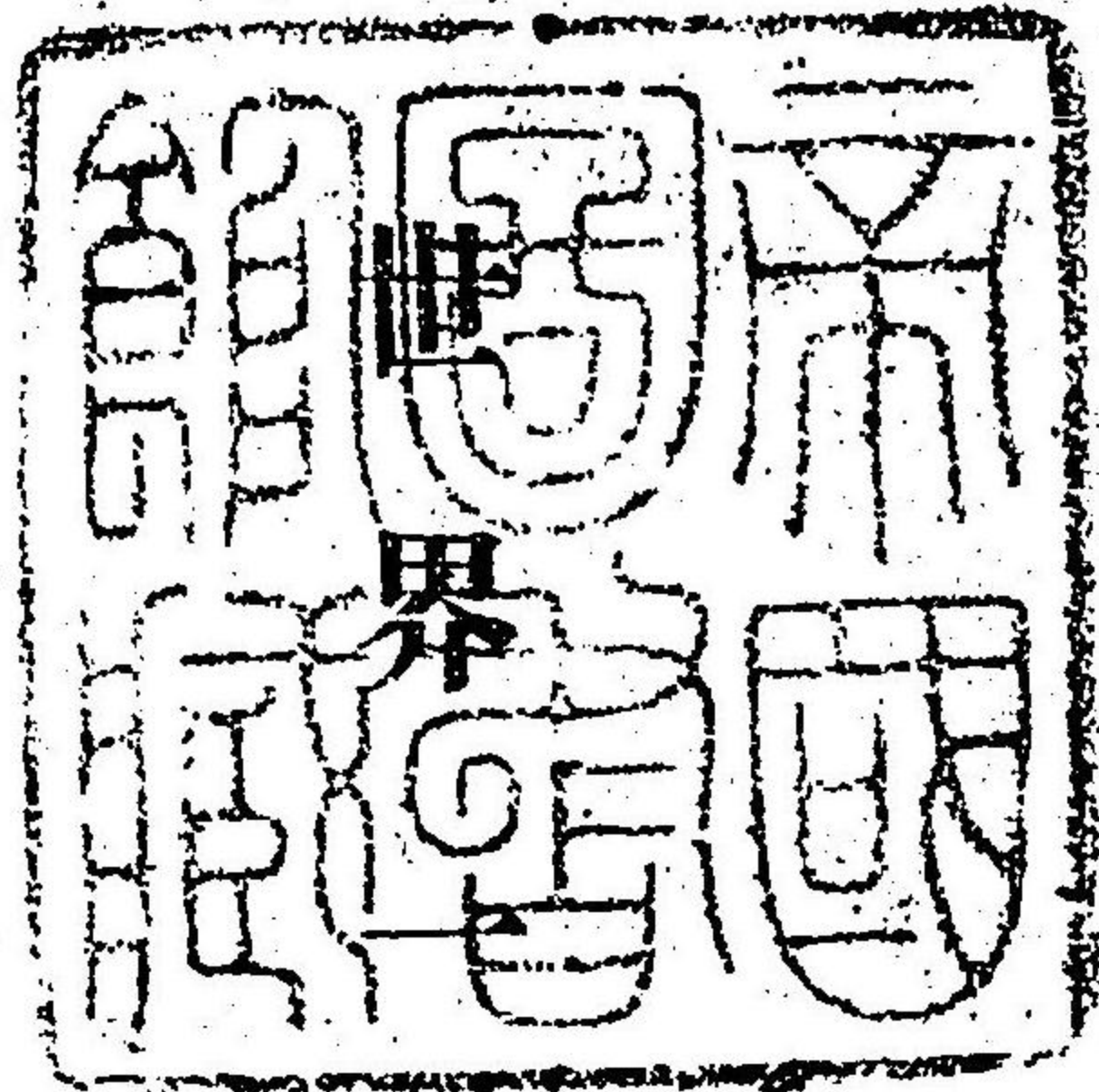


96-449



周記

田邊英次郎著



序文を寄す

曰く、何やら記、曰く、かにやら記。近時歐米漫遊記の發刊せらるゝもの、實に指を
僕するに暇あらざる也。

然かも、之れ皆、歐化病、恐外病的思想の裡に成長し來りし舊日本人たる、老者、壯
者の著書のみ、故に其の觀察や、外觀美に惑はされ、其の批評や、之が嘆美に過ぎざる
也。

然りと雖も、今や我帝國は世界の最大強國たり、我民族は世界の優秀なる民族たり。
徒らに歐讚米化に酔ふの時にあらず、唯直截、彼の長を長とし、彼の短を短として、以
て採る可きは採り、捨つ可きは捨つるあるのみ。而して、斯かる觀察批評は一に何等、
歐化病、恐外病に襲はれし事なき、新日本の現代青年に俟たずんばならず。

苟くも、此の新思想に養はれたる、現代青年が、如何に歐米を解するかを、知らんと
欲せば、本書を繙かざる可らず。

中外 高木友三郎

序 文

余は操觚者で無いから、固とより文章に於いて、見るべき物なけれど、去年の三月クック社主催世界一周會に加はり、同行五人と共に、米、英、佛、瑞、伊、埃、獨、露の各國を経て、七月の初めに、無事歸朝致しました。就いては、今後團隊的海外旅行者の多からんを思ひ、拙き筆を顧みず、日記帳と參考書を酌し、茲に嗚呼がましくも、『世界一周記』と名づけて、著述致しました。幸ひにして、海外旅行者の案内記の一助ともなるを得ば、余の目的既に足れりとす。翼くば、天下江湖諸君、余が微衷を察し、此の意を諒とせられんことを。

明治四十三年二月

著 者 識

目次

世界一周記

第一編 太平洋日記

- 神戸港……………一
- 四日市沖……………二
- 入京記……………三
- 横濱出帆……………五
- 航海中……………五
- 布哇見物……………十四
- 航海中……………二十一

第二編 米國日記

二

- 桑港上陸(一一四).....二十四
- 瀛車中.....三十三
- ソートレーキ.....三十六
- 瀛車中.....三十八
- コロラドスプリング.....三十九
- 瀛車中.....四十三
- 志嘉古(一一三).....四十三
- 瀛車中.....四十八
- ナイヤガラ瀑布.....四十九
- ボストン(一一二).....五十三
- 紐育繁盛記(一一四).....六十二
- 華盛頓(一一二).....八十一

- 費府.....九十一
- 紐育繁盛記(五一六).....九十七
- 地勢、沿革.....百〇六
- 第二編 大西洋日記
- 紐育出帆.....百〇八
- 航海中.....百〇八
- 第四編 英國日記
- リバプール着.....百十五
- グラスゴー.....百十九
- 蘇格蘭の湖水.....百二十三
- エヂンバラ.....百二十六
- リーヅ.....百三十

● 瀛車中……………百三十一

● 世界第一の倫敦(一一六)……………百三十二

第五編 南歐日記

● ドーバ海峽……………百六十

● 花の巴里(一一三)……………百六十二

● 瀛車中……………百七十三

● ルザン……………百七十四

● アルプス山中……………百七十六

● ミラノ……………百七十八

● セノアの港……………百八十

● 瀛車中……………百八十二

● 羅馬(一一二)……………百八十四

● 瀛車中……………百九十七

● ポンペイ廻跡……………百九十八

● ナポリ……………二百〇六

● 瀛車中……………二百〇九

● フローレンス(一一二)……………二百〇九

● 水のヴェニス(一一三)……………二百十四

第六編 北歐日記

● 伊太利出發……………二百二十五

● 維納(一一二)……………二百二十七

● 瀛車中……………二百三十一

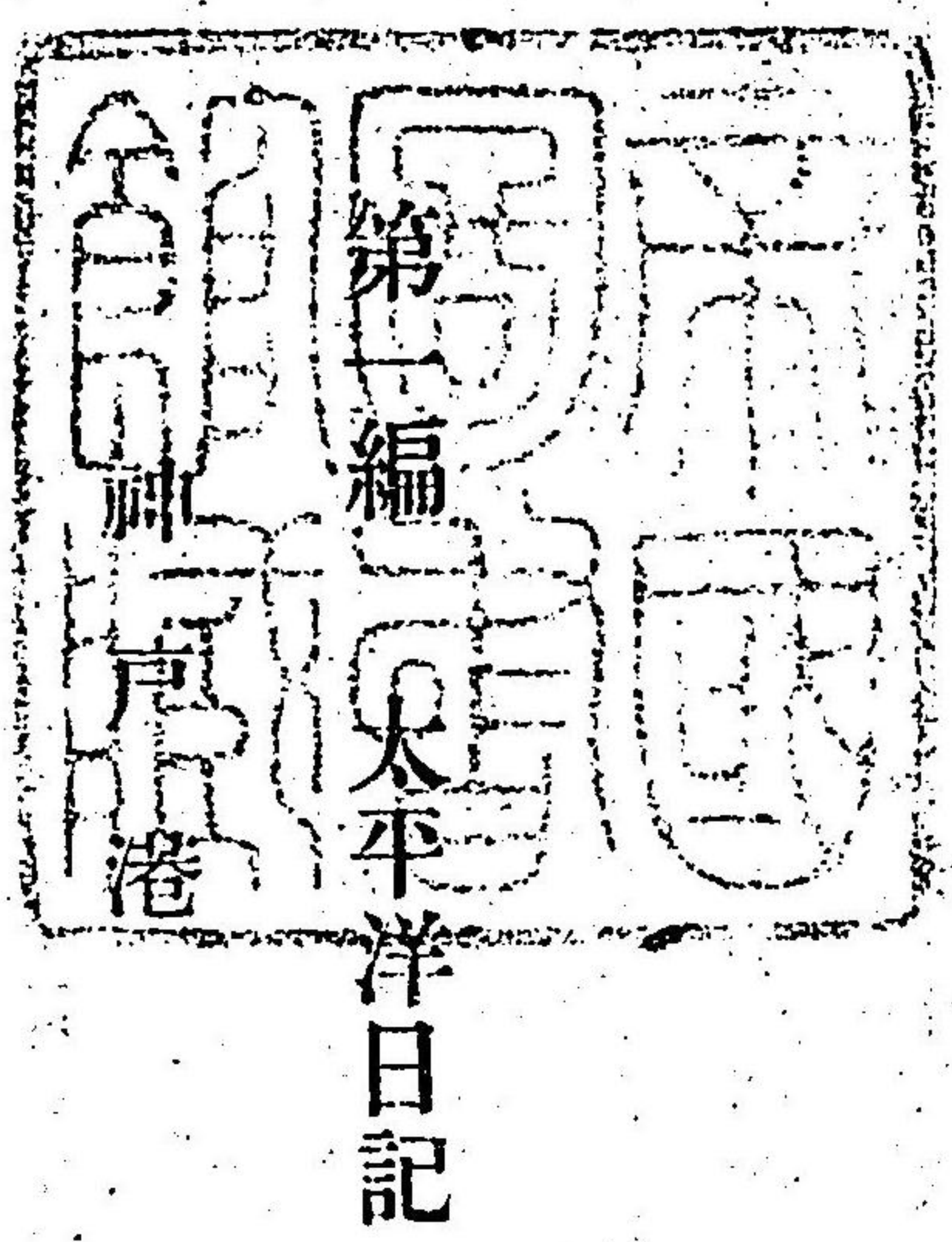
● ドレスデン(一一二)……………二百三十二

● 伯林(一一二)……………二百三十七

●ポツダム……………	二百四十五
●漁車中……………	二百四十八
●聖彼得堡(一一三)……………	二百五十一
●莫斯古……………	二百六十一
○附加……………	二百六十六
第七編 歸朝日記	
●西比利亞鐵道……………	二百六十八
●日本海……………	二百七十五
●歸阪……………	二百七十七
旅行者に對する注意(大尾)……………	二百七十九

世界一周記

浪花 田邊英次郎 著



●三月十七日 晴天 梅田驛―神戸港出帆―兄さんと岡村さん―去年の夏―地洋丸―
 午後一時梅田驛を出發したが、姉さんを始め僕の知つてる丈けの人皆見送つて呉れる。
 車掌の笛ピトと響くや、はや胸が騒ぐ。漁艀が動くと、不意に萬歳を浴びせかけられた
 廳がて神戸驛に着、米利堅波止場へと向ふ。

東洋漁船會社汽船地洋丸に乗り込むと、其の美しさ、磨きたてた様に、閃かしくなつて居る。スモーキング、ルームでヤング支配人等と三鞭酒の乾杯をやつた。三郎生や、四郎君や、高木の叔父さんや、知己の人々と袂を別ち、去り行くランチと互にハンカチーフを振り交はして、暫しの訣れを惜しむ。僕は大阪の萩原君と同室となり、兄さんと岡村さんとは僕の船室の前に占められた。

午後六時神戸港を出帆した。僕は兄さんと甲板上に立つて、武庫、摩耶の山々を眺めると、おう！彼の甲山は僕が去年の夏、戦闘射撃に行つた所だと思ひ、大阪の方を見ては感慨いと深し。地洋丸は一萬三千噸、タービン式の一大巨船である。構造の宏壯、設備の鮮麗、實に古今獨歩だ。當代ホテルの發澤と、愉快とを兼ね得らるゝ仕掛けになつて居る。晚餐が近づくと、支那人が叩いて歩く銅鑼わななく。食堂の卓につけば、珍分漢分わからぬ献立ばかり、燦として輝く電燈の光、晝も眩ゆい位である。

●同十八日 晴天 四日市沖—運動—富士山—美しい伊勢灣

朝早く起きて見ると、船は四日市の沖合ひに着いて居る。瀬戸物の荷を起重機で、上げ卸しやつて居る。一日兄さんと甲板上に出て、歩き廻つた。兄さんは非常に船がお好きである。岡村さんは船がお嫌ひで、船室で萩原君を擱へて怪氣焰を吐いて居る。西洋人が運動に加入せよと云ふから、ボールの受け廻はしをやつた。兄さんと、僕と必死になつてやる。ボールを落しては笑はれ、笑はれては人の失敗を笑ふ。此の面白い國際運動から離れて、獨り船橋に戯れて居ると、富士山が幽かに白う見ゆる、實に氣高い姿。船が灣口にかゝる時、鯨の様な孤島に近づいて来る。其の近海に多くの漁師が、扁舟を木の葉のやうに泛べて居る様は恰も、一幅の畫を見るが如く、いかにも美しい伊勢灣である。

入京記

●同十九日 晴天 横濱—宮城前—大江家—姑しの東京—電車

未明横濱に着いた。朝甲板に居た時、幸次郎さんからの來信に接す。はん形式ばかりの
檢疫を済まして、ランチに乗り、上陸して、先づクック社に立寄り、ケーザ氏と握手し
た上、西村回漕店へへ行つた。晝食後松井さんと共に入京し、福島組に道寄りし、宮城
前に出で、一禮し、電車に乗り、又腕車に乗り、神樂坂の横寺町とやらの大江家へ行く。
マ！見違へるやうになつてね、と姉さんが云ふ。丈夫さんも出て來られる。伯母さんも
出て來られて、二階で挨拶する。其所で御馳走して貰ひ、鮓と蕎麥で腹ふくらし、麥酒
で全く酔ふて終つた。さて名残りつきねど仕方無い。是れから洋行する身だ。明朝横濱
で、伯母さんと、姉さんに、遇ふとを約して、午後八時同家を辭した。福島組へ亦立寄
つて、買物を受取り、電車に乗つて横濱へ向つた。あ、姑しの東京！何となく物足らぬ
心地す。されど先づ最初に日本の帝都を見、其れから世界の大都會を見る。丁度適當な
順序になる。品川と神奈川で乗換へる。聽て東京から四十分間で横濱に着いた。時に午
後十一時。

四

横濱出帆

●同二十日 雨天

乗船||甲板上の撮影||ハンカチーフ||汽笛一聲||世界一周
會員||祝電

正午前地洋丸に乗船した。岡村さんは大江の伯母さんと、姉さんなどを連れて、船中の案
内をして歩いた。二人は眞から感心したと見えて、其の驚きはたいしたもので、マ！
綺麗など、是れなら安心、御話が出来るとて、非常に喜んで居た。新聞社の招きにより
甲板上で、ケーザ氏を加へて、世界一周會員の撮影を爲す。聽て出帆時刻に切迫したか
ら、兄さんと握手し、松井さん、岡村さん、大江の兩人とお訣れした。僕と萩原君と、
甲板上に送つて出で、ランチと互に、白きハンカチーフを振り交はす。秋風に散る木の
葉のやうに、盛んに振つた。僕が振れば先方も振る。終ひに手が痺びれるやうになつた
ランチは蕭々たる雨中に、凝つとして動かない。時計を見れば、最う二分と云ふ中に、

五

汽笛一聲、強く唸つて、海波も擧げんばかりに、響き渡る。それと見るや、両方から萬歳を連發して、飛ぶ鳥も繁しとばかり、ハンカチーフを振り散らす。船は徐々に動き出し、船首を回轉して、突堤の口へと向ふと、ランチは我が船に近寄つて、又漸次遠ざかり行く。宛がら訣れを惜しむやう……僕はランチが其の煤煙に隠れて、見ぬやうになる迄で、ハンカチーフを振つて見送つて居た。其の姿が見ぬやうになつて、サ！是れから世界一周だと、萩原老人と不圖顔を見合はして一笑した。

世界一周會員は僅つた五人、其の面々は大坂の僕と、同紙商萩原君と、博多の商業會議所の書記長大熊君、東京朝日の記者濂川君、通譯鎌田君等である。船室に入ると電報を受取つた。見れば富山の松井氏からの祝電である。

●同二十一日 曇天 水の世界—黒潮—茫漠たる太平洋—氣分不快

午前七時起床、甲板に出て見ると波濤澎湃として躍つて居る。波頭が白う碎けて、飛魚が跳ねまはつて居るやうである。見渡す限り唯だ渺々として、際涯しも知れぬ水の世界

である。山も陸も何にも見ぬない、青碧の大海である。著だるゝ黒潮にかゝつて居るから、波が激しい。如何なる巨船でも、追がに動揺酷しく艫と舳が入れ違ひに、上下左右に動いて、水平線が夫れから上がったたり、下つたりして、見ぬたかと思ふと没れる。没れたかと思ふと見ぬる。船が動くのか、海が動くのか、宛るで鞆でもやつて居るやうである。左うかと思ふと、船首を斜に持ち上げて、どつと波底に落ち込む。其時の氣持ちの悪るさと云つたら、一寸語されない。船は大揺れに揺れながらも、始終東南の方向指して、どろどろと水煙むり押し立てつゝ突進して居る。あゝ太平洋！曾て見しとなき大自然、大壯觀を極めて居る。

今朝起きた時、氣分不快でふらくして居たが、晝から少し癒はる。ボーイの花沼君が曰く。今日一日苦しめば明日から樂になると。

●同二十二日 曇天 海上靜穩—六羽の鳥—食堂—無線電信

今日は波が平らかである。昨夜の中に黒潮を出たど、夫れで靜穩になつて來たのだらう

空は曇つて居るから、海の色が黒味を帯びて居る。六羽の鳥が翼を擴げて、艦の方に連つて飛んで来る。昔の人は、鳥も通はぬ何とやらと云ふた。けれど、是れを見たら、左うじや無い。鳥も通ふ太平洋である。夜食堂に入れば、パット電燈が點いて、眼が醒めるばかり明るい。小刀ナイフと肉刺フオックを取る時、カチ／＼と皿の音をさせぬやうに、スプを廢する時、チュ／＼と云はぬやうに爲よと、あゝ！六ヶ敷しい。構つたこと無い、云はせてやれ。今夜七時に無線電信がかゝると、逸早く甲板上の取扱室へ駆け込むで、其通信状況を見せて貰ふ。局長が卸を押すと、稻妻のやうに照らされる。僕の電信は『ヨコハマヨリ八〇〇マイルブジ』と云ふのである。あゝ！遠く航海しながら通信が出来る。文明の恩恵實に有難し。

●同二十三日 晴天 甲板玉突||再び無線電信

晝西洋人と甲板玉突デツキヒリヤデインクと云ふ遊戯をやつた。是は甲板上の板にチオークチオークで線を引き、十プラスの記號を赤と、白で記し、其處へ棒の尖で、圖盤を突き込む遊戯である。突くの

餘り強ければ、線ラインの外に出で、弱ければ中に入らず。下手に突けば、一マイナスの中に入る。上手の人は十プラスの敵の盤を、ボンと跳ね飛ばして、自分の盤を數字の多い所へ入れる。船が横に傾むいた時に突くと、線ラインから外づれて、飛んだ所へ行つて終ふ。僕も暫らく此の面白い遊戯に加はつてやつて居た。

今夜も再び無線電信をかけた。曰く『一二〇〇マイルハテシナシ』と果して届くか知ら……

●同二十四日 晴天 練習艦隊||通信

今夜我が練習艦隊から、無線電信が通じた。互に航海の安全を祈ると云ふ意味でかけたさうである。

●同二十五日 晴天 日本料理||六十歳の翁さん

今夜船員と一所で、日本人ばかり集合して、日本料理を味ふた。桑港の領事永井氏夫妻は上座につかれて、種々雑談が湧いて来る。六十歳の翁さんで、宮島さんと云ふ人が御

座る。滑稽な事云ふて、人を嘲弄するので、人氣は皆此人に集る。最初一周會員に加入する筈であつたが、都合あつて已めになつた。

●再び三月二十五日 晴天 同日二日〓西半球に入る〓二個の時計を持って

今日は昨日と同じく二十五日である。太平洋の航海中には同じ日が続く。其の理由は英京倫敦のグリーンニッチを起點として、西に百八十度を西半球、東に百八十度を東半球と爲し、今や我が船は此の東西兩經百八十度の線を過ぎ、西半球に入らうとするのだ。横濱出發以來、毎日時間に相違を來たし、少しづつ時間を進める。時間を平均させる爲めに、此の線に達するや、二日同じ日を重複させる。但し東から西へ航海する時は一日丈け減じる。例へば二十五日に通過すとせば、一日飛び越へて、二十七日となる。何んとなれば地球は東へ廻轉するからである。日本から持つて來た時計は毎日時間が違ふ。夫故洋行する人は、日本からの時間と、毎日變はる時間と比較するのに、二個時計を携へたら、至極便利である。殊に世界を一周してから、日本から持つて來た時計は、

日本の時間と一致する道理である。

●同二十六日 晴天 床屋〓運動會〓演藝會

床屋へ行つて見ると、西洋の爺が居て、額の所に青い前屁をつけて居る。シエーブと云へば、オーライと云ふ。何うするかと見てると、口の周圍から顎の下、顎の所まで石鹼だらけに塗つた上、髭を剃る。實に滑稽。頭へどつさり香油を振りかけて、さちんと髪を分ける。餘り氣取り過ぎて俺しや厭やじや。是れで五十錢ぬゝ!!。

今日水夫と、ボーイの運動會と、演藝會をやると云ふので、皆三弗づゝ寄附した。午前九時から水夫の運動會が甲板上で催ふされた。競技は玉子匙、戴囊、片脚、走驢、御者芋拾ひ、旅人、眼隠し、障礙物、叩き合ひ等である。

演藝會は夜食後甲板上で開かれた。演藝は劍舞、柔術、相撲、戯術、舞、飴巻き、噺、二輪加、假裝行列等である。喫煙室の前に縁門アイチをしつらへ、電燈を點け、甲板の中央に四本柱を作り、其れに赤白の淡垂を巻き、一寸土俵場とし、疊の上へ白い布を敷き詰め

天井は上甲板の上であつて、其れに日、英、米の國旗を四方から、絞りに結び附けて、圓うに張り、其の真中に電燈三つ點けて居る。椅子を左右に並べて、一等客と二等客の觀覽に供するやうにし、其の後方の船橋に幔幕を掛けて、風を防いで居る。又所々に岐卓提灯を釣るせるなど、なか／＼裝飾を凝らしたものである。相撲、柔術、勢獅子、鼈象などの假裝始まる。其後洋人樂器を持つて出る。ハモニカ、二輪加には覺勝五郎。幕が開くと、五人男が一人／＼花道から出て来る。西洋の婦人聲を限りに笑ふ。五人男が舞臺の真中に出て、順々に語り終れば、捕手後ろから現はれて、十手を舉げて捕へに来る時、幕閉まる。次に佐倉宗五郎の甚平渡し場を演る。紙の雪がちら／＼と上から降つて来る。なか／＼嗜好を凝らしたものである。其次に飴卷きの藝當をやつて、客人に飴を分配して歩るいた。千秋樂に、假裝行列が／＼と出て来て、一周すること數回、實に面白いもの計りであつた。客人の評に、黒人をもあつと云はせる藝人が居ると云ふ是れが終ると、日本人も洋人も萬歳を叫ぶ。直ちに柱を取り離つして、片附けると、洋

人の男女手に手を執つて舞踏^{ダンス}をやる。這處に興の盡くる所を知らずに、見て居る間も、船は絶間無しに太平洋の上を進航して居る。

●同二十七日 晴天 涼しい風 船長の誕生日

今日一日甲板に出て居ると、涼しい風が遠慮なしに吹いて来る。今夜は船長の誕生日とて、なか／＼御馳走があつた。船長は英人であつて、色の白い苦みのある、鋭い眼をした、美髯生やした好紳士である。卓上の植木鉢には各國の紙旗を差し込むで、眼の冴ゆるばかり、美しい。今晚も亦下等客の爲めにとて、演藝會が甲板下で催ふされた。

●同二十八日 晴天 島の發見 布哇に近づく

今朝両眼鏡を宛て、見ると、幽かに右の水平線上に、二見ヶ浦みたいな島影が見ゆる。人も知らぬ此の太平洋の中に、初めて、女夫島を發見した時の嬉しさ、喻へられず。これは鳥島と名づくる無人島であるとか。彼の俊寛僧都の住みしてふ、鬼界ヶ島は這麼のであつたらうか。

夜室外へ出ると、大きな島が見ゆる。長い山脈が續いて居る。今まで見ぬなんた陸地が漸うく現出した。朧月が雲にかすみ、淡く光を水に映じて居る。聞けば此島は、布哇群島の一つとかや。

布哇見物

●同二十九日 晴天

ホノル、上陸||熱帯地の風物||甘藷畑||日本人の労働者

パリーの絶景||ヤング、ホテル||賃銀問題||多数の人種

水族館||望月樓

今朝起きて見たら、最ふ布哇に着いて居た。船窓から覗いて、妙な山が見えると云ふと、花沼君が、彼れが金剛石頭ダイヤモンドヘッドと云ひますと致へて呉れる。食堂で検疫を受けて、甲板に出ると、船は早や棧橋に横附けに爲つて居る。

一周會員は漸よく、ホノル、に上陸して、第一回の見物を初める。是れが外國の土地の踏

み初めである。グック社の僦ふた自働車に打ち乗つて、日本人街を通る。學校へ通ふ日本の兒童等までも跣足である。爺の御者が日ふのに、跣足は衛生に宜い、日本の東京で跣足で歩るけば、罰金を徴られると聞いて驚いたと云ふ。女學校内を貫け通つて、富豪レイドマンの廣大な所有地を走る。唯さへ變つた熱帯地の風物最と珍し。青々した草の中に、眞紅の花が咲いて居る。深緑な色に加へて、棕櫚、椰子の樹が枝を擴げて、傘を開いて居るやうだ。其のはききとした風景は、迎も日本で見られない。鎌田君が爺にパリーへも行くのかと問へば、何處へも行かぬ所が無いと大氣焔である。甘藷畑のある所まで、九哩の間、一目散に登た走りに馳りつけると、其處にロースの製糖會社がある。案内を請ふて、簡単に製造の模様を見た。何分機關車で甘藷を運ぶ大仕掛である。此處には日本人の労働者ばかり働いて居る。夫れから日本人労働者の生活状態を視に行く。二三人の男が出て来て、懇ろに説明して呉れる。私等は日給であつて、日本人と支那人とは給料が廉い。元來の條約がつまりませんと零ぼして居る。此男等は夜勤である

訣れを告げて去る。

十八

ヤングホテルの前へ来る。幾層の大高樓眼も眩めくばかり……此處で自働車を還へして、ホテルに入る。四角な所に集まると、一瞬間に颯と昇る。是れが大阪の博覽會にあつたエレベートルかと氣が附く。待合室で布哇新報社主柴氏と會ひ、名刺を示す。食事中種々柴氏の布哇談を聴く。我が移住民は明治元年より始まり、現今實に七萬人の多きに達して居る。廣島、山口、福岡、和歌山の者多く、藝者は皆廣島出であると云ふ。漁業の權利は我同胞の占むる所である。近頃日本労働者の賃銀引上問題が起つて居るさうな。日布新報は強硬論を唱へ、ストライキをしても決行せよと説けど、我社は温和説で労働者の請願に依つて、自づから資本家をして承諾せしめよと云ふにありと説かれる。支那人に選舉權あるのに、日本人に無いのはつまらないと云はれる。昔から此島には蛇が居ない。若し移殖する者あらば、罰金に處すと云ふ規定があるげな、是れ亦面白い話談は同氏の家庭教育論に轉つる。私は子供を最初に西洋風に教育し、然る後日本へ遣り

て、日本風の教育を施さんとの理想であると、是れ實に珍しい説である。食後例のエレベートルで少し下り。屋上の庭園ガーデンに出て、市街を瞰下すと、同氏は彼處が淵廳で、彼處が裁判所であると指される。斯て亦エレベートルで下り、ホテルの門口を出た。徒歩で布哇新報社へ寄つて打電を頼むだ。

同記者芳賀氏の案内で、市内を歩くと、種々様々の人種に出喰はす。支那人、朝鮮人、葡萄牙人、其他洋人及び日本人と云ふ具合に出合はすので、這麼不思議なことは生れて嗜めてだ。殊に土人の女のふさいくなことと云へば、實にお話し出来ない。色黒く眼をくるく／＼として、麥酒樽のやうに腹を膨らして、ひよ／＼と歩いて居る。而かも洋装であるから實に醜い姿で宛るで蝦蟇のやうだ。這麼滑稽なもの無いと思ひながら行くと、大きな肉屋の前へ出て来る。牛肉や、豚肉がぶら下つて居て、赤い肉が釣されて盛んに賣らるゝ光景、おかしとも可笑し。正金銀行へ寄つて兩換し、電車に乗つて水族館へ向ふ。暑い所とて、電車の兩側は隙いて居て、見るからに涼しげである。芭蕉や椰

十九

子の青い葉に蔽はれて、最と麗しき家々の前を通りて、公園内を走つて行くと、いつしか水族館の前へ着いた。館はさして宏大ならねど、太平洋の珍奇な魚類が見らるゝ。縞のあるのや、髭のあるのや、最とも怪しい魚ばかり、鱗が長くて絲のやうに延ひて居る、キヒキヒーと云ふ魚が居る。或は口の尖つた不平面の魚が居る。造物者の戯れも程があると思ひつ同館を出づ。青々とした毛氈を敷き詰めたるやうな、芝生の上を行くと、赤い自働車が勢ひよく走つて来る。此の麗しき景色を眺めて休息で居たが、電車が来たから、一寸乗つて望月樓とか云ふ日本料理店へと行つた。

僕は浴衣と衣更へ濱邊にある風呂に入る。浴湯の後、椅子に倚つて、海を見て居ると、今し夕陽が水平線の雲に隠れた。あゝ!! 太陽は世界の何處をも照らす。土地變はり、人變はるとも、是ればかしは變はりない。暮れ行く望月の庭を見ると、青々と草木が繁つて、鳩が高さ箱の口から首を出して居る。萩原君、大熊君は柴氏に隨いて行つたから、僕も同氏の寓へ行く。二階の一室でウキスキ一の乾杯をやる。柴、芳賀の兩氏は澁川椋十

君と新聞屋同志の話をする。其處へ電話がかゝつたから、皆暗き路を辿つて望月樓へ歸る。長さ卓子を中央に、地洋丸の乗客日本人及び船員と俱に、胡座組むで着席。酒宴酣にして、柴氏の發聲で地洋丸の萬歳、世界一周會員の萬歳を三唱した。一同歡を盡くして解散し、囁めて黒馬車に乗つて、街燈寂しきホノル、の町を驅けて、船へ歸つた。棧橋に繋げる地洋丸は道に美事な船である。

●同三十日 晴天 布哇を去る||米國に向ふ
午前八時出帆、布哇を去り、漸よ／＼米國に向ふ。

●同三十一日 晴天 浪の音||靜かな海
船は唯ジャ／＼と白浪を押し立てて、行く。布哇へ向つた時よりも、波は非常に靜かである。

●四月一日 晴天 日本食||一痕の月
今夜は日本食であつた。食後鎌田君と、艦の方へ行くと、一痕の月中天高くかゝつて、

朧に波上を照し、舵の跡白う、龍の如く渦巻いて行く。

●同二日 晴天 機関部―書籍の寄附

石川機関長の案内で、僕と萩原老人と宮島翁の三人は、船の機関部を見せて貰つた。幾條の鐵梯をボツ／＼下り、船底に達し、能く機関部を看る。地洋丸の機關はタービン式と云ふて、石炭を用ひないで、重油の燃力で、蒸氣力を起すのである。罐と罐との間を潜つて行つた時は、随分氣持が悪るかつたが、兎に角非常な燃力であることを知つた。三個のスコロクが快速力で廻轉して居る。是が水を蹴る車輪の軸となるのである。何分三つも廻るのだから、速い筈など、皆感心した。昇條の途、發電所を看て、亦鐵梯を上つて、我が船室に歸る。是を例へて見れば、人間の心臓部である。幾ら立派な羅針盤を備へても、是が無つたら、船は動かないのである。僕は其裝置の壯大なのに喫驚した。日本人の船客半ばを占るも、日本の書籍が無いからと云ふので、寄附金を募る。僕は寄附金些少と『二萬三千圓』と云ふ書を寄贈した。

●同三日 晴天 兒童―お餅

僕が喫煙室に居た時。西洋の兒童が扉を排して、這入つて來た機づみに、其扉が日本の兒童の頭に突き當つたから、其兒童は酷しく泣き出した。處へ住友の田中さんがやつて來て、傷はつて居ると、英國の翁さんもやつて來て賺かす。其翁さんが、支那人のボーイに命けて、湯を持つて來さし、頭を擦つてやる。僕は此時、東西の人情に變りが無いのに、感心して見て居た。西洋の兒童等が其處へ、どや／＼やつて來る。實に可愛らし

5。
午後三時頃、日本船客のみに、お餅を分配した。痒ゆいところまで。氣が附くとはこれを謂ふにや。

●同四日 晴天 兄さんへ―上陸準備

朝も、晝も、兄さん宛ての手紙を書いた。明日の上陸準備の爲めに荷物を整へた。

第二編 米國日記

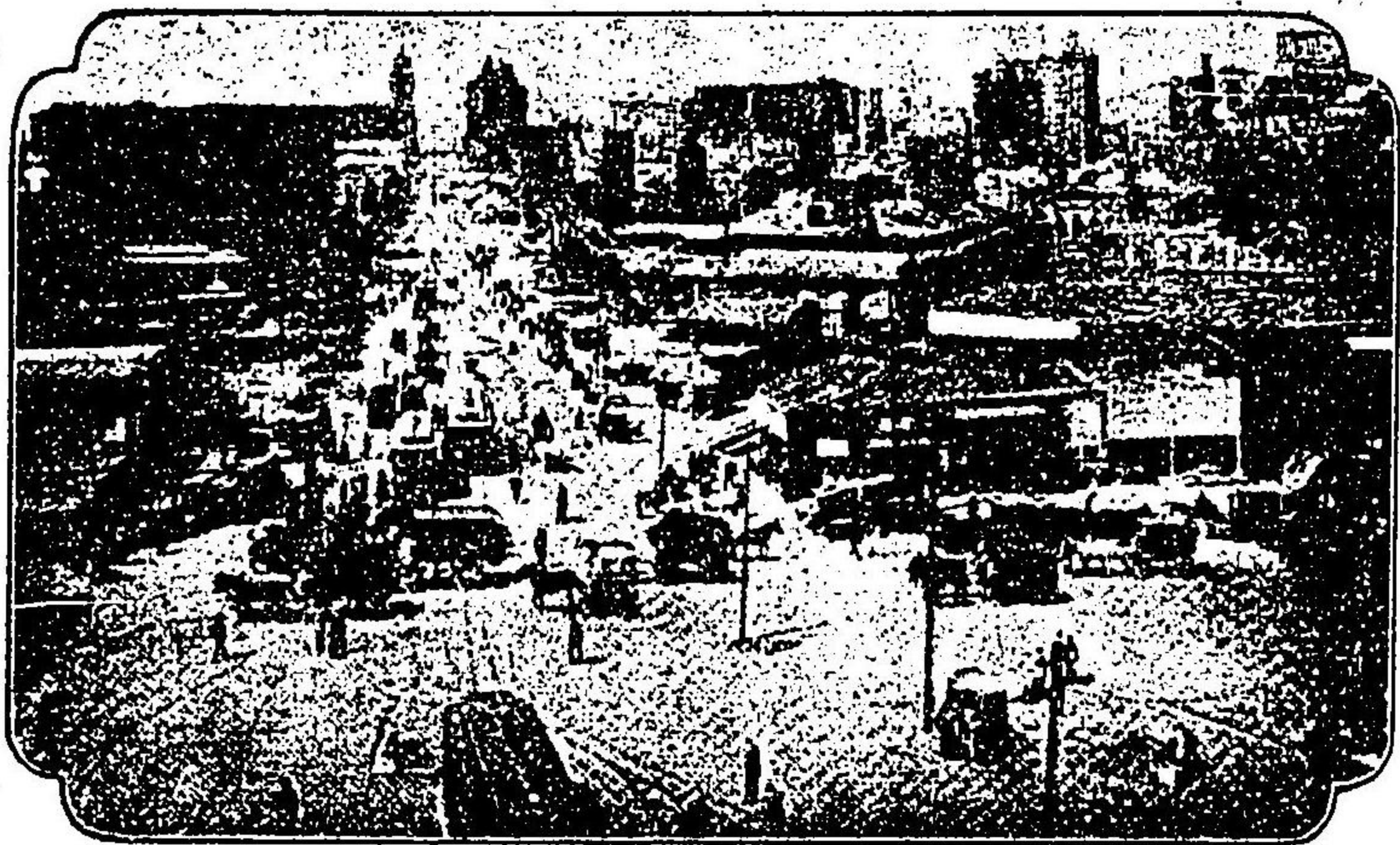
二十四

桑港上陸 (一)

●同五日 晴天

金門ゴールデンゲート 五月蠅い尋問 フェアモント、ホテル 滑稽 百科店
小公園 夜の偉観

早朝甲板上に出て見ると、月が朦朧りと金門灣を照して居る。さては愈々米大陸が見え
たかと、狂喜した。何時しか灣内に停船すれば、検査官がやつて来る。皆食堂に待つて
居ると、濟ました顔して、お出ましになる。洋人の船員がミスター某と呼ぶに連れ、一
人づゝジロくど睨む查公の前を通れば、其れで終ひである。尙移民官に日本人丈は、
例の問題があるから、五月蠅い尋問を受ける。而かも此奴日本語で、妻があるかとか、
財産が幾らあるかとか、何んの爲めに來たかとか質問する。實に失敬千萬な應待である



桑港の全景

僕は大に癢に觸つたが、我等は世界一周と云ふ肩
書があるから、無事に早く通過する。人は皆甲板
上へ出て、四方の氣色を見て居る。左方に見ゆる
のは桑港、右方に見ゆるのはオークランドである
と云ふ。港の中央に一孤島がある。是れは検査官
の住ひで居る所である。桑港は何だか四角な家ば
かり建つて居る。薩張り趣きが無い。丘上に際立
つて高く聳へて居る建物がある。是れが我等の宿
泊するフェアモント、ホテルに於ゐる。地洋丸は
日本の商船旗を翻して、威風堂々と某會社の船渠
に入る。甲板から、船渠の二階へ橋を架け渡す。
其の造作の無いのに喫驚する。荷物の運搬に暇取

つて、早く上陸したくて、身體がもちもちして殆んど堪らない。一時間でやつと橋を渡つて、地洋丸から離れる。税關の荷物の検査は案外簡単に済んだ。そこに紐育のクック社から、出迎ひに来て居たリード君と握手し、互に名刺を交換した。やがて階段を下りて、自働車に乗り、愈よ／＼桑港市中に入る。

地震の慘狀未だ残つて居るとは云ふものゝ、大厦高樓雲を突かんばかりに高い。電車と馬車と横辻に出遇ふやゝこしさ、上陸匆々呆氣になる。俊坂を物の數ともせず駆け上れば、我等の眼指すフェアモント、ホテルに着いた。玄關内に入れば、ツル／＼の石疊、如何にせしや、大熊さん、滑べりかける事二回に及ぶ。僕は此の滑稽に大に笑ふと、鎌田君も噴き出して笑ふ。蛇紋形の大理石の四本柱が、物の美事に突立つて居る。例のエレベータで、颯と上りて、部屋に案内され、老人と一所になる。又エレベータを下りて、食事に行くとき、廣い食堂に導かれて、我等日本人は殊に奥へ連れて行かれる。唯最上立派と云ふより外に無い。食事中盛んに啾哢として音楽起る。

食後通信記者清瀬氏の案内で、自由散歩を爲す。凌雲閣も斯くやとばかり、巍然たる大建築物がすらりと並びで居る、ろろ／＼と婦人が裾を褰げて、活潑に歩いて居る。實に婦人の外出の多いのには舌を巻く。百科^{デパートメントストア}店に入れば、無数の男女が、絡繹として織るが如く、各店を往來して居る。我等は早く其處を出で、一寸日本道具店に寄つて、他と訣れ、老人と二人スケータ、パークに少憩してホテルへ歸へつた。

夜、獨り散歩に出て、坂上に立つて見渡せば、アクトが市街の上に、銀砂の如く、星の如く煌々燦々として光つて居る。思へば日本の都會は未だ寂びしい物、日本の貧弱を歎せずには居られない。是れと云ふのも全く富の力である。

(二)

●同六日 晴天 駈捲くり||兵營||金門公園||シーロック||ケーブル||招待
女尊男卑

けふからクック社の案内となる。皆自働車に乗つて、市中見物を初める。車は歩哨の立

てる兵營前に來ると、はたと停る。リード君が何にか囁けば、オーライと云ふや、車は又したゝかに、兵營内を走る。兵營とは云ふものゝ、雑としたものだ。可笑しい事には妻君のある士官と、獨身の士官と住家が別になつて居る。樹林の間を過ぎると、忽ち海が見ゆる。こゝに砲臺がある。グル／＼廻ふて行く中に、金門公園ギルデンゲートパークに出る。自働車で、同公園内を駆け捲くつて、一周する。公園を出で、圖ある山頂に駆け上る時、南無三寶！身體が自働車から、飛び上るやうになる。皆とよめき笑ひて頂上に達す。こゝは桑港を瞰下すに、一番好適の場所なのである。

山を下つて、ガーデンを通はり抜けると、海濱に出づ。こゝはシトロックと云ふ、海水浴場であつて、大道路、旅館、公園、交通機關と云ふ具合に、文明的設備、遺憾なく整ふて居る。沖には岩礁が點々見え、其の上に海豹などが居た。残り惜しげに振り返へりつ、ガーデン内を抜け通つて、桑港へと歸へる。

午後、ケーブルと云ふものに乗つた。ケーブルとは、俊坂上に車を上下させるものである。其の構造は、レールの中央に、溝がある。其の下に繩が絶へずガラガラと上下して居る。其れに車がかゝると、自由自在に上下する仕掛けである。桑港と云ふ所は、極めて俊坂の多い所で、恰かも組を折り重ねたやうになつて居る。其れが遠くから見ると、レールがびかく／＼に光つて、大階段を爲して居る。段毎に市街の道路になつて居るので、斯かる山地に大厦高樓が、屋氣樓の如うに、突立つて居るのだ。會員は物好きにも、其のケーブルの箱に乗つて、市中見物を爲す。箱が坂に差し懸かる時、身體が斜になる。非常に急俊な坂を、物の數ともせず、轟然らに上下する。實に痛快極まるものである。我等は此の有丈のケーブルに乗り廻はした。

夜は、東洋汽船會社の、支配人白石氏の招待に預かり、小川亭で日本料理の饗應を受けた。ホテルに歸へりて、例のエレベーターに乗れば、後ろから友に袖引かれる。あゝ忘れた。女レディが居るから、帽を脱らねばならぬ。ぬゝいまくし。

●同七日 晴天

渡船場||汽船から汽車||オークランド||カリフォルニア大學

朝、渡船場フェリービルディングに至り、オークランド行の汽船に乗る。停車場と船の床板と一直線であるから、赤毛布は何時乗つたやら知らず。其中船は船渠から離れて、静つくと波を蹴つて行く。船の舳に立つて居たが、遠近のけしき得も云はれず。青い孤島から他に眼を移すと、白い鳥がひらりと波の上に飛んで居る。船は程もなくオークランドについて三角形の船渠にとつさりとつさりと狭まつて終ふ。停車場に出ると、其處に大けな汽車が待つて居る。呆氣になつて、其れに打乗れば。蒸々と進みて、機關車にぶら下れるベル、ガンく、ガンくと響かせて走る。汽車はオークランドの市街の道路の上に停る。驚くべし煙を吐く汽車が、市街の中を走るとは……あゝ。

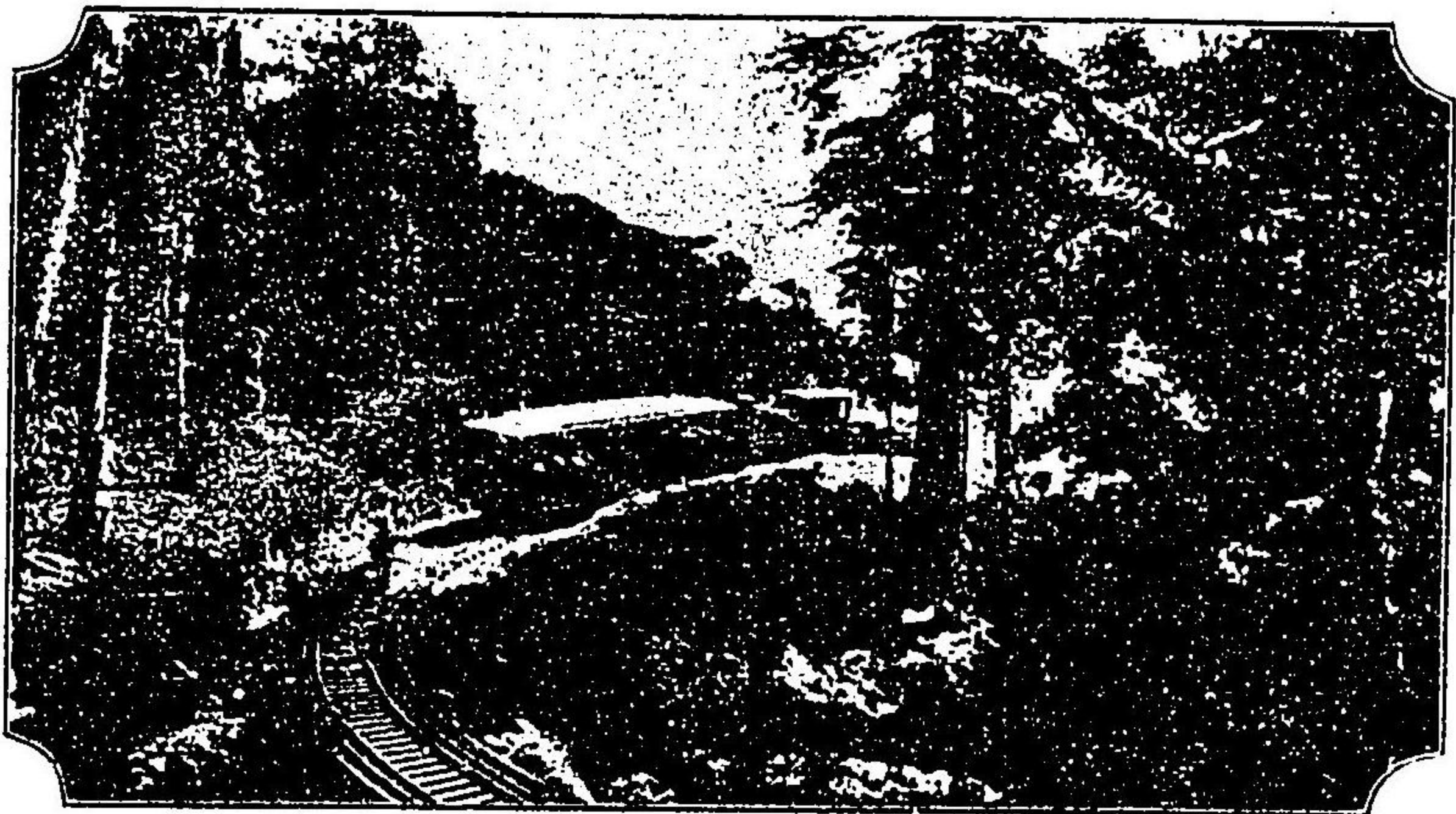
やがて、カリフォルニア大學内に入る。或る日本の留學生に依頼して案内して貰ふ、講堂、圖書館、野天の演劇場、室内運動場など見る。喇叭の響きがする。何たらうと見れば、一群の學生隊がやつて来る。指揮官の號令で、横隊に止つたが、銃の操法がバラバラである。茫々たる廣地に、男女の學生が、ブツク片手に歩いて居る。米國は聞きし如く男女混合である。見物後、日本學生と訣れ、電車に乗つて、オークランドを去る。海上遙かに、棧橋の上を走り、汽船に乗り換へて、亦何時しか渡船場に着いた。

(四)

●同八日 晴天

タマルペー||氣象臺||商業會議所||取引所

けふも亦對岸へ渡つて、電車に乗り、ミルヴァアリーで輕便鐵道に乗り換へた。長い間待つて居たが、次ぎの列車がやつて来て、其れから多數の男女が、そろりと下車して、我が汽車に乗り込む。さて是れより、タマルペーの登山鐵道となる。箱の後方に、汽鐘車を連なぎ、重油の火力を盛んに出して、ジヨキくと山上へ折し上げる。蔚然たる森林内に入り、樹木つきて、忽ち海あらはる。汽車は最も活潑に、山をグルく廻ふて登つて行く。頂上に程近き所に、煉瓦作りがある。汽車は其の門を潜りて、停車する。我等は尙歩行で、頂上まで登る。氣象臺に上れば、金門灣の景雙眸に集る。姑し佳景を賞



道 鐵 山 登 の ー ル マ タ

して、下山し、酒屋サカヅに入りて、簡単な食事を爲す。其の後、亦汽車に駕乗して、螺旋の如く、グル／＼廻ひながら、ガラガラと下つた。あゝ實に愉快極まる鐵道である。日本にも這麼登山鐵道をこしらへたいものだ。

桑港に歸つて、大熊君の職務で、商業會議所に立ち寄る。鎌田君の通譯で、所長セウケイリバーク氏と大熊君との問答を聞いた。其の部室に、日本の國旗を交又して、漢字で歓迎の二字を其の間から、ぶら下げてある。尙其の下に、東京で、米國の實業家を歓迎した時の、電車の寫眞を懸けて居る。其れに櫻と菊で飾りつけて居るなど、全然日本物である。

ごとを知つた。大熊君は長時間質問する。バーク氏は僕にも名刺を呉れた。尙氏は議場を見せやうとて、其の室内を見せ、窓を開けて、桑港の市街を見せ、或は額を示して、是は六十年前の桑港であると云はれる。氏も亦エレベーターで下りて、我等を取引所に案内される。其處に多數の机がある。其れはサンプルを載せて、直買買をする爲めである。中央の壁に、各地の相場を記されて居る。殊に感じたのは、無線電信で、入港する漁船の名稱を報するやうになつて居る。日本の取引所なんか物にならない、議場の整理と云ひ、通信機關の完備と云ひ、如何に科學的に、秩序的に構成されつゝあるかに驚く。バーク氏は我等を送つて出られる。僕は其の親切に感じて、同氏と強く握手して訣れた。

● 同九日 晴天 桑港出發 千種萬態 寢臺付列車 べニシヤ 牧畜場 シイラ 子バタ山脈

我等は愈々是れから鐵道旅行を初める。停車場に居ると、燈が新聞を賣つて居る。片眼の爺も、ひよろ／＼やつて来て、柱に凭

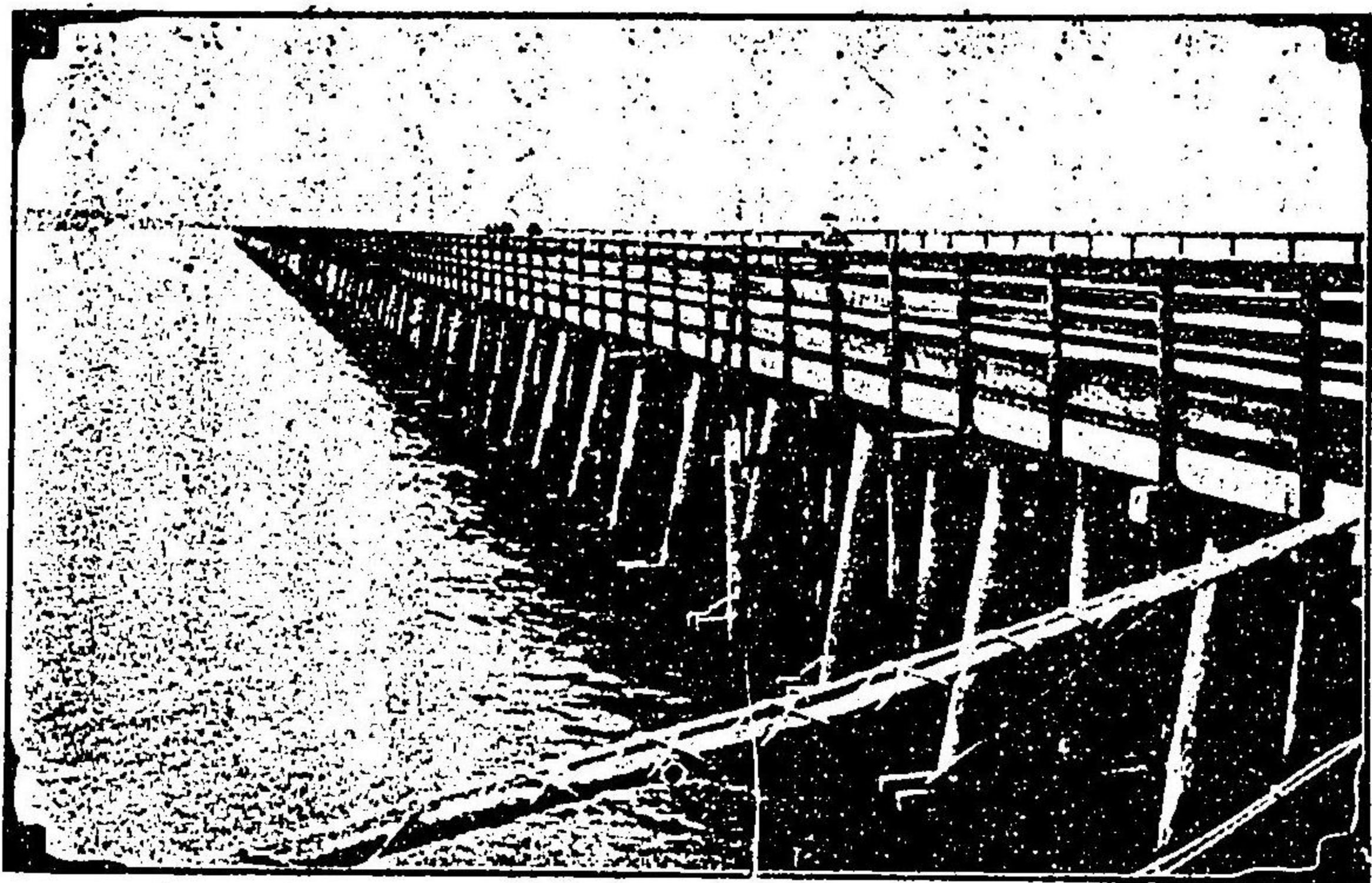
れて、新聞を賣る。一寸坊子が通はるかと思ふと、眼もさゆるボン子ツト被ぶつた美人が通はる。そこへ黒坊の夫婦が来る。僕と大熊君と、此の千種萬態を見て、啞然として不思議な感に打たれた。やがて渡船に乗つて、オークランドへ渡る。

南太平洋會社の列車に乗る。日本とは違ふて、プラットホームと云ふ物が無い。黒人が持つて来る踏臺に、足かけて、地面から箱に上るのである。數分の後出發ソートレーキに向ふ。列車の後方に、オウサーベイシヨンガー 看覽車と云ふのがある。こゝは客人が集つて、外の景を見ながら、雑談でもやる所である。とは云へ、喫煙する譯にはいかない。其れは別に、スモッキング、ルームと云ふのがある。氣もつかぬ中に、汽車は船に乗つて居る。此處はベニシヤの渡船場と云ふて、汽車を船に乗せて、蒸氣力で對岸へ渡す所である。彼岸についてから、汽車は陸のレールに移つて、飛鳥の如く走つて行く。廣るびろとした大平野に、彼處にも、此處にも、悠々と馬や牛や豚が散らばつて居る。食堂の硝子戸越しに是れを見て、笑ひさいめく。料理は皿盛りサッセルに持つて来る。献立の善いのに、此の鐵道は

有名であると云ふ。給仕は黒人である。いとおかし。原野つきて、雪班らなる山地に係かる。汽車は峻峻なる山道を上つて行く。今や眼の達する限り、白皚々の山地だ。而し汽車は二枚ガラスで、スチームが通ふて居るから、ちつとも寒うない。此の邊はシイラ子バタ山脈と云ふて、路機山脈の支脈である。是れを越へると、加洲からネバタ洲に入るのである。汽車は雪蓋ひを潜る事極めて多く、是れが爲め、實に鬱陶しさに堪へなかつた。海拔實に七千尺の高嶺である。

● 同十日 晴天 曠野—湖上の鐵橋

汽車は全くゆうべの中に、シイラ、子ヴァダ山脈を横斷した。けさ見れば、人跡絶無、寂寥冬の如き曠野のみ。今や、草も樹もない、鹽分含有の砂漠となつた。地平線まで、見透しが出来る。唯、遮蔽物は岩質巖々たる孤立の奇山のみ。是れより、有名なるソートレーキ湖上の鐵橋を渡る。以前は湖水の沿岸を迂廻したとやら、今は湖水に石を埋めて、土堤を築づき、波の荒い所に、橋を架けたので、世界に無い大工事であると云ふ。



橋 鐵 の 上 湖 キ - レ ト - ー ツ

三十六

距離は實に二十三哩。湖水とは云へ、淡水でなく、鹹水で、實に二割五分を占め、人體など、水心を知らぬ人でも、浮くさうだ。湖水を渡りオクデンと云ふ、停車場に着き、更に南折して夕刻ソートレーキ市に着いた。

ソートレーキ

●同十一日 晴天 市中見物||モルモン

宗寺院||大オルガン

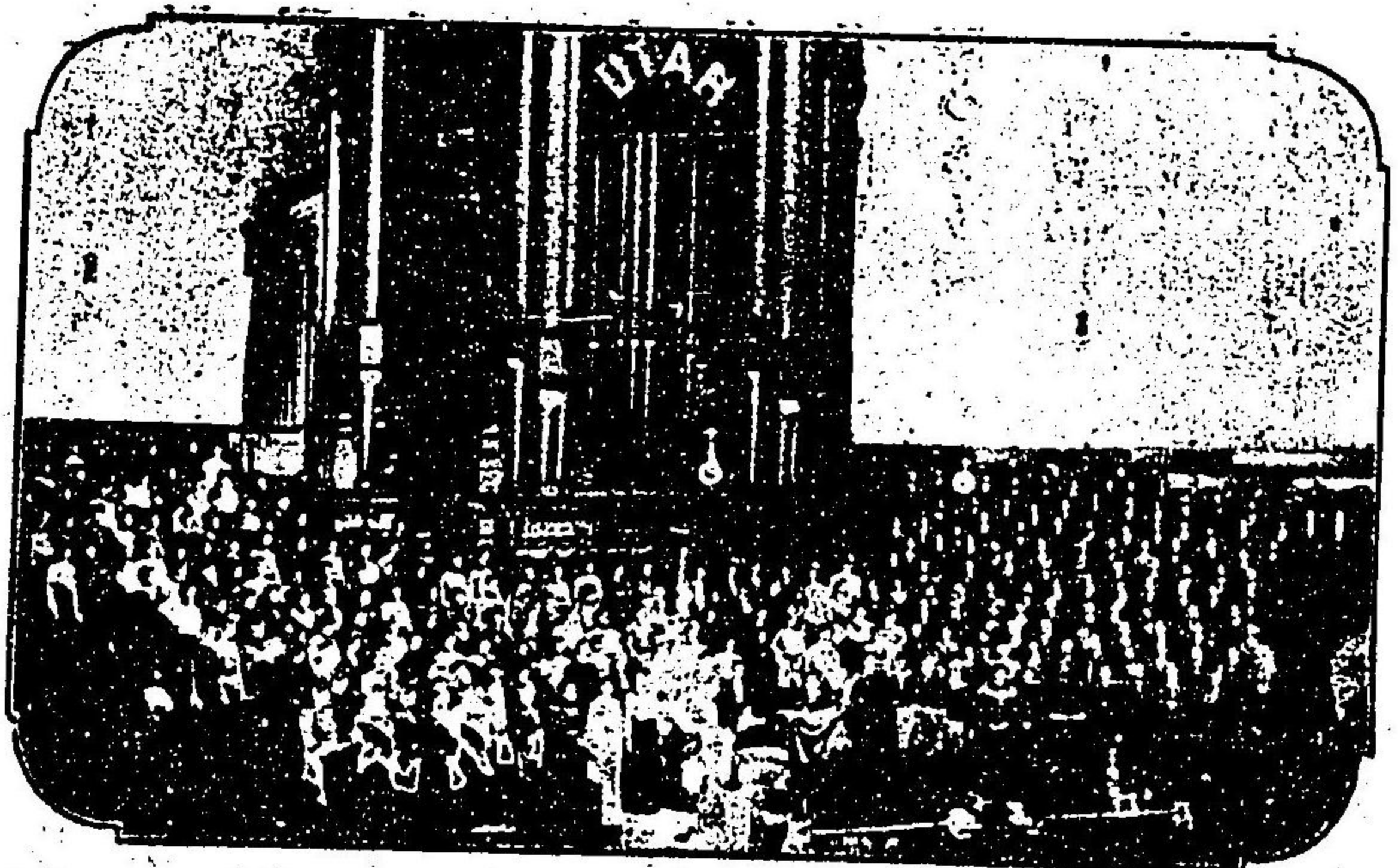
けさ雪がちら／＼して居る。例の自働車に乗つて、市内を一めぐり。田舎の街とは云へ、家高く、町廣く、電車が通ふて居る。開けてから、

たつた六十年、鑛山とモルモン宗寺院とで、這様に繁華になつたとやら。教祖ヤングの銅像が、寺院の横辻に立つて居る。坊主町を通はり、鷲の門を潜ぐり、南に走つて、市廳の前に至り、逆戻りして、市内の眼抜き町の町を通はり、寺院の前を西へ行き、更に引き戻して、モルモン宗寺院に立寄つた。

田舎漢と一所に、寺院に入り、一人の案内者の説明を聞く。同寺院を出で、更に甲の鉢の如うな、妙なかつこした寺院に入る。此の寺には柱一本も無い。ソシテ反響に、最も妙を得て居る。教壇の中央に、世界第一の大オルガンがある。長たらしい説明を聞いて後、階段の正面のベンチに、腰掛けると、壇上に立つ案内者の、帽子や、手を擦る音が、瞭つさり聞こへる。成程と感心して、同寺院を出で、本堂の前で、亦説明を聞いて後、一寸賣品店に入り、案内者に名刺をやつて、門を出づ。

晝食後、再び寺院を訪ひ、オルガンの音響を聞いた。我等のベンチの後ろに、日本人三名居る。聞けば、此の近在に住むで居るとか。其の中、又僧侶が日本人二名連れて来て

三十七



ユリア、パーチと云ふ。見れば、其の人は宮島の翁さんだ。連れは其の人の息子さんで、米國に居た人だ。大オルガンの樂奏が初まる。其の周圍に大男女學生が、起立して合奏す。或は高く、或は底オク、啾唳、響々と響く。之れを聞いて、ナール程と感心した。リード君が誘ふに、日本人皆同寺院を出で、門前で同胞と訣れ、迎ひに来れる馬車に乗つて、停車場へ行く。

やがて寢臺車に乗つてソートレキ市を出發する。

汽車は有名なる路機山脈に差し懸かる。雪深かく山高し。

●同十二日 晴天 路機山中 〓 バイクスピア

クローヤル、ゴーチの難場

汽車は白皚々たる路機山中を走る。遙か、眞白ろに見ゆるのは、有名なバイク、スピークの嶺である。飄々片々として、ふりしきる降雪中、唯、枯木の黒う見ゆるのみ。ローヤル、ゴーチの難場に、差し懸かれば、驚どろくばかりの巨巖が、峽間を壓して、蜿蜒長蛇の如く連互して居る。幾十哩とも知れぬ、斷崖絶壁の間を、汽車は三條のレールの上を走る。あゝ文明は能く自然を征服する。人工も豪らゐるものと、神も驚かるゝであらう。

いつしか路機山脈を離なれ、荒漠たる平野に出づ。夕刻コロラド、スプリングに着き、アラモ、ホテルに宿る。

コロラド、スプリング

●同十三日 晴天 コロラドスプリング 〓 鐘乳洞 〓 神の庭園 〓 大奇景

コロラド、スプリングはバイク、スピークの麓にある、人口三萬の二部落である。海拔六千尺の高地にあれば、自然氣候も寒むい。此の地は開けてから、未だ日も經たぬが、金山と、避暑客の來集とで、這様に繁華になつたと云ふ。

けさ馬車に乗つて行くと、冷めたい風が吹いて来る。キャノンの山溪に入れば、赭色の山ばかりで、少しも映がが無い。妙義山的の山を、グル／＼と馬車で登つて行く。是れが日本なら、歩いて、登らねばならぬ。其處が米國である。二頭馬車が山の頂邊まで登つて行くのである。馬車が山腹の一間屋の前に停る。試みに欄に據つて、雙眼を取ればコロラドの山水、指観の中に見ゆる。

我等は亞米利加の男女と一所に、とろ／＼大洞窟の中に入る。今まで闇黒の穴が、ぼつと電燈に照らされる。何だか白い大けな柱が、上から下までぶら下つて、地面に根が生ゑて居る。是れが、所謂鐘乳石ならんと思はれた。鐘乳石とは何ぞや、曰く、岩石中の石灰分が溶解して、一滴々々と相重なつたやつが、凝結して、氷柱のやうにぶら下つた

のを云ふ。其れが多くなると、門となつて、大鐘乳洞を形作るのだ。鐘乳洞は日本にもあると聞けど、コロラドの鐘乳洞は、世界に冠たるものであるさうな。更に隧道を潜つて行くと、電燈が點いて、四邊を照らす。霜のやうなものもあれば、蜘蛛の巢のやうなものもある。或は物觸るれば、音律を發するものもある。更に階梯を下る事、三四階に及ぶ。而かも這處まで、電燈が點くとは、流石は米國ぢや無いか。何れも千種萬態を極めて見る者啞然として、其の奇妙に驚かぬ者が無い。或は動物の形せるあり、或は舞踏せるあり、或は根から根を生やして播れるあり、或は却つて、上が細うて、下が太くなつた畸形がある。其れは／＼、鐘乳石が實に形容出來ない位、奇觀を極めて居る。土石の狼藉たる中に、名刺が散らばつて居る。其處で、僕も故さと漢字の方を表にして、名刺を其の中へ差し込む。やがて我等は伏魔殿から遁れたやうな氣持ちで、外へ出る。間もなく馬車に駕して山を下る。

馬車は神の庭園イッデガイヤンと名づくる大荒原に出る。非常に奇妙な、赤い巨巖が續々出て来る。双

子岩、寺院の塔最も珍らしく、バランスロック平均岩是れは釣鐘見たいな巖が、豆奴の脚の様に中心を支へられた、不思議な岩である。漁船岩、是れは大巖の上に、船橋を附して、宛るで、漁船のやうにしてある。海豹、熊岩は其の名稱の如し。更に進み行けば、ゲートウェイ、ロック門 岩と云ふのがある。此奴は奈良の大佛よりも、未だ巨い、仁王さん見たいな、大巨巖が通路の両側に、門になつて雄然と構へて居る。夜中でも通はれば、化物屋敷と云ふて宜い。馬車は此の間を走つて行く。振り返れば、茫々たる大荒野に、踞然として一大赤門が突立つて居る。あゝ是れを見た僕は魂消て物が云へなくなつた。一言評すれば、山水明媚の土地で無い。曰く、唯一大奇景のみと。嗚呼地球上には、奇抜な土地もある物かな。馬車は廣々した野を軋つて、某富豪の邸宅に入る。米國では庭園を開放して、公衆に見せる。日本のやうに、吝々して居ない。此の山家は、大資産家が故ごと世を忍びで、住むで居るのだと。庭園を通はり抜けて、荒野に出づ。聞くならく、此處の若主人は、父が大資産家であつたが、資産の大部分を公共事業に寄附し、残る小資産を貰ふたと云ふ

日本なら、公共事業には澁面作る所だ。子孫の爲めに、美田を買ふも好し悪し、マゝ幾分が悟つて居る。僕はかく思ふて居ると、同邸の家族を乗せた自動車が、颯と後から駆け抜けて行く。茫々涯しなき曠野を走つて、コロラド、スプリングの町に入り、アラモホテルに歸つた。左うだね、其の時は午後四時頃だつたらう。

此の夜、同地出發、志嘉古へ向ふ。

●同十四日 晴天 汽車中―諸洲を過ぐ

汽車は昨夜の中に、コロラド洲を出で、けふ一日ネブラスカ洲を走つた。疎林瞬たく夕陽の影、得も云はれず。緩びやかな丘陵に、隠れては出で、出でゝは隠る。眼のどゞく限り、山の姿を見せず。暮色野を染むる頃、ミシ、ツピの支流、ミッソリー川を過ぐ夜の中にイオワ洲に入る。

志 嘉 古 (一)

●同十五日 晴天 志嘉古著 山高帽 蟻の如き自動車

此の朝、志嘉古に著いた。馬車に乗つて、ホテルへ行つたが、道行く人間を見れば、男と云ふ男は、皆黒い山高帽を被つて居る。労働者でも、此の帽を被つて居るらしい。婦人は華美なボンネットに、派手な衣裳つけて居る。間もなく、コンGRES、ホテルに入る。夕方、散歩に出ると、サー驚いた。黒や赤の自動車が、蟻の如く、一杯行き停つた是れで以て、如何に市街の激烈な事が解るであらう。

(二)

●同十六日 晴天 公園 牛殺ろし マーシャルフィールド 舞踏會

けさ自動車を飛ばせて、街區殷賑たる市街をめぐり、ミシガン湖畔に沿ふて、ジヤクソ公園内を走り抜け、リンコルの銅像の立つて居る、リンコル公園を走つた。やがて其處を出で、ストツクヤーツへ行く。こゝは有名なる牛、豚、羊の屠殺場で、製肉製造所である。然かも、瀛軍が此の會社内に通ふて居て、鐘詰やベーコンをどんく運

び去る。何事も大仕掛けなのが、米國である。

我等は男女の見物人と一所に、屠殺場へ行く。マーシウだ。可愛相に、牛が狭い板圍いの所を、のそく列になつて、出て來ると、ケツから追はれて、しよ、い、ことなしに、一匹づつ、前の板圍ひの溝に出ると、見るから憎らしげな、面魂した奴が、筋張つた腕で、鐵槌を振り上げて、腦天に喰はす。忽ち一撃の下に倒れて、手足ビク／＼させて、藻掻き苦しむで居る。サー堪らん。此奴を見た僕は、慄へんばかりになつた。此の一瞬間に板が牛の頸へ落下すると、板が上つて、胴體がころりと溝へ落ちる。又そこに男が居て後肢を縛つて、釣り下げて、鋭利な刀で、咽喉をつくと、どつとばかりに、血液が龍のやうに流れ落ちる。此の悲惨な光景に、僕は嘔吐せんばかりになつた。あゝ惻隱の情ある者、唯れかは、平氣で見て居られやうか。決して見て居られない。釣り下げられた牛が、グル／＼廻つて行く中に、劊手、其の首を斬る。腸を斷ち、皮を剥ぎ、臟腑をぬぐり、骨肉を切り分ちて、其れ／＼各職へ送つて行く。鹽漬にした肉や、鐘詰が器械と人

力を待つて、續々運ばるゝ情態、唯敏捷と云ふより外に無い。鐘の製法、レツテルの印刷まで皆器械で取り扱はれ、クル／＼と鐘が廻ふて行くなど、實に造作の無い物だ。石鹼の製造所、冷蔵庫など巡つて、同會社を出た。ホット息ついて、溜息をつく。蓋し今日程酷い見物した事は無い。一寸事務所の賣品店に立寄つたが、尙も頭を痛めて其處を出で、高さ階梯をトン／＼上つて、昇降場から氣車に乗る。屋根がグル／＼動いて、市街の上を走る。抑も／＼高架鐵道に乗つたのは、是れが初めだ。

一ランチで晝食をやつて、志嘉古で有名な、マーシヤル、フヒルドの百科店デパート・イン・ストリートへ立寄つた。館内の中央に立てば、十三層の賣店が、碁盤の目の如くになつて、四方に聳いて居る。仰向けは金光燦爛たる圓天井が、輝いて居る。例のエレベータで、ツ／＼上つて、婦人の案内者に連れられて、各店を廻つて見る。何んでもかでも、望み次第、欲しい物は何んでも御座れ。買ひたい物は、何んでもある。小兒遊戯室、婦人室、醫務室、食堂ところはぬ物なく、設備の完成、裝飾の美、耳目を驚かす物ばかりである。試みに一

室より瞰下ろせば、底に歩いて居る人は、頭から見えて、べちやこうに見ゆる。各室に動いて居る人は、宛るで箱の中に動いて居るやうである。晝夜無しに、電燈が點いて居る。有繫に世界第一の百科店デパート・イン・ストリートである。物質的文明も馬鹿には出来ないと思ふた。此處で婦人に別れて、亦エレベータに乗れば、ツル／＼と、各室を見送つて、降つて来て見れば思ひの外、地下室であつた。其處に、貨車が電力で、ころ／＼と出入して居る。聞く處に依れば、此の地下線は、志嘉古の大商店が貨物運搬に使用するのだと。何とないした物では無いか。僕は同店で、數點の品物を買ひ購めて、皆と一所に出る。夜はホテルに舞踏會があつた。僕は其れを見なかつたが、舞踏會に来る女が、異様な服裝して、そろ／＼とホテルへ練り込む。

(三)

●同十七日 晴天 領事館—博物館—風變はりのホテル

午前中領事館を訪問した。領事館と云へば、一間屋敷のやうに思ふたろうが、左うで無

い。矢張り、エレベーターで上つて行くので、一室借り受けて居るに過ぎ無い。其處には諸會社、諸官舎に分割されて居る。飽くまで米國は平民主義だ。官尊民卑の風は、此の國には少しも無い。清水領事に刺を通じて、面會した。

正午前ホテルへ歸へる。晝食後、コンGRES、ホテルから地下の堅道を通つて、彼方へ出ると、オーヂトリウム、ホテルである。トンネルは道路の下を潜つて居る。両ホテルは同一會社が持つて居ると云ふ。オーヂトリウム、ホテルには、日本式の繪畫。花瓶、置物など飾り付けて居る。

午後は電車に乗つて、ジャクソン、パークの博物館へと行く。動物の剝製に面白い物が多く、亞米利加主人インヂアンの、製作品及び風俗の模型が大に参考になつた。

●同十八日 雨天 汽車中ニ加奈陀に入る

此の日志嘉古出發、ナイヤガラに向ふ。我等が寝て居る間に、汽車は英領加奈陀に入る

ナイヤガラ瀑布

●同十九日 晴天 ナチュラル、フード會社ニ發電所ニ瀑布ニ美しい夕陽

けさナイズ驛に着いて、馬車に乗り込み、高さ吊橋を渡つて、再び英領加奈陀に入る。此の時英米兩國の税關を通過した。我等クリフトン、ホテルに入る。對岸には音に聞えず、ナイヤガラの瀧かゝれるも、未だ白霧模糊として、瞭つきり見ぬない。されどテーブルに據つて居ると、自然と霧取れて、こゝに初めて世界第一の瀑布を發見した。左方のはアメリカ領の瀧、右方のはイギリス領の瀧である。さて朝食を終ふて、馬車に乗りうれしき瀧見物にと出掛ける。例の橋を渡つて米領に入り、町を通はる。町を出ると、其處に河がある。此の川はエリー湖から、流れて来て、其れが斷崖絶壁に差し懸つて、所謂有名なナイヤガラの飛瀑となるのだ。未ださめやらぬ冬げしきに、しくしくと春雨がゝる川つらに、ふらくくと氷を流し行くさま、いと寒し。

不圖馬車がナチュラル、フード會社の前に停る。同會社はシユレデット、フキートと稱する、日本の素麵のやうなパンを製造する所である。應接に出た女は、頗る愛嬌能く、ちやらくらと饒べる所、いかにも助才ない。其れからボーイに案内されて、製造の模様を見る。麵類を梨にしたる、乾し上げたり、焙籠に掛けたり、宛るで、手をもてせるが如く、箱に詰めて折紙に包む所など、皆機械でないものなく、其れを順繰りに、次ぎから次ぎへ、送つて行く所、實に鮮やかなものである。此處の工場は清淨であつて、空氣光線の流通能く、職工の待遇が宜いと云ふ事である。下の接待室に居ると、二人の女が居たが、先きの女が早口で、喃々と饒べり續けて、連りに愛相を振り蒔く。此の女がフキートに、チャムを附け、牛乳などかけて、皆に分けて呉れるから、僕も毒味をやる旨くは無いが、すか／＼として、淡つぱりとして居る。皆此の女に戯ひれて、テーブルを離なれ、ボーイと、二人の女と握手して、同社を出た。

亦馬車に乗つて、愈々瀧見にと行く。或る石橋を渡つて行くと、アメリカ瀧の左方に出た。僕はやをら馬車から飛び下りて、岨路を辿つて、瀧の落ち口に出て、其の上立つて見る。あな恐ろしや、千丈に餘まる懸崖に、雪崩の如き氷塊を載せて、蔦らに、谷底に落ち、珠簾の如き大瀑布となる。飛沫四散、爽氣身を襲ひ、噴騰洶湧、激湍を一掃し山壑も撼かんばかりの、雷鳴の音をさせる。蓋し宇宙間の一大壯觀である。僕は沫に濡れて、坂を走つて上り、馬車に乗つて、元さし道に戻る。亦もや國境の橋を渡つて英領に入る。

公園を通はり、電車道に沿ふて行くと、殿堂の如き、宏莊なる建築物が、巍然として聳びへ居る。是れぞ有名な水力電氣會社である。刺を通すると、樓上、樓下悉く案内して呉れる。電力で、車輪が疾風迅雷の勢で、凄まじく廻轉せるさま、いと心地よし。エレベーターで地下に下れば、其處には動脈の如き大鐵管が、幾つとなしに、瀧津瀬の如く流るゝ水溜めから、導かれて居る。是れが水力電氣の原動力となるのである。斯くと知りつ、地下室を巡つて後、再びエレベーターで上り、發電所など見て、同會社を辭した

何にしる大仕掛けであるから、感嘆の外、置く所を知らなかつた。此處の水力電氣は、無限の馬力を有して、遠く紐育洲全體に及ぶと云ふ。ナイヤガラ附近の電車や、電燈、諸會社の器械は、悉く是れに依つて、配與されて居るのである。兎に角、世界第一の水力電氣と云はねばならぬ。

我等は亦馬車上の人となつて、馳せると、イギリス側の瀧が見ゆる。近づくに隨ふて、景致益々加はり、雄大な瀧となる。全く此の瀧は遠くから見ると、近くから見ると、雷鳴轟々すさまじき音をさせ、噴沫飛散壑に凝つて、水煙ひりとなり、空濛として其の姿を隠すさま、恰かも砲煙の立ち騰るが如し。又彼方には湖水が漂渺として際涯なき事海の如く、蒼々として漂ふて居る。怒濤の如く、折し寄せ來たる波浪の上を、翼白きガリー鳥が、水を掠めて飛べる様、壯快ども、痛快ども何とも云へない。かくて引き返へして、絶壁に沿ふて行く。イギリス瀧を後るに、アメリカ瀧を對岸に、茲にナイヤガラ

瀑布の全景を打ち見て、クリフトン、ホテルへと歸つた。

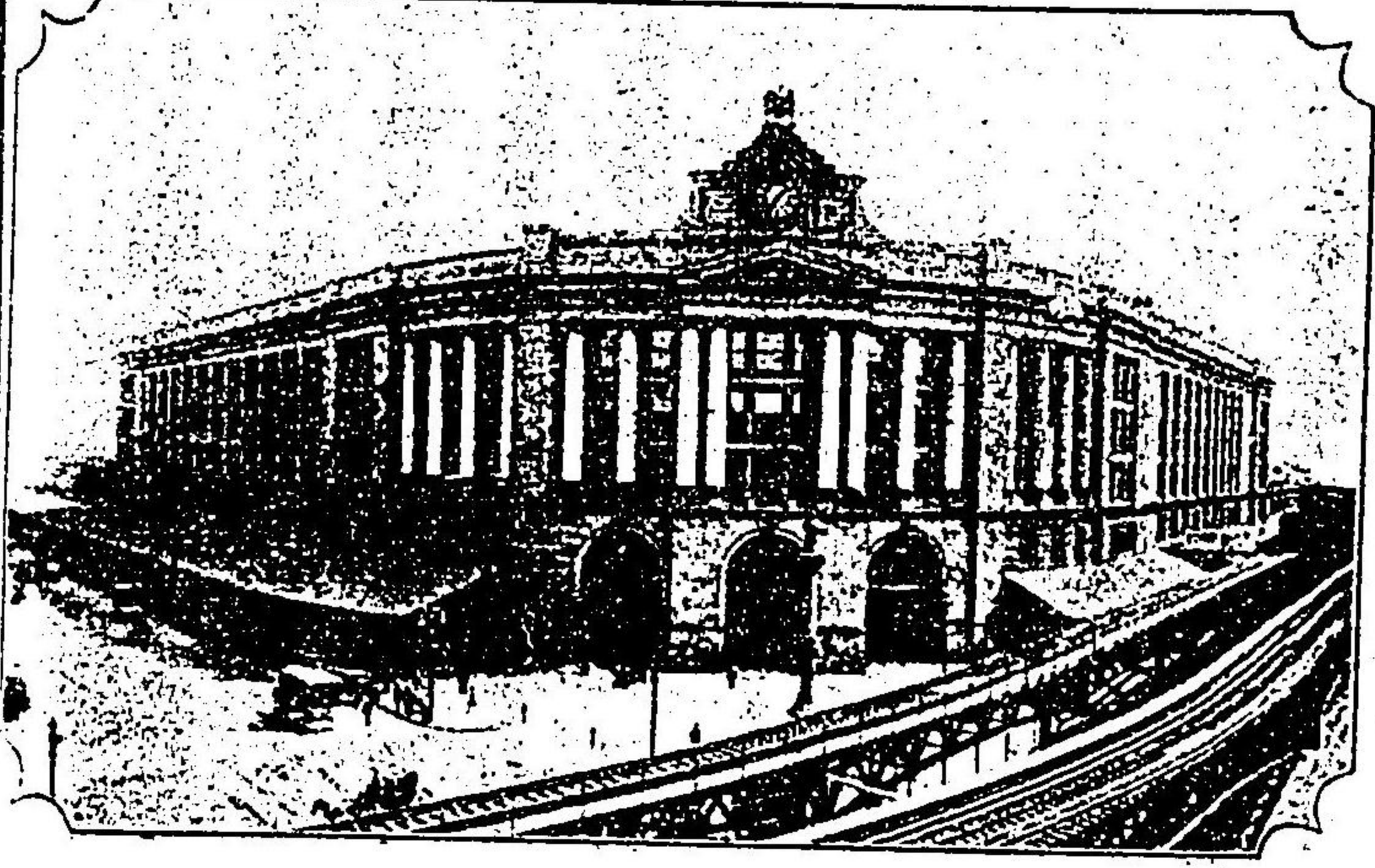
夕食後、ホテルを出で、馬車に打ち乗つて、大吊橋を渡る。對岸一帶壘壁の如き、懸崖を望みつ、越へ行くに、其處に米國の税關がある。官吏が小櫃にも名刺を出せと云ふから、皆出したが、僕は故ごと漢字の方を向けてやつた。夕陽眩ゆい、越し方の空、美しく染つて、霞ならぬ眺めに、惜しかりしナイヤガラの、見收めを爲し、停車場へと向ふ日暮れて、瀛車に乗り、ボストンへと出發す。車上の米人は、自由國の國民として、男女共生き々として居る。

ボストン (一)

●同廿日 晴天 迷兒||日本婦人||大けな蝦||國書館||葉大學||楡の木||芝居
昨夜の中に、ニューヨーク洲を過ぎ、けさ九時頃ボストン停車場に着いた。而し此の停車場につく前に、一分間停車と云ふ、際どい藝當があつた。一分間停車とは、近道をす

る乗客の爲めに行はれる。其れと知らぬ我等は、リード君と鎌田君と大熊君と三人、何時の間にか出て終ふから、後三人連いて行くと、早や硝子戸が閉つて、瀛車が動いて、彼方三人は何所へ行つたか、解らない。何うも出来ないから、凝つと視て居ると、無数の線路が入込むた停車場に入り、列車と列車と重なつて居る屋根下の暗らい所に著いた。其處で三人が蹈び下りて、見廻はして見ても、前の三人の姿がらつとも見ぬない。皆自暴になつて重い荷を携げて驛内へ行き、廣い待合室に入り、まご／＼して居ると、病氣にかゝつた棕十君がベンチに轉つた。此の時、僕が持つて居る毛

ホストランド大停車場



布を、棕十君に被せてあげる。棕十君は道案内が悪いとて、非常に立腹、萩原君も大に罵る。僕は仕方が無いから、繪葉書や、地圖など買ふて、ベチンへ歸へる。途方に暮れて居ると、丁度鎌田君とリード君が迎ひに来た。そこで棕十君が大に不平を云ふと、鎌田君は大に窮して、リード君に少しく柔げて通譯する。リード君は氣の毒さうに、鎌田君に、前以て注意したので、解つたものと、思ふて居たと云ふ。是れで事済むで、三人の迷兒が、停車場前から馬車に乗つて、ホテルへ向ふ。旅館はフランススイク、ホテル。黒い洋装の日本婦人が、受附處の前に立つて、我等を珍らしげに見て居る。棕十君が「貴方日本の方」と云へば、此の婦人は「ハア左うです、私は倫敦に居ました、世界一周爲されますのですか」と云ふ。僕は名刺を與へると、「ハア貴方は大阪ですか、其れでは私しとはお近くなんですねー、私しは京都ですよ」と云ふ。尙此の婦人と、少し語を交へて訣れ、一同と共にエレベーターで各自の部屋へと行つた。

此處の食堂は餘り綺麗などは云へないが、ウェイターが白人だから、黒人とは違ふて、

氣持ちがいゝ。鎌田君が注文した献立に、伊勢鰻よりも大けな鰻が、皿に一杯になつて出た。是れには大に持て餘まして、一番降参する。缺が多いから、蟹であるかと、ウエイターに聞くと、笑ひながら蝦であると云ふ。此の蝦は三對の缺を持つて居る。僕は這麼蝦見初めた。

午後はリードさんに連れられて、圖書館を見、電車に乗り、チャールス川を渡り、葉大^{ハヤシ}學前で下りた。彼の榆の木の下へ行くと、石碑に

Under this tree Washington

Command of the America.

July 3d. 1775.

と刻してあつた。此の記事は、華盛頓が此處で獨立戦争の指揮をやつた所と云ふ事である。其れから葉大^{ハヤシ}學内に入り、百年前からある講堂内を外から見、鳥渡他の校舎に入り、リードさんと小便して出で、庭園内を歩いて行くと、栗鼠が我等の前へ来る。此れ

と戯むれると、ちよこく走つて行つて、樹の幹へ攀ぢ上る。能く人に馴れたものよと云ひながら、同大學の門を出る。此の大學からは、前大統領ルーズベルトが出たさうである。皆、何にしに來たのか解からぬ。唯小便しに來たやうなものだと、不平云ふ。木々の梢緑なすパブリック、ガーデン内を行くと、銅像やら噴水がある。四方に散る噴水を、物珍らしげに見て、同公園を出で、或る勸工場に寄つて、エレベーターで、階上に昇る。何にも買はぬお客さんに、多くの敷物、段通など見せ附ける。いと可笑し。一巡りして其處を出で、山中商店に道寄りしてホテルへ歸つた。

夜は山中君兄弟の招待で芝居へ行つた。芝居とは云ふものゝ、眞の劇でなく、一種の曲馬的喜劇に過ぎない。番號附きの椅子につくと、丁度猿と犬の曲藝をやつて居た。猿が犬に跨つたり、或は小さな馬車や自転車を、人間以上に使用する。是れには舌を巻いて驚いた。幕が下りる。其の前へ女優が現はれて、ダンスをやる。鈴のやうな聲を振り立て、歌ひ、歌ふては、脚を蹴上げる。如何にも身體が浮き立つばかりに輕るい顔の

表情、満面に笑みを湛へて、愛嬌溢れて跳ねまはる。其の態度の巧妙なのに、初見の我等を呀つと云はしめた。幕が上ると、非常に滑稽な喜劇をやる。又幕が下ると、黒坊と日本人に扮した俳優が出て来る。日本人と云ふのが、顔へ黄ろに塗つたのが、氣にくはない。其奴が彼方へ行つてから、黒坊獨りダンスをやる。身體から脚のひよろつき具合が、實に何とも云へない。如何にも上手なものである。幕がスーと上ると、美しい少年少女が、綺羅星の如き衣裳を纏ふて立つて居る。彼等は手に手を連いて、躍どり廻はり手を離なしては、膝頭を舞臺の板に觸れて、飛び廻はるなど、脚が護膜かと疑はれる位である。色電燈が輝と映じて、五彩陸離たる光景となる。其の中を、亂舞して廻はる、花やかさ、さらびやかさ、否や早や、何と云ふて宜いやら……：：：：：混亂中白布が下りると間もなく、活動寫眞が初まる。其の寫眞は、タフト氏がパナマ地峡開鑿工事を、視察して居る處であつた。是れで閉場となり、一行は、山中君兄弟に案内されて、ウキスキーの乾杯をやつた。

(二)

●同廿一日 晴天

風雅な都トバンカヒールー商業會議所化學學校美術

館プロビデンス船汝は日本人か

いつもの通り、ボストンの市街を、自動車で見物、公園に通ずる道路を駆け抜け、富豪の住める街に出ると、未だ春に歸へらぬ、樹々の梢は若葉少なく、吹く風もひいやりして寒むい。車上から、市中を見ると、何とやら、風雅な家屋多く、往き交ふ人までも、質素で落ちついて居る。志嘉古の町を、歩くのとは違ふて、氣持ちよく、流石は、文藝科學の土地は興床しいと思ふた。志嘉古を大阪とすれば、ボストンは京都である。さなふ見し、公園の傍から、壯麗なマサチユセツツ洲の政廳の前を通つて行くと、やがて獨立戦争の古戰場として、名高いバンカヒールの舊跡に出た。其處には三角な高塔、雲を凌がんばかりに、聳つて居る。昔は草原であつたらうが、今は家が折し詰つて居て、是れが腥風慘血の土地と見ぬない、此の紀念塔を後に、や、こ、い、町を通つて行くと、

商業會議所の前に出た。同會議所に寄つて、エレベーターで上る。大熊君は、鎌田君の通驛で、書記長に來意を告げると、大に喜びで、書記長は取引の景況を見せる。ボールドに、チヨークで、諸地方の物價を記して、揭示してあるのは、桑港で見たと同じ事、其れが電信で知れるやうになつて居る。其處へセクターが來て、大熊君と握手する。無数の議員我等に注目する。書記長に、各室を見せて貰つて、彼れの部室に歸へると、彼れは一行にボストン商業會議所の目錄を贈つた。皆其の親切を謝して、再びエレベーターで下りて、同會議所を出た。ホテルへ歸つてから、一寸晝食に時間があつたから、前向ひの化學學校へ行くと、教員は物理、化學の各教室を悉皆見せて呉れた。而かし休業中であつたから、授業の模様を見る事が出来なかつた。

出發前山中君に連れられて、美術館へ行き、埃及の古器物、インヂヤン人の風俗、日本美術、裸體の塑像及び油畫を見た。午後六時、漸よ／＼山中兄弟に送られて、ボストンのバックベール停車場を出發し、皆さんお待ち兼ねの紐育へと差し向ふた。折りしも黄昏がる、原野を、輕るく走つて、全く暮れし頃フオール、リーバについた。夜雨蕭々たる中を、汽船プロビデンス號に乗り移り、困難の中を、荷物の積替、客室の占領滞りなくしてすませす。

船内の設備遺憾なく整ひ、食堂、音樂室等實に完美を極めて居る。樂奏の終はる毎に拍手起る。道が文明國の船丈ある哩と、其の贅澤を羨むだ。航海中三階の甲板に上つて艙の方へ行くと、先つきから、萩原君と疑問になつて居た、日本人が居た。彼れ日本人の癖に、我等を見て、物云はぬ失敬な奴と、互に憤つた人間である。萩原君が試めしに何に喰はぬ顔で、陸の電燈を見て、若し、あれから大分出ましたなど、云ふて見ると、一向通じないから、當人大に屏口垂れて、だ／＼とし、何にやら解らぬ事云ふ。僕はそこで、片語の英語で「汝は日本人か！」と問へば、「ノー、汝は日本人か！」と今度は彼方から、鸚鵡返へしに云ふ。「然かり私しは日本人」と答へて、「汝はいづこの國」などと尋ねると、「私しはアッタリアン」と云ふから、アッタリアンとは、甚麼國たらうかと、不

思議に思ふて居ると、其處へ鎌田君が来て、質問したら、伊太利人と知れた。元來米國には伊太利人の移住民が多く住んで居る。初め彼れを見た時は、頭髮と云ひ、顔の色と云ひ全く日本人であつたから、僕と老人とは、日本人に違ひないと互に云つた位である

紐育繁盛記 (一)

●同廿二日 晴天

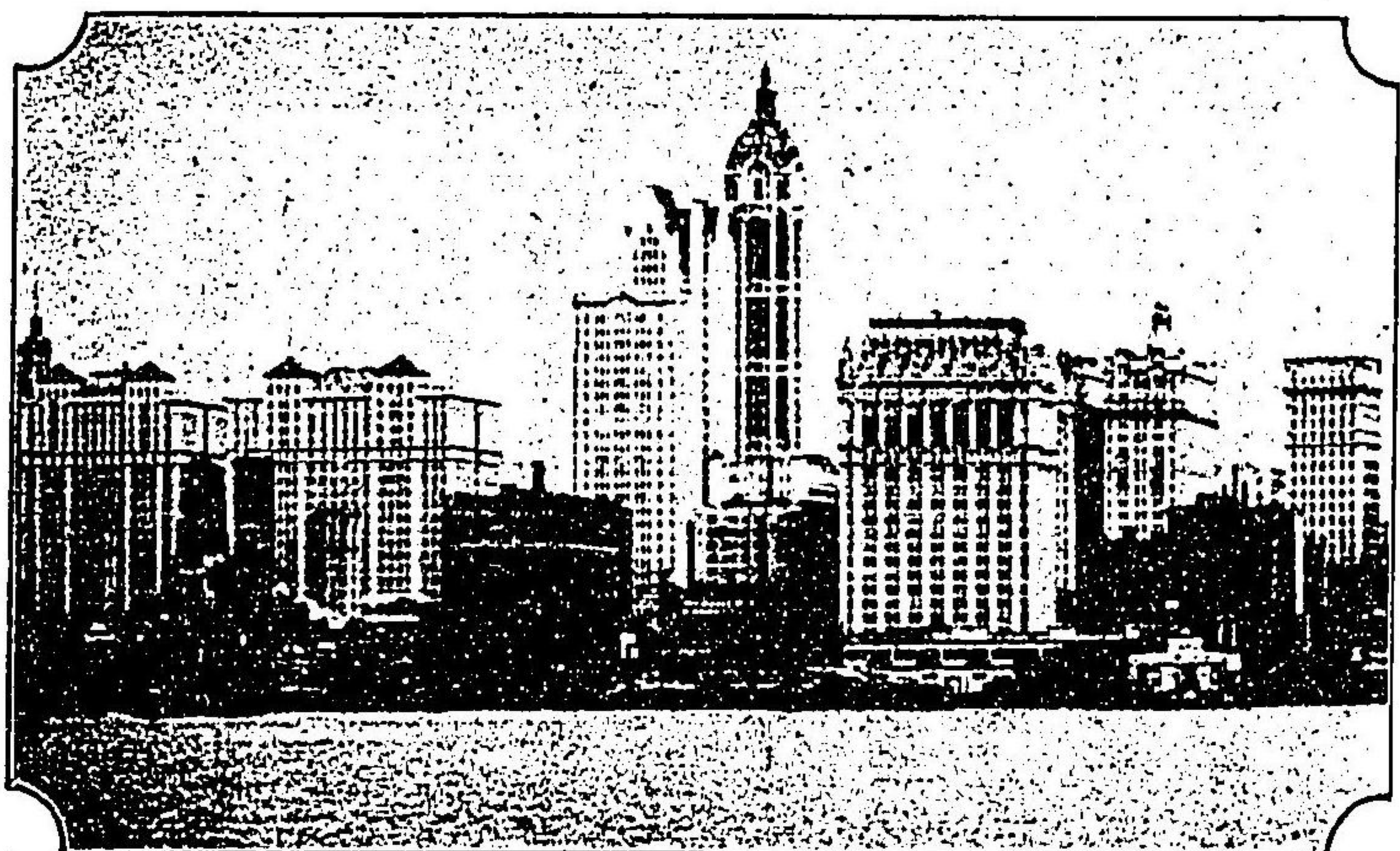
イースト河||紐育の外観||自由の銅像||無数の船渠||是れ

も世界第一か||シンガビルデング||高架鐵道||地下鐵道||

水野氏の氣焰

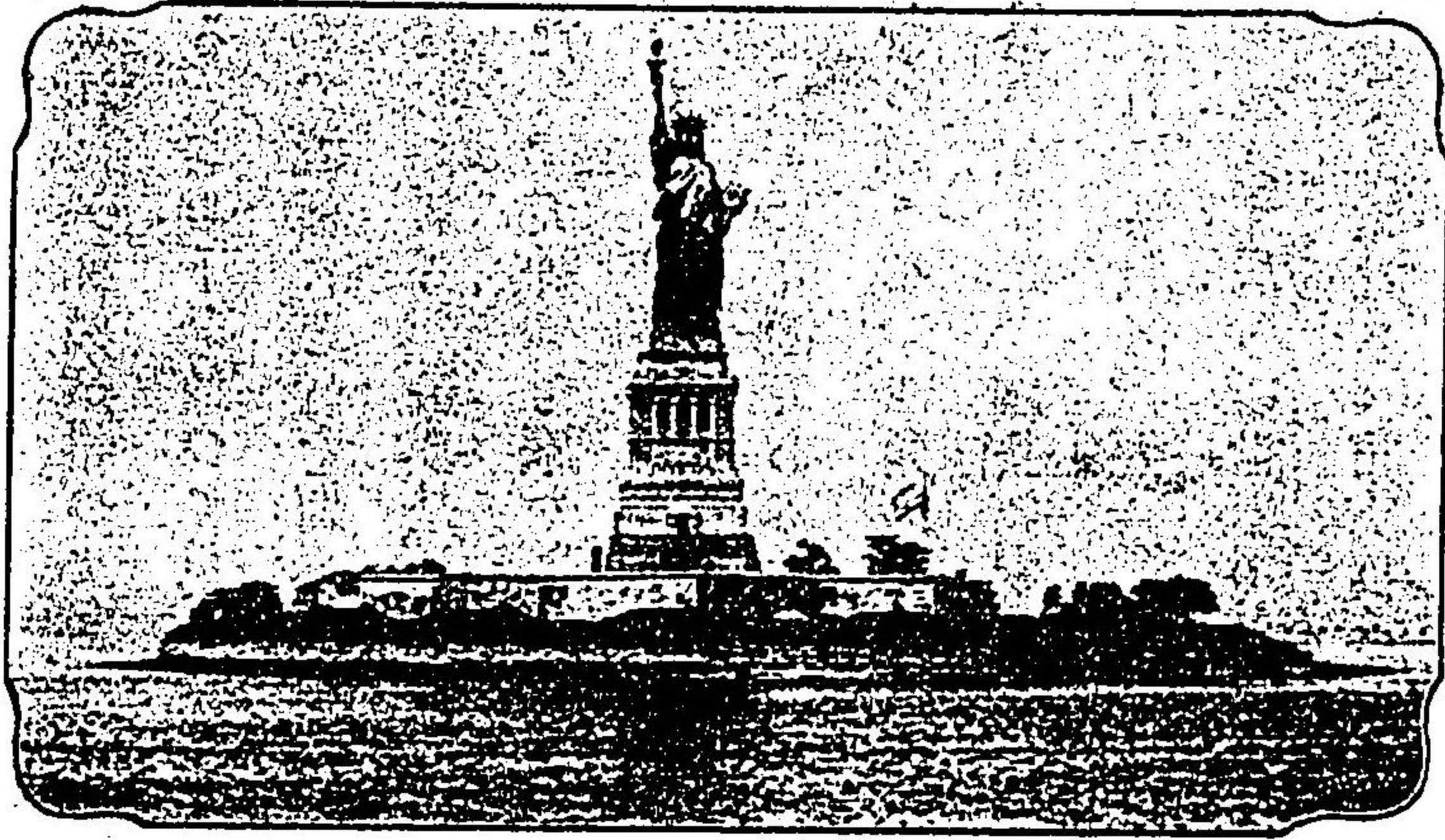
朝、船は紐育のイースト河にあり、何だか大けな、吊橋が近づいて来る。是れぞ有名なブルックリン橋かと、思ふて居ると、あてが端れて、亦同じやうな橋が出て来る。是れこそブルックリンに違ひないと、思ふて居たが、亦違ふて、幾くも出て來やがる。五つ這度橋を潜つて行く程に、今度こそ眞物の武市橋^{アルクリン}が見えて來た。黒味が、つた大橋梁で

其れに一杯網が掛つて居る。其の下を通つて見ると、縦横に鐵骨を組み合はして居る。最う是れ見たら、天神橋も厭やになつて來る。紐育市の外観は、實に立派である。城砦の如うな、四角い家や塔の如うな、細長い家が我れこそほど、互に高さを競ふて居る。世界の都會とも云はるゝ市街は×



紐育の外観

×此の位の物かと、深く感じた。船がハズソン河に出づれば、自由の銅像が一孤島に、突立つて居る。片手に希望の焰火を擧げたる女神は、ハズソン川に往き、する船を絶えず見つめて居る。あゝ亞米利加は、此の自由の精神で、驚ろくべき、新進の文明國になつた



自由山の銅像

六十四
のである。紐育港口に入るものは、先づ最初に是れに眼が附くであらう。
ハヅソン河に、フェリボートや、黒煙を吐く汽船が布を織るが如く往來して居る。無数の船渠が、串の齒の如く並んで居る。あゝ我等は此の紐育の富と、雄大なる經營に、魂けて終ふた。僕は元氣飛び立つばかりで、早く上陸したくて、少しも猶餘出來ない。其中船が船渠に挟まるや。荷物片手にさつさと出て行く。通信員福富君が特に我等を迎ひに来て居た。リードさんは御者の所に、我等は例の通信員と、一所に馬車に乗つて、紐育の町を走り、往來の劇しくない、ウオルコット、ホテルへ着いた。

晝からは、リードさんに連れられて、紐育の最も繁盛を極めた、ブロードウエー街を歩いた。驚ろくべき高い家が並んで居る。廿層のプラットアイアン、ビルディングが妙な形で、街角に聳んで居る。其の状恰も鉄のやうであるから、プラットアイアンと云ふのである。左の方には五十層の、メトロポリタン、ビルディングの高塔が巍然として、空を突かんばかりである。是れは保險會社で、世界第一の高い建築物である。是れも亦世界第一か、亞米利加へ來てから、世界第一ばつかしたと、皆云ふ。何とマゝ高い事やらと、赤毛布は呆氣になる。高さを競ふのが、近來の流行なさうである。例の鉄家の後方に、シンガビルディングと云ふ、非常に高い家がある。我等は其れに入りて、エレベーターに乗ると、眼暈ひがする程に、スル／＼と頂上まで上つて終ふ。此のシンガー塔の高さは實に、四十一層、六百九十呎、其の總階數は、地下の二層を合して、四十三層であつて、其の重量九千萬斤からある。縦横に敷ける、スチームパイプ十五哩、電燈數壹萬五千に及び、昇降器、一分間に四十一層を走り、急行は三十秒に三十層を走ると云ふ事

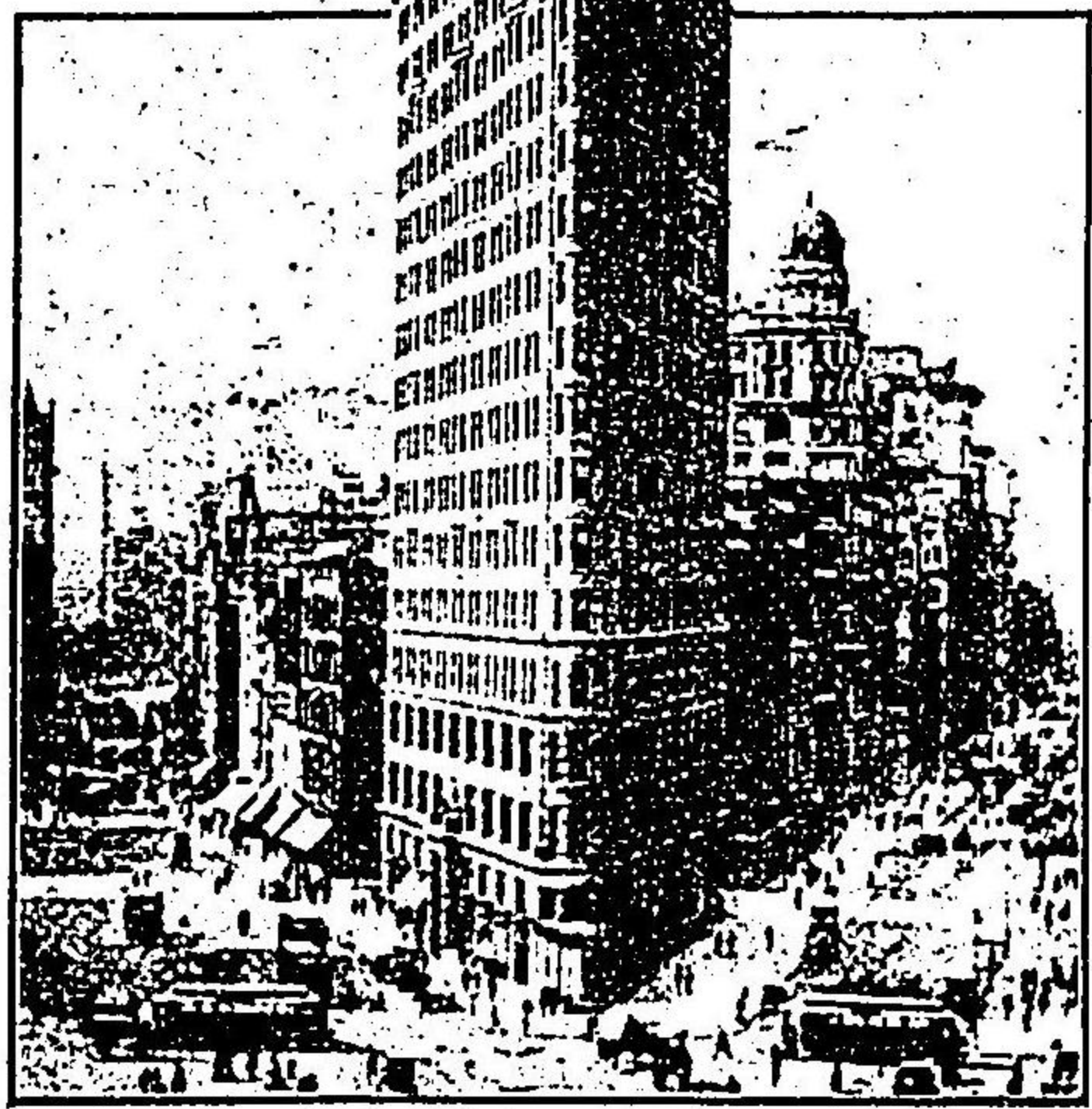
だ。はつと思ふて、廻廊に出づれば、雙眸に集る所、是れ紐育の一大壯觀、唯眼を圓くして驚ろくばかり……プラットの家も底く見ぬ、見渡す限り、たゞ赤い市街！是れと云ふのも、練瓦や石ばかりで、築き上げたからである。ゴーと云ふ、雷鳴の如き喧囂が、絶へず此の高所にまで聞こへ

る。是は擾々たる街衢の音と、轟々たる鐵道の響と合して、此のやうな音響をさ

せるのである。以て如何に紐育が戰闘的である

かい知れやう。溶々たるホヅソン河に、輻輳し

來たる汽船を見ては、通商貿易の衝點と知られ、船渠の凹凸せる狀を見ては、其の經濟的發達の、世界に比類ないの知られる。ベッドロース島に、自由の銅像立ち、イース



鐵家其の後の方にシガン塔

ト河にブルークリン、ウイリヤムスバーク、ネビヤード、ラベンスウツドの大吊橋が、虹の如く差し架つて居る。嗚呼紐育は、實に偉大なる世界的都會である。ふと壁を見れば、樂書がしてあるから、僕も其れに、鉛筆で書名した。我等脚躰低徊去るに忍びないで、廻廊を彼方此方巡つて見る事多時……廳てリード君に促されて、田舎漢と共にエレベーターで颯と下る。此の時、幾階もパッスして、穴へでも落ちさうに感じて、足つきがひよろくして、腹の底が寒うなつて、頭がふらくした。出て終へば、宛るで夢のやうであつた。

歸途高架鐵道に乗つて見た。高架鐵道と云ふのは、市街道路の中に、鐵材の柱梁を建て其の上に、レールを架けたのである。鐵道と云へば、人は蒸氣々車のやうに、思ふであらうが、左うで無い。電力で、機關車なしに、數臺箱を並べて、走るのである。那麼ら電車かと云ふと、無論電車には違ひないが、日本のやうに、針金式の不細工なものとは違ふ。三條のレールを敷き、其の中央のレールに溝を掘り、其の中に針金を通して、電氣

を通はして居る。

先づ階梯をトントン上つて行くと、昇降場に出る。列車が着くと、下りる人は、さつさと下り、乗る人はさつさと乗る。乗つて終へば、直様動き出す。實に一分間の餘裕も無い。何分家が高いから、檐と檐の間を走り、下を見れば、人間が、うぢやく、歩いて居る。列車は道路の上を走つたり、衢をはすかへに走つたりする。やがて番號附きの停車場に着いて、亦トントンと階梯を下る。

夜は水野總領事の招待で、皆行く事になつて、福富君に連れられてホテルを出た。不圖地下に下りると、停車場がある、昇降場がある、店もある。是れ豫ねて聞いて居た地下鐵道なのである。地下鐵道は紐育に於ける最も驚ろくべき大工事である。墜道の下に、レールが四本あつて、其の真中の二本は急行エキスピーレックスに使用して居る。プラットホームに待つて居ると、機關車なしの箱が、霧らに走つて来る。乗客がぎろく下りるのを、待ち受けて、周章て込むで、乗り込むと、列車は間もなく動いて、全速力で墜道の中を走つて

行く。箱の中は電燈で眞赤に照らして居る。乗客を見ると、男も女も、爺も婆も、皆具圖々々して居ない。姑らくしてから、福富君が出掛けるから、何うするのかと、思ふて連いて行くと、箱から箱へ乗り換へた。乗り換へるや否や、動いて、列車は墜道の中を走つて行くと、雷鳴の如くとゞろいて、轟々と反響す。是れ即ち響きに云ふて置いた、急行列車エキスピーレックスである。我が國の急行列車位な速力を出す。實に恐ろしい位である。大分長い間走つて、停車したから、大急ぎで下車して、地上に出る。此の時、皆一同ハット吐息ついて云ふ。何と紐育は豪らい所だ………

領事の私宅は、人通りの少ない、閑静な所である。さてエレベーターで、十階程上ると、領事の聲でヤーと聞へる。皆水野氏に紹介されて挨拶する。氏は亦某氏を紹介される。應接所へ行くと、姉妹の少女が傍へ寄つて来て、僕に握手される。其處へ奥さんが軽い洋装で、裾長く敷いて、出て來られて、能うこそ御越しなされましたと云はれる。嬢さん達が、寝られる時間が來たので、紅葉のやうな手で握られ、グッナイと云はれて

去られる可愛らしさ。主人の云はれるのには、彼の子等二人は、日本語が怪しいので、私等の英語を修す位であると。水野氏は、でつぷりと太つた、少し赤ら顔の、眼もどの涼しい、如何にも打解けた人である。何にも無いけれど、日本料理を差し上げるとて、膳立てした部室へ導かれる。我等席につくと、夫婦は互に兩端に座はられる。卓の中央の釣電燈を、故さと二つのみ點して、雪洞の明かりを效かして居る。アメリカのメリーが、各人に給仕して廻はる。皆箸を取り初めたが、豆腐の冷やゝつこなどあつて、大に珍らしかつた。水野氏曰く。米國は、機械の出来ない事を手でする。日本は手で出来ない事を機械でする。米國と日本と比べると、實に百年の相違がある。日本人は美術國であるなど、自慢云へど、外國人は日本から歸つても、左程にも思ふて居ない。此の頂子で行つたら、五十年や、七十年かゝつても、逆でも殘目であるとして、非常な大氣焔であつた。奥さんは日本が宜しいなどと、日本のお話でも聞かして下されど、大熊さんに云はれる。食事が済むでから、應接室で姑しお話を聞いた後、エレベーターの口で、お

訣れして下つた。歸途は亦例の地下鐵道で、一思ひに走る。

(二)

●同廿三日 雨天 商業會議所ワナメイカ商店

けさ程一所に、商業會議所へ、お極りの如く行つた。エレベーターで、すつと上つて行くと、セクターは不在であつたが、委員が居た。先づ例に依り、其の人に、握手と名刺を交換し、鎌田君の通譯で、大熊君は其の人と語る。對話が済むで、又エレベーターで上つて、集會所に出る。委員が振を廻はすと、天井の窓硝子が明かるくなる。何だか暗いなど思ふと、漸次明るくなつて、部室を照らす。此の電燈七百から附いて居るところとついでとつと消ゆるのださうである。妙な電燈もあるものぢや。下を見れば其處には、非常に廣い敷物がある。此の敷物は獨逸製で、一枚織りださ。其の上を歩いて行くと、正面に壇があつて、議長及び書記長の座はる席がある。壁の周圍には、偉人の油畫があつて、リトド君は、僕がリンコーン好きと知りて、リンコーンと指

すもおかし。視察も済むで、其處を出掛ける時、委員が痰を廻はすと、天井がとろつと暗らくなつて、とろつと消ゆる。部室を出ると、地下鐵道の工事をやつた人の銅像が置かれて居る。其の傍から、大理石の廣い階段がある。而し平生は使用出来ないと云ふ。我等はエレベートルで下り、大熊君は書籍を貰つて、委員と訣れ、又一所に、エレベートルで、すつと下る。今日の商業會議所は、今迄で見た中で、一番立派である。有繋紐育は商工業の中心であつて、一番完備して居る。

其れから有名なワナメイカ商店へと行つた。是れはワナメイカと云ふ大藏郷があつたが其の人が職を退いて、此の商賣を初めたのだと。今は大分老人であるが、而し、米國では六十になつても、未だ決して老人の數に入らないで、ヤングの中だと云ふ。先づ時計屋へ寄つて、僕と大熊君と萩原君と三人共、狂はした金時計を出して、修理を頼むと、六日かゝると云ふから、其れなれば、英國へ行くまでには、間に合ふからとて、預ける事に爲た。而かも三人ながら、時計のガラスを破り、針を折つて居るとは、揃ひに、揃

ふて滑稽な話である。此處は八百萬で、高價な物も、廉價な物も、何でも賣つて居ない物が無い。籠に入れた鳥までも賣つて居る。店員は大抵婦人であつて、客人が品を買ひ購めると、摘要紙に鉛筆を走らせて、勘定方の所へ持つて行く。客は其處で支拂ふやうになつて居る。荷作りなども、上手な物で、紙で包み、系紐でいはひ付け、携げ物を附ける手際など、至つて早い。僕は畫葉書、スケート、名所圖畫など土産物に買ふた。紐育の名所帖、十帖も買ふたから、少し負けて呉れ、其れを日本へ送るやうに爲たが、是れが爲め、大に暇取つて、運賃料など聞き合はすやらで、實に鎌田君に氣の毒であつた。エレベートルで下り、亦蠟燭臺二個買ふて、其れも日本へ送るやうに爲た。是れで僕の方は濟むだが、鎌田君はリボンを買はれた。買物も濟むで、ワナメイカを出で、歸途は地下鐵道で、颯と歸へる。

午後は雨天の爲め休み。

●同廿四日 晴天

寫眞責め 女の世界 乗合自動車 髯 中央公園 富豪街

ゴルドン將軍の墓 印刷機械 雜鬧

七十四

新聞記者が、けさやつて来て、我等を撮影したいと云ふ。據所なく承知して、四人丈寫眞屋へ行つた。一行揃ふて寫すのかと思ひきや、一人づつと云ふから、エーと云ふ譯で椅子に掛けて待つて居ると、最初に鎌田君から、初つて騷り物にされる。大けな寫眞機を、顔の傍まで持つて来て、彼方向けの、此方向けのと云はれて居る。横顔やら、眞顔をやら、膝杖ついた所やら、脚を組み合はした所やら、立つて居る所やらを、六種程寫し取つた。お次ぎは大熊君で、例の髯を前の通り寫す。お次ぎは萩原君で、彼方向け、此方向けをやられ、お次ぎは僕の番で、大にどつつかした。やつと寫して、やれ〜と思ふて、皆と一所にホテルへ歸つた。

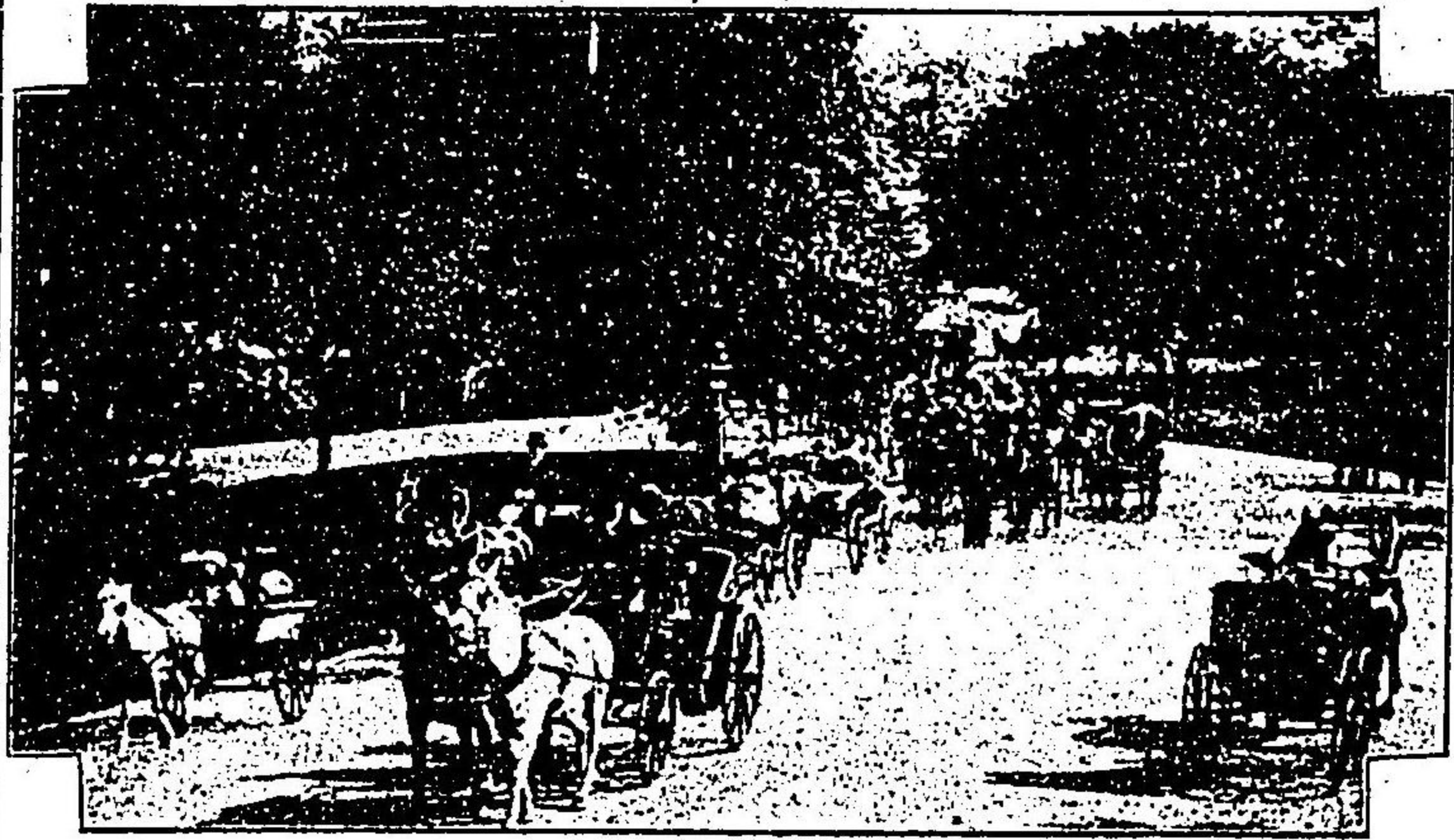
リード君が待つて居て、一所にホテルを出で、徒歩で自動車屋オートモビルへと行くと、其の途中女が非常に出歩いて居る。綺麗なボンネット被つて、銀の小鎖の鞆を、ぶら下げて、活潑

に歩いて居る。いと可笑し。リードさんの云ふのに、けふは土曜日で、女が皆芝居やとか、寄せやとか、買物とかに、出掛けるのであるそうなる。日本なら、女が餘り外出してさへ、怪しむものを、亞米利加では、女が跋扈して居るから。這麼に外出するのであるに米國は女の世界である。

紐育見物の男女が、乗合自動車に乗つて居る。我等も其れに乗る。先づ大熊君の髯が眼につき、男も笑ひ、女も笑ふ。何んで、米國人は、髯が可笑しいのか、僕は薩張り解らない。初め僕は西洋人と云へば、髯のあるものと思ふて居たのに、米國の男は、スツキリと髯を剃つて、綺麗にして居る。顎ひげも皆無とは云へないが、有つても、短く切つて居る。是れと云ふのも米國は、平民主義の國であるからであらう。又文明國の人間は汚ない髯を、すり落して、男でも風采を搦ふのであらう。僕は、大熊君に、數々髯を剃り給へと云ふたが、先生曰く、此の髯で歐米を風靡するのだと。

自動車は道が大けな物さ。二十人位は大丈夫だ。又二階附きの自動車もある。我等の

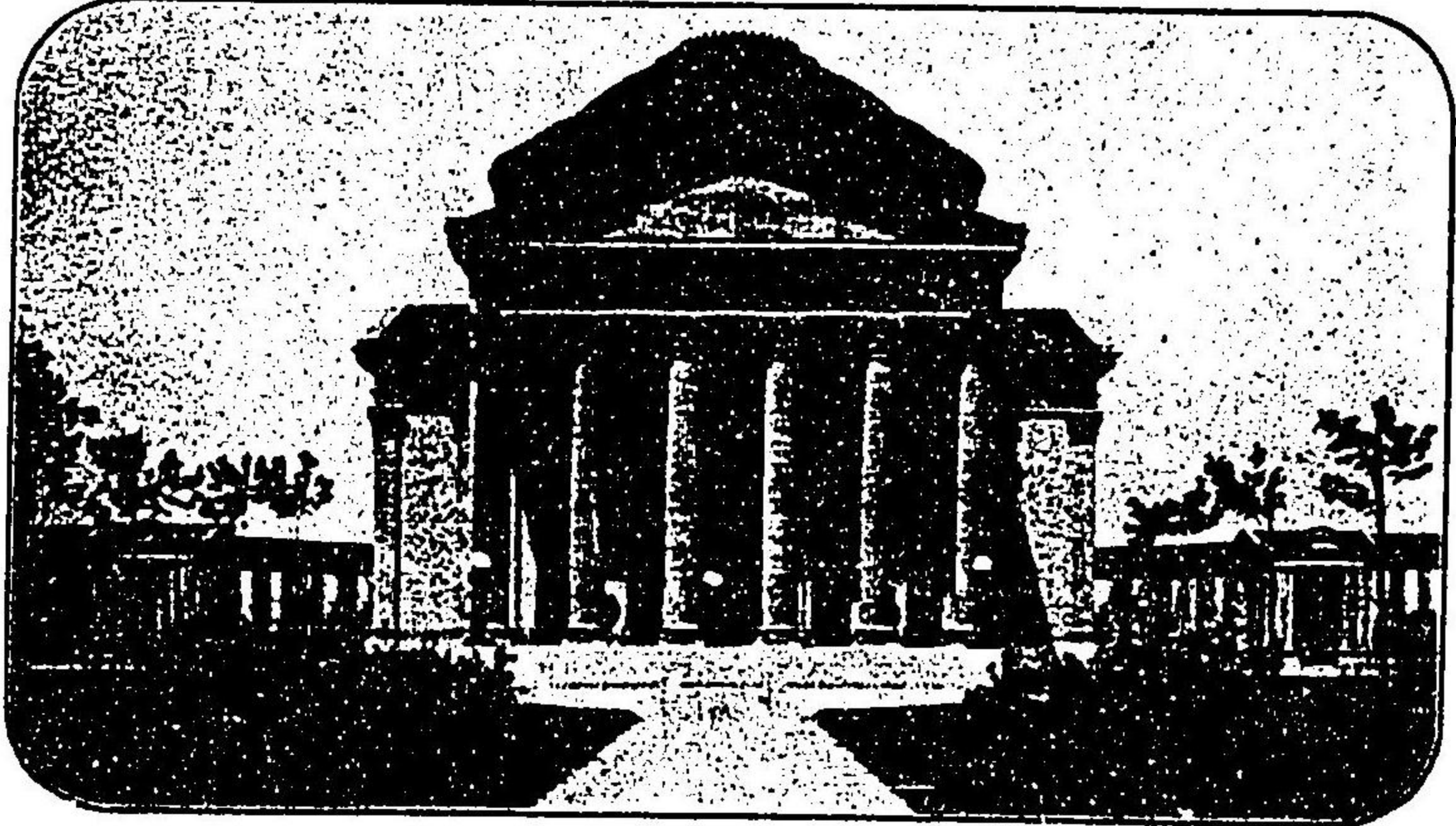
七十五



中央公園

乗つたのは、二階無しの自動車である。自動車は徐ろく動く。説明する男が、喇叭を口に宛て、滑稽な事云ふて、男女を笑かす。鉄家の前に來ると、天まで届くと云ふから、乗客悉く笑ひ出す。何處の國も同じ事、見物の田舎漢に、大法螺吹き立てるは變はりない。圖ある立派な家の前で、乗車の我等を其の儘撮影した。寫してから、自動車は紐育の下町を行く。其の巨大な建物と、其の繁華な市街に、驚心眩目せざるもの無く、唯眼がちらつく程である。其の後、紐育の上町を見て、中央公園に入る。今は春氣色で、冷かな風に吹かる氣持ちよさ。木々の梢は、皆青い芽をはいて、

とよくとしな垂れる風情、得も云はれず、赤い服きた兒童等が、青い草の上に戯ひれ、派手なボン子ツトの婦人など、ベシチに寄れるさま、畫にも及ばぬ眺めである。カーネーギ、ロックフェラー、ゼームスヒル、モルガン、ハリマン、ヴァンダビルト等の並んで居る、富豪街を通つて



グラント將軍の墓

×行くと、ハドソン河畔の丘上に、壯麗な圓塔が立つて居る。是は即ち、グラント將軍の墳塋である入口の上に、我れくをして、平和ならしめよ Let us the peas. 又書S である。是れでは、米國も日本と戦争出來まいと云ふて居ると、自動車は其の横に停つた。見物人と一所に、是れに這入つ

て見ると、間い穴の中に、おもし載せた大石棺が二つおつて、其の墓前に、花環を添へてゐる。是はグ氏夫妻の墓である。餘り立派なので、是れでは草場の蔭どころでは無い。大理石の蔭ぢやと思ふた。其處を出て、裏へ廻つて見ると、英清兩文で、李鴻章がグランド將軍の徳と、あがめた碑がある。グ將軍が、曾つて彼の有名な長髮賊の亂を夷げた縁固があるので、李氏米國へ來遊の際、紀念にとて、靈前に手向けたのであると云ふ。グ將軍の事は彼の南北戦争にも大將であつたし、又大統領としても盛名のあつた人である。日本へも、支那からの歸へりに、立寄つたと聞いて居る。我等碑文を讀むで居ると往來人が我等までも、チャイニースと見るも、いと迷惑であつた。再び自動車に乗つてハドソン河の沿岸を沿ひ行けば、又同じやうな圓塔がある。是は彼の南北戦争に、戦死した兵士の爲めに、建てた紀念塔である。自動車が上町から下町に出て、町を通つて行く時、早や子供が來て、先つきに撮した寫眞を賣る。

非常に高い、タイムス社の建物が、或る街角に樹つて居る。其の前を通つて、或る所を下りて、ヘラルド新聞社の前に出て、新聞印刷機械を外から見た。硝子戸から覗いて見ると、輪轉機とは大分違ふて居るが、何んでも、大けな印刷機械が十臺程置いて居る。能く見て居ると、大小無數の車輪が廻轉して、巻きつけた紙を引つぱり出し、表裏共印刷して、其れが帯を絞る様に、端から三角にすばめて、四つに折つて、スタ〜と米が落ちるよりも、迅速に落ちる。其れを労働者が、取つて運むで行く様、眞に驚いて終つて、機械力も是所に至つては、神よりも豪らうと思ふた。人間の智力と云ふものは、何れ程まで發達するだらうか？這麼ところを見ると、米國の機械力は、殆んど絶頂に達して居る。あゝ文明とは斯くまでに、時間を争ふて、富を増さねばならぬか、活動しなければならぬかと思ふと、僕は寧ろ頭が騰せるやうになつて、厭やけがさして來た。かくて、僕は皆と一所に、其の劇しい馬車やら、自動車やら、電車やら、走るやうな人間やらで、眼がまひさうな、雜間の間を潜つて、ホテルへと歸つた。あゝ紐育は宛然戰闘的である。

(四)

●同廿五日 晴天 日曜||嬉しい手紙

是れから少しく紐育の日曜を話さう。歐米では日曜になると、店を閉じて商賣をやらな
い。唯、店飾りが硝子戸であるから、往來の人に見せるやうになつて居る。芝居も、新
聞も休むので、總べての活動が停つて、寂つそりして終ふ。唯此の日は子供でも連れて
公園へ出掛ける位な物である。而し煙草屋、酒屋、ランチ又は、日曜でも、いつもの通
はり、商賣をやつて居る。平生は非常に劇しい處であるのに、日曜になると、火の消
たやうになつて終ふ。日曜が過ぎて、月曜になると、忽ち變つて、大に働き出す。能く
働いて、能く遊ぶとは、蓋し彼等の事で、日本人の様に不規律で無い。労働時間も規定
があつて、一定の時間に働いて、時間が來ると、ちやんと止めて終ふさうである。こゝ
らが正しい物で、日本人の眞似の出來ない仕事である。けれど、我等には夜出ても、物
買ふ譯にいかず。日曜に買ひたい物があつても、何んでも買はれないから、中々不便で

あつた。米國人とても、不便な事があらうと思はれる。けふは一日休むで、何處へも行
かなかつた。

夕方日本から 姉さんと、季さんと、岡村さんの手紙が届いた。

華盛頓 (一)

●同廿六日 晴天 ハドソン河を渡る||椅子の氣車||田舎の景||大停車場||女の

ウエイター||議事堂||美しい華盛頓||圖書館の夜景

我等はけふ華盛頓に向ふ。センツラル、ラインの停車場から渡船フェリーボートに乗つて、ハドソン
河を渡る。ジャーシについて、亦何時の間にやら、停車場に出て、巨い汽車に乗れば、
青い羅紗附きの椅子が、すらりと並んで居る。椅子に掛けて居ると、汽笛の合圖もなく
直様出て行く。椅子をグルリと廻はして、窓外の景を見る。汽車はペンシルバニア洲に
入る。今は麗らかな、春氣色、木々の梢は皆赤らむで居る。瀟洒な森林、青々とした

牧場、鋤入れた畑、溶々たる川の流れ、點々見ゆる練瓦屋など、如何にも閑かな風情である。あゝ米國は、紐育のやうな、烈しい處ばかりかと思へば、矢張り田舎は田舎なりけり。電車もいと寂しげに、針金につながつて居る。費府、バルチモアの停車場を過ぎ、華盛頓に著いた頃は夕方であつた。停車場は白聖の大停車場で、ボストンの其れよりも大きいかと思はれる。否世界第一かと思はれる。

自動車を僦ふて、市中を通つたが、直きコンGRESホテルに著いたので、あつげ無かつた。二階の部室に入ると、窓外の庭園から、蒼々と繁つた木の葉の青い色が、暮れかゝる、春のたそがれに、部室の白いカーテンに映つて居る。げに是れまでに無い、奥床しいホテルと皆云ふ。晚餐のテーブルにつくと、ウェイターは男でなく、皆女であつたら、萩原老人は、こゝな給仕は皆姫御前であるといふと喜ぶ。げに米國で、日本風のホテルはこゝばつかしと思へば、いとおかし。

食後リード君に連れられて、圖書館へと行く。雄偉宏莊な、輪奐の美を極めた、國會議

事堂の前を通つた時、リード君説して

曰く、大統領の就任式は議會の正面から、國民に演説するのだと。議會

の裏にまはりて、階段を下れば

其處に、最初の法官ジヨ

ン、マーシヤルの銅像が

禪宗の坊主然と椅子に由

つて居る。其れから華盛

頓の市街に出ると、黒坊の子供

がスケートをやつて居る。針金なし

の電車が二臺程並べて、通はる。窓の

無い、透き通はりの電車が、其の家根の×



×青い緑ガラスに、電燈の光映つり行

くさま、いかにも涼しさうな、螢の

やうな電車である。何處見ても、青

紅葉のやうに、樹が繁つて居る

から、華盛頓はさすがに美

しい。其の儘、瓦斯にちら

つく、樹林の間を歩いて、

圖書館へと行つた。

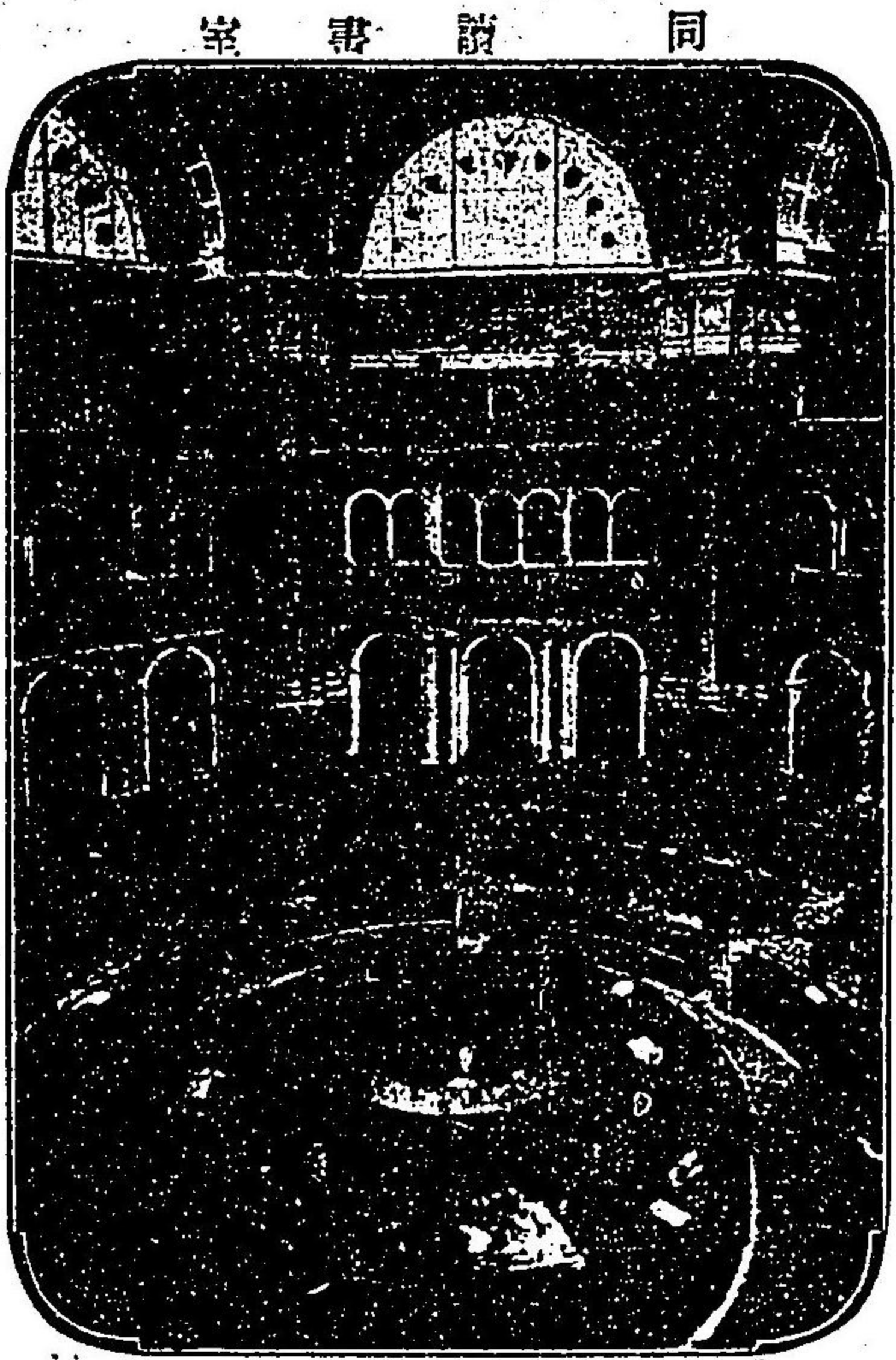
圖書館の石段の下には古希臘

の神話にある、肝馬師の彫刻があ

つて、馬の口から、噴水がジュエ

と出て居る。階段を上つて、戸を折し

て入ると、全部大理石で建築されて居る。大理石の大圓柱が、美し事突立つて居る。スベ〜の床を踏むで行くと、モザイクの壁畫、天井の繪畫など、燦爛たる電燈に照らされて、ピカ〜に光つて、實に眩ぶしい位である。正面の段橋を上つて、一階づゝ踏むで上ると、圓形に形つた、讀書室の中央の二階棧敷に出る。階下を見れば、テーブルが書籍受渡所を中心に、圓形に取り巻いて居る白髪の老人や、ボンネットの婦人や、黒人など、テーブルに據つて、無言に勉強して居る。入り來たる人の、靴の音たえずに、靜かに歩いて居るも、いと床し。我等は棧敷を、そろ〜歩いてまはると、棧



際に、世界の偉人が、銅像になつて立つて居る。コロンブスや、ホーマや、セキスピヤや、ベーコンなどが、讀書家を見下ろして居る。あゝ僕も這麼處で、靜かに勉強して見たい。何萬と云ふ無盡藏の書籍が、讀書室の周圍に藏めてある。其の前に、菱形の花電燈で、書籍を照らして居る。一周してから階梯を下りて、別室へと行く、リーンコインの幼時から晩年までの寫眞やら、筆蹟を見て廻つて、油畫、欄間の名畫などを見る。此のライブラリーは、圖書館と云ふよりは、美術的建築物である。此の圖書館の建築に、實に五千萬圓の費用が係つたと云ふ。蓋し是れも亦世界第一の圖書館であらう。かくて、此の圖書館の階上に出づれば、月は清く冴えて居る。あゝ僕は此の華盛頓で、月を見て、感慨殊に深かきと思ふ。

(二)

●同廿七日 雨天 自動車で一巡ぐり||ホワイットハウス||獨立紀念塔||博物館||

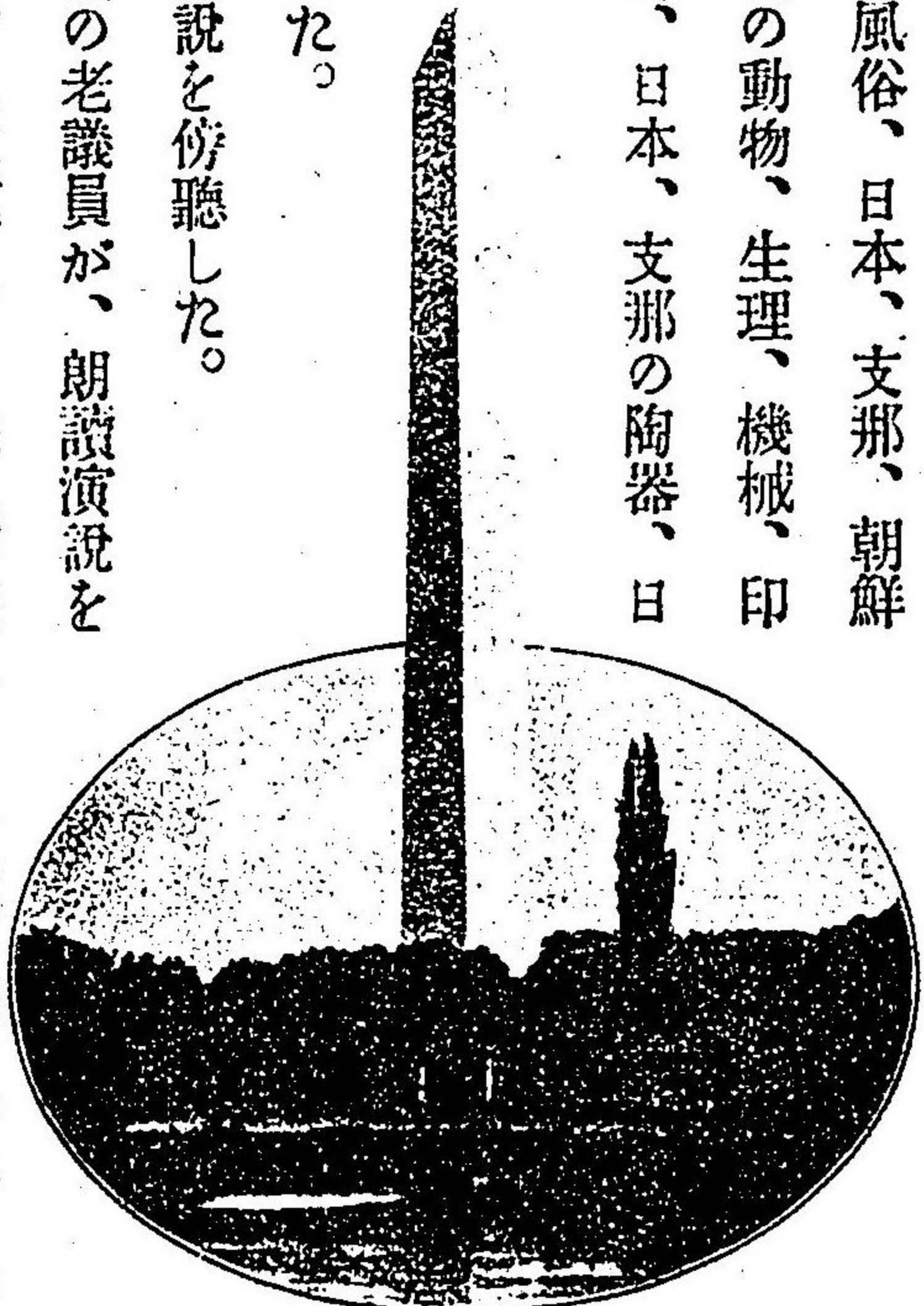
議事傍聽||議事堂内||高平大使||黒坊



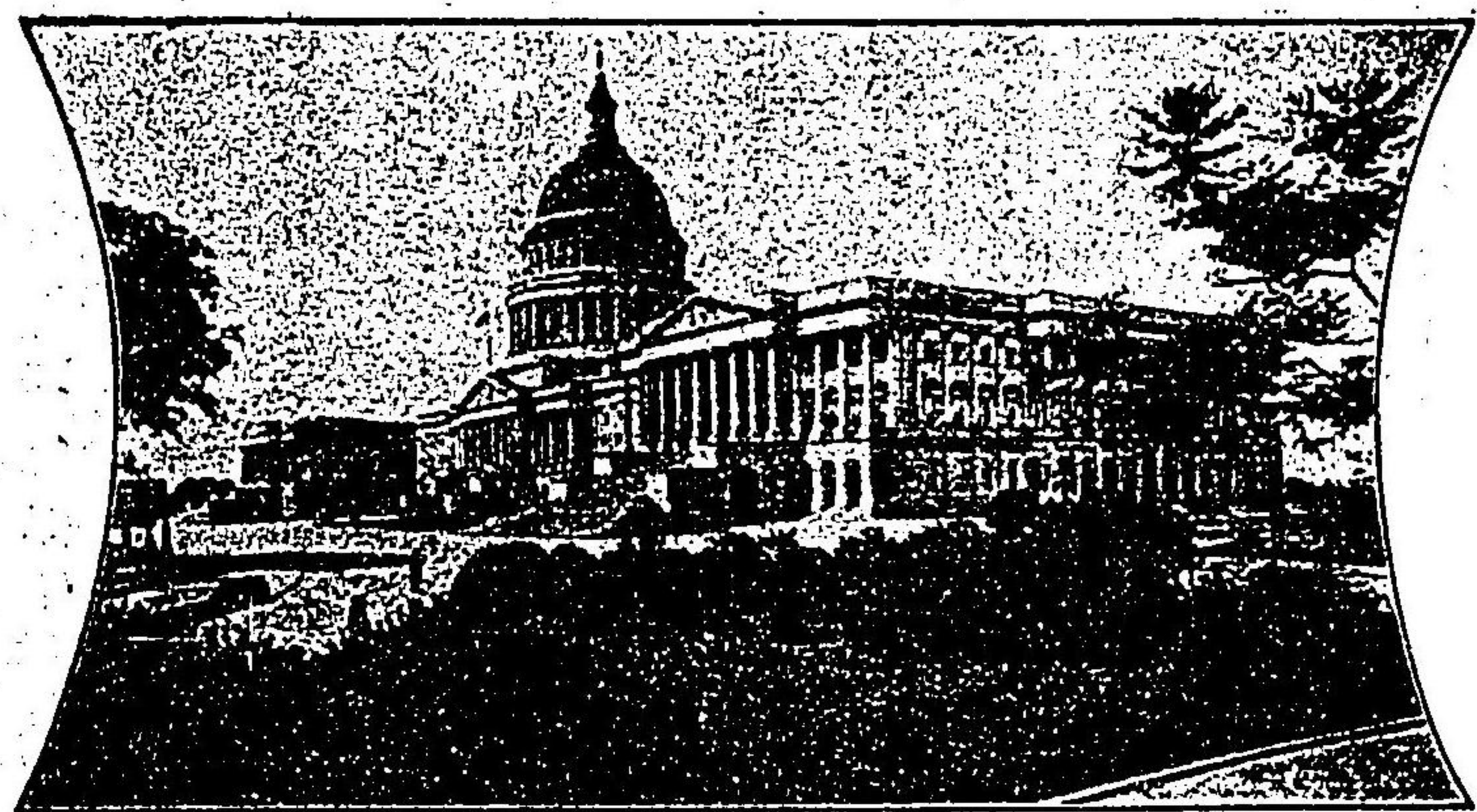
ホワイハウス

朝、乗合自動車に乗つて、議會、停車場の前から市中をグルリと廻はる。紐育の様にガイダーが喇叭で説明する。馬の纏はつた、煉瓦の家が、大抵階段附で並んで居る。或は宏壯な政廳が立つて居る。街の両側には、緑葉の並樹青々と繁つて、幾ら行つても果てしなく、遙か先方を見るも、森の如く續いて、何にも見えない位である。塵一つ、コンクリートの道路に落ちて居ない。僕は宛るで奈良へでも、行つたやうに感じた。大統領の居るホワイハウスの側を通つて行くと、廣い庭園に噴水が出て居る。白い家や、噴水位見ても、何にが面白るか！其は大統領と握手して見たいのさ

公園の中央に、白堊の、三角の大尖塔が、天空に聳へて居る、是は米國の建國を表象する獨立紀念塔である。公園を過ぎて、國立博物館に入る。華盛頓の持ちし劍、食器箱、戦争に用ゐし旗、インヂヤン人の風俗、日本、支那、朝鮮の美術及び古代の風俗人形、剝製の動物、生理、機械、印度の佛像、鑛物、有機物の生産品、日本、支那の陶器、日本の漆器類等、枚舉に暇あらず悉皆見て同館を出で、からで公園内を通り、晝食前ホテルに歸つた。午後は議會へ行つて、元老院の演説を傍聴した。我等椅子に掛けた時、恰度共和黨の老議員が、朗讀演説をやつて居た。此の議員着席するや、民主黨の盲目議員が突立つて、頭を振り、手を振つて、盛んに反對演説を試む。問題は、何でも労働者の賃錢に關してある。此の議員は



獨立紀念塔



歳は未だ若いが目である。其れに、熱心に労働者の爲めに、討論し、敵手と盛んに論戦する様、いかにも感動した。折り／＼諧謔を弄しては、傍聴者を笑はせる。餘り長時間聞いた爲め、倦み果て、厭やになつて、僕獨り黙つて、席を立つて、廊下に出た。其處で友を待ちしも、一向出て来ないから、其の儘單獨で堂内を見物する。廊下には、米國の偉人の肖像が並びで居る。僕は、地下室から頂上のトムブまで、殘さず、偶から偶迄で見廻つた。下院の議場を見てから、露臺に出ると、雨に霞む獨立塔が見ゆる。餘り石の廊下を歩いたので、足が疲れたから、議事堂の外に出た。すると、門番の巨い男が大げな聲で、汝の友が待つて

居ると云ふのに、振り向けば、大熊君が自動車から呼びで居るから、サンキューと云ひ捨て、雨に濡れた儘其處へ走つた。其れから、自動車は大使館へ走つたが、其處は私宅で大使が不在であつたから、官宅へ亦自動車を走らせた。

大使館の人に名刺を渡して、待つて居ると、やがて二階へ案内されて、部室に通はると高平大使が居られて、ヤーと聲かけられ、我等を迎へられて、強く握手された。椅子に凭れて大使を見るに、寫眞と違ふやうに思はれ、大分皺が見えて、御老人である。大使は僕の名刺を見て、「田邊さん、何にして居られんか」と問はれた。「此の國は簡単な國であつて、外國の貴賓が來ても、出迎へると云ふ事も、出送りする事も無い。冷淡な國である。而し和田事務官が來た時は、故／＼聖路迄でも同伴したのは、稀れな例である。」と云はれる。日本に對する感情はと問へば、「さう、私しが來てから何事も無ければ新聞記者などが、日本の惡口を云ふて、實業家などが、何にも知らずに、其れを信ずるので、大に困まる。外交と云ふ事は、人は知つて居る者少なく、又平生忙しい人などは

必要も無いから仕方無い。先日もバナマで、日本の間諜が捕はれたと書いて、大に迷惑した事がある。其れ故、犯りに新聞記者などの言を、信せないやうに頼み舛。是れがマ「此の國の缺點です。」と云はれる。大熊君が、日本の商品の氣受けを尋ねると、「米國は商賣の上手な方だね」と云ふて、我等を見て笑はれる。「何分國が若いから、一番元氣な方だらう。此の勢ひでは、今後益々發達するだらう。日本の商品も、無論漸次善くなつて行き舛。今迄で輸出した物が、日本の爲めに、賣れなくなつたとか云ふて、騒わいて居る。此の國は學問、美術などは、矢張り歐羅巴には及ばないが、金は何分あるので適はない」と云はれた。是れで談も切れたから、訣別を告げると、「今晚御招きする筈なれど、他に呼ばれて居る所あれば……」と云はれる。眞とか、何うか知らねど、大使が是れ丈の事云はれるのに、満足して、同大使と厚く握手して、其處を出た。

華盛頓の町を歩いて行くと、黒坊が大熊君の髯を見て、ニヤリと笑ひながら、我等に挨拶する、一體華盛頓と云ふ所は、黒坊の多い所である。勞働者は大抵黒坊で、是れから

南方へ行けば行く程多いさうだ。彼等は昔亞弗利加から、奴隸に捕へられて、移住した子孫が残つて居るのである。彼の南北戦争は、全く彼等の爲めに起つた義戦である。鎌田君がコングレス、ホテルの道を彼れに尋ねると、出て来て、故ざ／＼數町程連いて来て、道案内して呉れた。黒坊は日本人を見ると、嬉しいと云ふ。平生白人から輕蔑されるから、日本人を見ると喜ぶのだと、鎌田君云ふ。我等は、計らず、途中で黒坊に好かれたとは、何ぼう僕でも厭やだわ。或る街の角で、彼れと訣れて行つたが、足の速い僕と鎌田君と、他の二人を後に残して、買物などして、議事堂裏から石段を上つて行くと老婆が鎌田君に、圖書館への道を尋ねる。僅か昨日見た丈で、先達となつて教へてやる此の媪さんの外に婦人が二人居たが、何れも紐育の者で、初めて華盛頓見物に來たのやさうな。二人笑ひながらホテルへと歸へる。

費 府

●同廿八日 晴天 模範的首府—費府—自動食店—獨立紀念館—商品陳列場—
一時間六十哩—紐育の夜景

けさ床しき華盛頓に名残りを惜しみ、自動車から振り返へり、彼の議事堂の塔を眺めやりつ、停車場へと向ふ。あゝ華盛頓は静かな、寂びしい、高尚な否模範的首府であつた午前九時紐育行の列車に乗つて、十二時費府に下車した。此處は先づ岡山位な資格である。衛も汚なく、往來の人の服装も穢ない。而し商工業丈は盛大である。市役所の通路を過ぎ、道々店の飾り付けなど見ながら、クック社に立寄り、携帶品を預けて出る。腹も大層減つたので、リード君が面白い食店へ連れて行かうと云ふから、何んな所かと思ふて、連いて行くと、其處は自動食店であつた。望む食品が、穴へ五錢入ると、カタンと音して落ちる。其の皿を取つて、テーブルに置きながら、立食ひをやる。珈琲やチヨコレートは、五錢口に入れて、栓をまはすと、受けた茶碗に流れて出て来る。アイスクリームや牛乳は、亦五錢入ると、圓い金が落ちる。其れを拂ふて姑らくすると、

注文の品が鎖で下つて来るから、口へ入るとカタンと落ちる。其れはく、見て居ても可笑しい位である。皆興がつて、幾通りも取つたが、餘り妙なので、僕は宜加減に止した。食事まで機械で出来る實に輕便な方法で、待つて居る必要もなく、給仕もいらな。博覽會などで、日本でやつたら、必ず流行するに違ひない。

獨立宣言の鐘



電車に乗り込むと、大熊君の鬚で、クス／＼笑ふ婦女の多いのに、極まりが悪るかつた。費府で有名な獨立紀念館に入る。其處には獨立戦争の宣言をした時、打つた鐘がある。餘つばど打つたと見ゆて、其れに鐘が入つて居る。二階

には、華盛頓の肖像以下、戦争に加つた勇士の油畫が掲げてある。階段の附近に、其の當時のイギリス王ジョージ一世の大畫幅がある。こゝは昔、英國の政廳のあつた所で、華盛頓等同志五十三人集つて、此處で叛旗を翻す籌策を建てた所として、歴史上の名所となつた。其の當時用ゐし机や、椅子など、紀念物として、飾られて居る。やがて下におりて、名簿帳に、見物人の住所氏名を記して、同館を出た。

株式市場の中を通り抜けて、大熊君の注文の、商品陳列場へ行つたが、エレベーターに聞くと、四年前に何處へやら移轉したと云ふ。其れから引つぱり廻はされて、何處へ連れて行くのだらうかと澁々連いて行くと、ペンシルバニア大學の前を通つた。其の時學生に教へられて行くと、やつと商品陳列場を見附けて、其れに入り、館長ウキリアム氏と事務室で握手した。同氏は大熊君と語り、日本へも行つた事があると云ふ。氏は陳列品を見せて廻はり、世界の生産物の實況を撮りし寫眞を見せられた。日本の茶摘みや、田植の寫眞まであつて、萬國の寫眞が悉く網羅されて居る。最も驚いたのは絹、麻、

生絲などが、原料から漸次變化して生産する、状態を、具體的に示したガラスの箱入れを見せられた。氏は學校へ多數寄附したと云ふから、大熊君は垂涎三尺と云ふ體で欲しがる。日本の商業學校などで、商品の學科をやる時、單に書物や、標本丈に依らないで這麼のを標本に爲たら、一目瞭然の下に了解出来る。流石は米國は實業國であつて、中々感心なものである。下に降りると、小學校の生徒が實驗に來る。其處を出て、或る委員に別館へ連れて行かれる。其處には、世界の産物が陳列されて居る。簡單に見て、再び本館に立ち歸つて、暫し談話の後、厚く好意を謝して、同館を出た。クック社で、預物を受取つて、電車で、停車場へ急いだ。

瀛車に乗れば、空席既に無く、已むなく看覽車に入る。暮れかゝるペンシルバニアの景何とも云へず。青々した野、牛がのそくして居る牧場のさまなど、いと好し。食堂へ行くと、満員で這入られない。ア、仕方無い、僕は鎌田君と、室外で一時間ばかり立往生をやる。其間外の景を見て居たが、瀛車の速い事、實に素破らしい、眼がまひさうだ

何にしる、華盛頓と紐育間は、一時間六十哩の速力なもの、早いのは當然へさ。ボーイの案内に食堂に入り、食事をやつて、看覽車に歸へると、早やセンツラル、ラインの停車場である。早速荷物片手で出て行くと、涼罐車の車輪が、僕の脊よりも高いので、喫驚した。

停車場から、例の渡船に乗り移ると、室内は電燈で明るい。船は何時の間にやら、動いて居る。艀に出ると、寒むい風に吹かれて慄へる。船はなみくくと溢れんばかりの、水の上を進むで行く。紐育は何物か知れぬ、大けな山のやうに見えて、イルミネーションが四方に繞らし、保險會社の高塔から、サーチライトが月に射るなど、さすがに世界的大都會と思はしめた。矢張り華盛頓よりも、紐育の方が善かつたか知ら……船渠に着いて、停車場に出ると、自動車か船から走つて出る。我等馬車に乗れば、素的に速いのに大に笑ひこけた。お馴染みのホテルへ歸へると、ボーイが馳けつけて来て、荷物を受取る。さてエレベーターに乗ると、エレベーター笑ふて曰く、大統領に遇ふて來たかと

紐育繁盛記 (五)

●同廿九日 雨天 ランチ—寫眞屋—水族館—招待

けふは亦不思議な日、雪がちら／＼降つてゐる。這麼事は紐育でも珍らしいと云ふ。此の調子なら、冬は中々雪が積るらしい。けさ總領事館と正金銀行へ、鳥渡寄つてから、晝食の爲め、ランチに入ると、我等を見て、ジャパニースと何處やらか、小聲に聞へる瓢箪形の卓子を圍むで、珈琲と外に二皿程やる。隣りには一寸見ても解かる、相の惡い伊太利人が三人居て、連りに我等を見る。壁には、帽子とオヴァコートを見張るべしと書いてある。日本なら、懷中物御用心と云ふ所である。リードさんも壁に掛けた帽子と外套に注意せよと云ふて呉れる。應て席を立つて、クルット廻はる硝子戸を折して、外に出で、傘さして行く。米國人は滅多に傘持たないが、今日丈は雨傘に用ゐて居る。紐育の町を蝙蝠さして行くも、中々趣きがあつて、傘と傘と突き合はして、やゝこしい

人通ほりの間を、走るやうにして、水族館へと行つた。二十階ばかりの家の下、横辻の處に、飲食店の附いた曳車がある。食事に、戸を開けて、其れに入る往來の人がある。是れも紐育の劇しい一例である。

水族館に這入つて見たが、中々珍らしい。鰐が二匹のさくつて、人を恨めしげに見て居るのや、海豹が水中をもぐつて、小供の方に頭を上げて、ギヤ〜と咆へつけて、髦のピンとした面をさし向ける事や、硝子窓の前を通つては、鱧を擴げて動くものや、尾を緩う振つて行くものや、或は穴を潛るものや、其れ〜其の動き方が面白い。大い魚が居るかと思へば、塵のやうな小さい魚が居る。綺麗な色彩を持てる魚、口の尖つた魚名も知らぬ太西洋の魚類など、皆眼新らしい。醜いのは、長い帯のやうな黄い鰻が、礁にへばりついて居る。鰻は亞米利加では、矢張り自由國、誰れも獲つて喰ふ者が無いから、太り次第だ。美しいのは、日本の金魚を仰山浮べて居る。是れで水族館も見て終つたから、其處を出で電車に乗る。

電車から直ぐ下りて、地下鐵道に乗つて行くと、不思議や、ワナメイカ商店の前へ出て來た。エレベートルで上つて、先づ時計屋へ行くと、主人は莞爾として迎へる。僕の時計が一番宜いとて、修繕賃五圓、大熊君は五十錢、萩原老人は一圓であつた。何と云ふても、僕の時計は易物ぢや無い。歸へりかけに、靴屋へ寄つて、卸一つ附けさせたら勘定が出來ぬから、無賃で宜しいと云ふ。鎌田君はフーンと感心して、道がに大陸的だと云ふ。外に買ひたい物、たんとあれど、後とは英國、佛蘭西と楽しみに殘して置いて亞米利加は是れでお終ひに爲やうと思ひつゝ、ドアを突いて出づ。篠つく雨を防ぎつゝ走つて行けば、寫眞屋の前に出た。四人の寫眞は撮つて居たが、たゞではやれぬ、皆揃へて二十五弗、エ、と呆れて、其の儘突き返へす。而し僕のみは、六枚五弗半で逃らへた。

歸途、山中商店に立寄つて、支配人牛窪氏の談話を聞いた。今夜七時までの約束で、ホテルに歸へり、仕度して、四人日本料理屋へ出掛けた。長い間高架鐵道に乗つたが、間

も無く、人通りの寂びしい、同店へ行く。玄関に入れば、水野總領事に遇ひ、僕は一禮すると、ヤーと聲掛けられた。同氏は別に他の人と一所に來たやうである。我等は二階へ通つて、牛窪氏の招待を受けた。刺身、鰻の蒲焼き、汲物などいと珍らし。日本酒もなかく好し。鞭酒を抜いた時、華盛頓から、棕十君は福富君とやつて來た。酔ひがまはつて、席を離なれ、やがて五人一所に馬車に乗る。花の如きイルミネーションの市街消えたり、點いたり、燦然として不夜城のやうである。其が雨に濡れしコンクリートの道路に映つる様又なく美し。

(六)

●同卅日 雨天 手形交換の實況 河底を走る 橋の王 演劇
朝、い、い、雨のふるのに、リードさんに連れられて、ホテルを出で、すたくと歩いて行つた。高架鐵道に乗る前、階段に足かけると、おやエレベーターでせり上り、一時は足の踏み所に迷ふて、踏限ついたから、皆大笑ひで、其の儘じつとして橋上まで昇つて行く。さて楷梯が一枚になつてから、ばいと飛び出て昇降場へ行くと、折りしも來合

はせし列車に乗り込むで、停車場を離れる。大分行つてから下りて、正金銀行へと行つた。其處の店員に案内されて、手形交換所へ行つて、二階の棧敷から、其の實況を見せ

て貰ふた。數十の銀行員が、長い卓子の後に立つて居る前を、貸方の銀行員が、鞆を携

げて通はり、借方に手形を渡して、卓の口に名刺を入れて行く。相方ども、其の事務に馴れて居るから、其の動作が極めて機敏なものである。其の中、二階へチエックが滑車の紐に、附いて上つて來る毎に、爺が其れを受取つて、計算係りに渡す。そこで、計算係りが直ちに卓上で、極めて簡単な方法で、バランスしてトータルを見出す。其の差乃ち殘額は現金として、本日の支拂ひになるので、十二時に、銀行に現金を渡すのである

取引決了後聞いて見ると、今日の取引が實に三億弗からあつたと云ふ。以て如何に紐育の經濟界が、旺盛であるか知られやう。かくて各人の親切を謝して、其處を出で、正金銀行の店員と訣れた。歸途はクック社で大に暇取つて、再び高架鐵道で、正午前ホテ

ルへと歸へる。

明日出發の準備を整へて、午後、僕は福富氏に連れられて、ブルックリンブリッジ武市橋を見に行つた。地下鐵道に乗り、再び正金銀行に寄ると、地洋丸で知つた田中さんに遇ひ、互に挨拶して、間もなく其處を出た。亦もや地下鐵道に乗ると、驚いた、我等はイースト河の底を走つて居る。河底の鐵道と云ふのは、河の底と云ふのでは無い。其の河床より未だ深い處に、地下線から地下線へ墜道を掘鑿して、其れへ大鐵管を通はし、其の中にレールを仕掛けたのを云ふ。畢竟水道の鐵管の大きなのに過ぎない。僕は此の古今未曾有の、河底の墜道を走つて、ブルックリンへと渡る。此の一大不思議に驚いて、地上に出で、彼の有名な武市橋へと行くと、橋際に電車が輪のやうになつて、二人の途を塞さぐので、危険で歩かれない、エレベーター高架鐵道の停車場が、橋の口に置かれてあるから、橋の方へ行くと、其の下を通るので暗らい。其處を通はり過ぎると明かるくなる。電車は橋の兩側を、高架鐵道は其の電車の兩側を、人は橋の真中を通行する。橋の長さは十四町、其の高さは

水平面から非常に高い。如何なる大船でも、通はれるやうになつて居る。橋の兩岸の程近き處に、大石梁が互に聳へて、其れから繫條が、網を張つたやうに懸つて、橋を釣り上げて居る。其の太い繫條は、千二百本からの針金で、集めた綱であつて、尙其の上に針金を巻き附けて、ペンキを塗り附けた、頑尤な大管である。其の大管を左右の石梁にぶら下げて、弓なりに×



橋 ニ リ グ - ル ブ

×橋を釣り上げ、尙其の輪から無數の針金を結びつけて居る。其の壯大な事、是れ亦、世界第一の橋と云ふても愚ろかである。橋にも上の上あるもの、蓋し此の橋は橋中の橋、即ち橋の王である。未だ是れでも通行人が多い爲め、不足とて、餘り隔りもない處に、同型の吊橋を懸けて居る。其の費

用四千萬圓、ブルクリンは三千万圓、何とたいしたものではないか。僕は大厦高樓棟を連らねた、紐育市を眺めつゝ、蝙蝠傘をステッキに、帽子を風に飛ばさぬやうにして、此の橋上を踏むで行つた時、一種の快感に堪へなかつた。僕は福富氏と此の橋を渡つて終ふと、亦も電車のレールで折し詰つて居る。

日米周報社に鳥渡寄つて、其處を出ると、無数の労働者が、ブルクリンへ歸つて行く。折りしも一人の労働者が、山高帽を風に取りられて、ころ／＼と地面に這ふて来るから、僕は其れを拂ふてやると禮を云ふ。福富氏の云ふのに、紐育市に住むと、生活費がいるから、多数の人はブルクリンに住むで居る。朝夕此の橋を渡る労働者は、實に數萬人の多さに達すと。さて是れから、高架線エレベーターで歸りませうか、地下線にしませうかと、云はれるから、何ちらでもと云ふと、氏は地下室へと降りられた。二人の乗つた列車は、急行車であつたから、勢ひ凄まじく、雷鳴轟々として鳴り響いた。

夜は鎌田君の朋友大木信次郎氏に連れられて、三人芝居見に行つた。其の途中、日本料理の御馳走に與かる。其の藝題は「迷ひの時間」と云ふ、米國近代の傑作であるさうな其の筋書をざつと云へば、或る若い男が酩酊の際、戀の爲めに女の嫌ひし男を、過つて殺した。然るに裁判官が、其の若い男の母の、昔の戀人であつたが爲めに、其の若い男が無罪に處せられて、家に歸つて來ると云ふ悲劇であつた。初めの程は解り兼ねたが、筋を聞いて、俳優の動作を見て居る中に、段々解つて來る。僕は曾つて或る旅行記に、其の國の人情、風俗を見るのには、博物館と演劇を見るのが早道であると聞いて居たが成程芝居を見て、初めて何處も人情には、變はりのないものと知られた。芝居果て、門口で、二人は大木氏に禮云ふて、御訣れした。

明日は漸よ／＼米國の地を去つて、英國へ出發する事になつたが、棕十君は獨り病氣で殘る事になつて、倫敦で出遇ふ事にした。

×

×

×

×

×

×

是れより、少しく紐育の地勢及び沿革を述べて見やうと思ひ升。紐育市はマンハッタン區、ブロックス區、ブルークリン區、クインス區、リッチモンド區の五大區を包括した總稱であつて、眞の紐育と云ふのはマンハッタンをのみ云ふので、ブルークリンはロングアイランドの一部で、ブロックスはハーレム川と、ロングアイランド水道の附近にある一帯の地、クインス區はジャーシ、ニューワーク等、リッチモンド區はステーション嶼全部である。南は紐育灣に臨み、西はハドソン河に瀕し、東はイースト河に限られ、北はハーレム川に接したる世界的大都市である。

紐育は千六百二十四年即ち二百八十四年前、和蘭人の拓殖をなせし所、然るに英吉利人の占領する所となり、ヨーク侯是れを統治せし爲め、後にニューヨークと名づけたのである。獨立戦争後、即ち千七百九十七年今を距る事二百十餘年前、洲政府を此處に置き年と共に交通の便開け、歐羅巴の船舶輻輳し、今日見るが如き繁榮を促すに至つた。各區は大吊橋を以て連絡し、交通機關は四通八達して、電車蛛の巢の如く、數條の高架鐵道街上を走り、又地下鐵道は南端より東北端に通じて居る。尙今後ハドソン河に、河底鐵道が開通されるさうである。ブロードウェイ街斜に南より北に貫通し、往來の雜鬧燃ゆるが如し。中央公園は市の大美觀であつて、規模の雄大他に比類無し。人口四百十一萬三千餘人とす。

第三編 太西洋日記

紐育出帆

●五月一日 雨天

アラビック

ク號||接 育 紐

吻||出帆 口 港

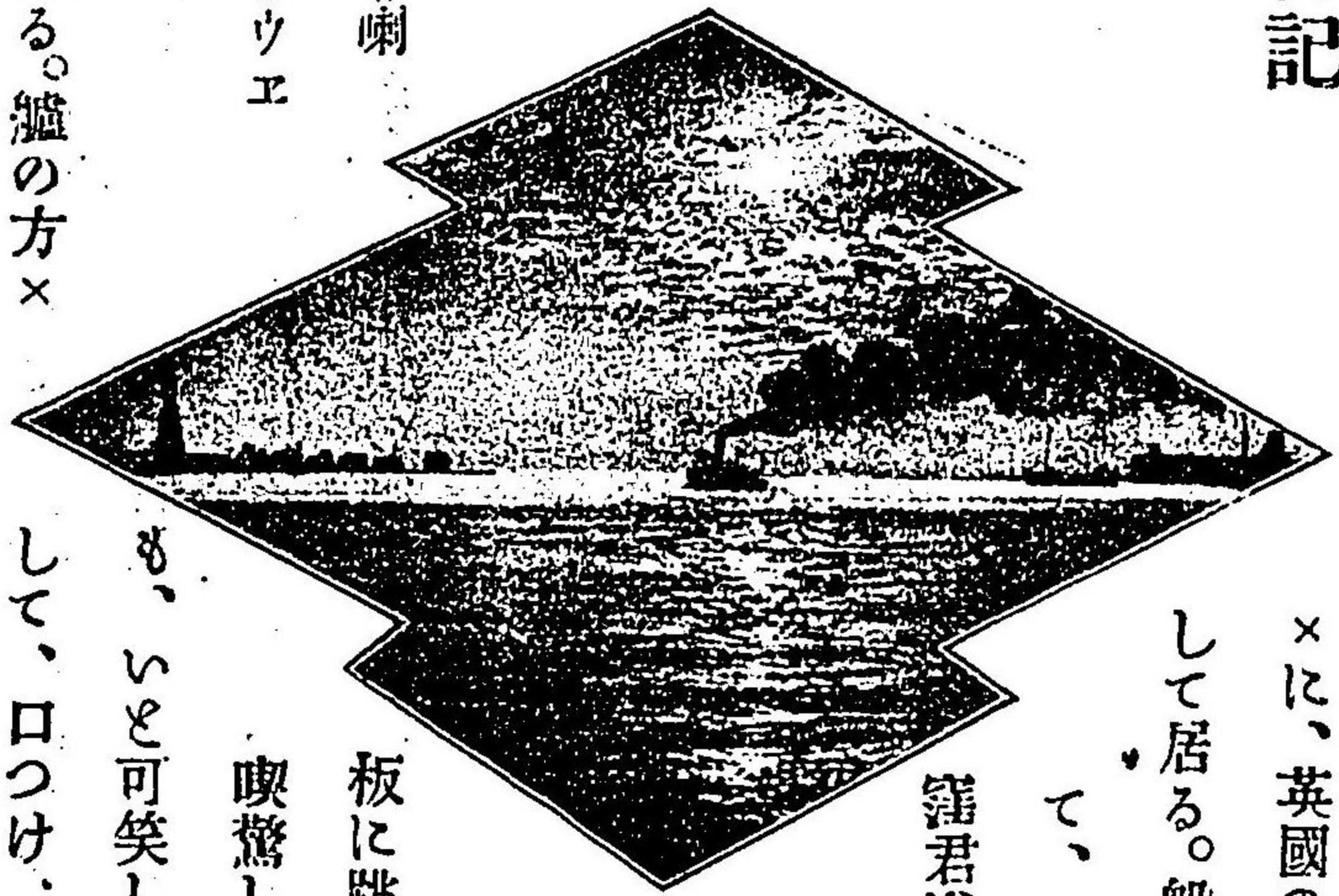
||諧謔||

暫しの紐育||喇

叭||氣の張るウエ

イター

ホワイトラインのアラビック號に乗る。艦の方×



頁八

×に、英國の商船旗ひらくして居る。船長初め船員擧げて、英國人である。牛

窪君送つて呉れる。リ

ード君と厚く手を握つて訣れる

どうどうと雨が降つて来る。甲

板に跳ね返へる雨滴に

喫驚して後しざりする

も、いと可笑し。老若男女接吻

して、口つけ、頬つけして、訣

れを惜むで居る。午後二時出帆、例の銅鑼がグワングワと鳴り響びく。船渠を離れて船首を巡らし、しづく〜ハドソン河を出て行く。船渠の二階から、盛んにハンカチーフを振る。僕は振つて呉れる者も無しと云へば、誰れやらが、振られて歸へる果報者と云ふ。いとおかし。あゝ紐育も今暫ばしと見送る。串の齒のやうな船渠！お城のやうな市街！織るが如き船！あゝ盛んなる哉、紐育と、坐ろに訣れを惜しむだ。自由の銅像に名残りを止めて、船は太西洋へと出る。夕餐に喇叭鳴り響びく。献立いとよし。ウエイターは紳士的で、髦など生やして、上品な服装して居る。なか〜氣が張る。萬事が英國風になつて終つた。此處で亦、宮島翁の親子と落ち遇ふた。

●同二日 晴天 子供||運動||アイルランド人||消防||埃國領事の評

朝子供が戸を叩く、開けて見ると、可愛らしい子供、間違ふて、たゞいたらしい。甲板へ出て。運動をやる。見渡す限り、茫々果てしなきは、太平洋と別に變はり無い。僕はアイルランド人と語る。英國の同情者であると云へば、いと欣ぶ。けたゝましい流笛の

ひいさに、水夫や船員が走つて来て、消防の稽古をやる。晚餐の時、鎌田君の隣りに、
 埃太利の領事が居た。此の人は志嘉古に、領事を務めて居たさうである。曾つて支那か
 ら、日本へ行つた事があると云ふ。打見た所、未だ歳も若い、中々宜さうな紳士で
 あつた。領事の評に、成程米國は、此の勢ひでは豪らくなるだらうが、米國人は餘りに
 神経質だから、何うか知れないと云はれる。

●同三日 晴天 波静か 太つた船長 月と故郷

朝と晝は甲板に出て運動、今日は波静かで、船少しも揺れない。食堂で、船長さんを見
 ると、布袋さんのやうな顔で、麥酒樽のやうな腹して御座る。甲板に出ると、月が太西
 洋の上に懸つて居る。忽ち故郷の事思ひ出す。

●同四日 晴天 軍艦 領事と女性

けさ軍艦が幽かに、水平線に見ゆる。雙眼を宛て、見ると、稍々明らかになる。夜の
 食堂で、領事の言に、歐羅巴の女は、亞米利加の女よりも、日本人に向くと。

●同五日 曇天 英國人は讀書家 獨逸船 帆前船 舞踏會

圖書室へ毎日通ふたが、英國人は、男女共讀書家である。若いのも、歳いつたのも……
 ……晝獨逸船が通はる。互に敬禮の記號旗を揚げる。夕方帆前船に遇ふ。船を見る毎に、
 雙眼を持つて、甲板へ走つて出る。此處は太平洋とは違ふて、船に出遇ふ事繁げし。今
 夜舞踏會があつた。ヴァイオリンの奏樂に、男女手を取つて躍る。

●同六日 晴天 床屋 水葬 兩換

朝床屋で鬚剃る。甲板に出ると、昨夜若き女死んで、水葬されたと聞く。眞か、偽か、
 晝兩換……

●同七日 晴天 親子の旅 奏樂 暮れかゝる海 甲板の行列 浪の音

宮島翁は、息子が居るから、氣儘が出来ぬ。息子は、親の婆心を五月蠅がる。僕は親子
 の旅びを羨むだが、結句他人通はしは、却て氣樂かも知れない。晚餐に奏樂を聞く。今
 のは君ヶ代か？否や左うでない、遠洋航海の歌と、皆拍手……暮れかゝる海！雲薄く

水平線のあたりには、夕陽落ちて、紫紺の波、靄然としてくれる。あゝ洋上の黄昏、得て云ふべからず。日本人皆集つて、甲板上で行列運動、中々草臥れる。夜おそく船房に居ると、笹の葉がそよそよと、ざはくと浪の音がする。

●同八日 晴天 船内を見る 石炭船 船長と語る ダンス

船内を見せて下さいと事務長に頼むと、宜ろしいと云ふ。我等はステワードの案内で、悉皆見た。二等室も一等室と左程變はりなく、三等も寢臺附の部屋である。冷蔵庫から厨房まで見せて呉れた。誰れやらが、是れも日英同盟の御蔭と云ふ。後刻ステワードに煙草を贈る。暮れ方甲板に出て居ると、船が見ゆるから、腹のふくれた船長さんに尋ねる。多分石炭船ならんと云ふ。尙語をつけて、昔日本へ行つた事がある。今年九月から、亞米利加人の觀光團を乗せて、此の船で南亞米利加を廻つて日本へ行く。横濱の港は、此の船を入れる所があるかと問ふ。今夜も亦ダンス會がある。我等下甲板で、ダンスの眞似事やつて居ると、船員に見附けられて、大に笑ひこける。

●同九日 晴天 ルスタニア號 白い燈臺 クインストン沖 賑やふ食堂

朝圖書室に居ると、何だか人が騒わぎ出す。あわてゝ甲板に出ると、一大氣船が近づいて来る。鎌田君曰く、三萬二千噸のルスタニア號であつて、キユニキ會社の所有船である。此の山のやうな船が前を通はる。英國人手帛を振つて狂喜する。僕も帽を振ると彼等いと悦ぶ。煙突四本もある。是れに雲霞の如く、白い鳥が連いて行く。あゝ彼等船に、一度は乗つて見たいものぢや。早や船と船と隔つて、遠くに見ゆる。午後三時頃、アイルランドの白い燈臺が見えて來た。五時クインストン港の沖に、船が停る。此處にコルクと云ふ邑がある。彼の堀のコルクは、こゝから來た詞である。多數の乗客が、こゝで、迎ひに來たランチに乗り込む。彼等はアイルランドから、米國へ出稼に行つたもので、暇になつたから、故郷へ歸へるのださうな。米國へ働きに、此の島から、多く出るから、政府は遂に制限法を設けて、家族を擧げて、移住出來ないやうにした。其れで彼等は、儲けた金を持つて、故郷に居る親や、兄弟に遇はんが爲めに、歸へるのである。

と云ふ。今宵名残りの宴を開いた時、遠洋航海の樂奏起ると、最うおす歸へる英國人は、俄かにさわき立ち、拍手するやら、立ち上るやら、笑ふやらで、いと賑やかな食堂となる。春めいた食堂は、何となしに、陽氣になつて來る。今夜、船はセント、ジヨーシ海峡を決つて居る。

第四編 英國日記

リバープール着

●同十日 晴天

好きな英國 僕の誕生日 〓リバープール 〓飛脚旅行 〓爆發の

報 〓赤い流車 〓日本風の田舎 〓羊の群 〓愛嬌家 〓チースの失

策 〓グラスゴー着

朝早く服装を整へて、甲板へ出て見ると、未だ英國は見ぬない。此處は、愛蘭と英本土との間にある、アイリツシユ海と云ふ廣い海である。恰度瀬戸内海に於ける、播磨灘のやうである。朝食をすませて、亦甲板へ出たが、矢張り陸が見ぬないから、辛氣臭くて堪らない。僕は英國へ行きたいとは、遠うの昔から思ふて居た。其の空想が今實現されたのだから、甚麼に嬉しいやら……英國の英の字は僕の名である。況してけふは僕

の誕生日に相當して居る。此の日に、好きな英國に上陸するのも、亦不思議な縁！我等船房に居ると、陸が見れて來たと云ふので、皆急いで甲板へ出る。成程船は地峽の間を進むで居る。右岸の方に、高い鐵梁の塔が近づいて來る。其の前を通つて行くと、段々リバープールが見れて來た。彼方にも、此方にも、立派な家根や塔が見ゆる。手荷物を持つたり、卸したり。卸したり、持つたりして、今かくと待つて居る中に、午前十一時棧橋に着いた。かくて船員と握手して、棧橋に下り、クック社から使はした嚮導者に遇ふて、名刺を交換す。此の時彼れから、日本から届いた手紙を受取つた。船に乗り合はした、亞米利加の媼さんが、僕の傍へやつて來て、いと懐しげに、何にやら洒べるから、僕もお達者でと云ふてやる。寛大な英國の税關吏の検査終つて、皆馬車に乗つて停車場へ行く。リバープールは、船が一日遅れた爲め、見物を抜かして。グラスゴー迄で直行する事になつた。宛るで犬がけしかけられた様に、後から追ひ立てる。あゝ飛脚旅行は二度とするものぢやない。道行く市民も、市街もあつたものぢやない。囃の中

で三郎生から來た手紙を讀むと、何ぢや、今橋筋に火藥の爆發があつて、多くの人が死んだと、エ、這麼ことがあつたのかと驚く。

停車場へ行くと、支配人が故さく列車の口迄で送つて呉れる。汽車の箱は赤く塗つて宛るで御輿のやうな体裁である。硝子窓に、青い紙貼り附けて、スモークキングとしてゐる。今日からは三等の流車旅行、其れも英國は紳士でも、三等に乗るからだと云ふ。三等でも敷物も宜しいし、二等や一等と左程かはりない。米國の流車は、席だけ買切りなれど、英國のは一部室買切りで、廊下附である。零時、車草の笛と共に、流車は徐々とプラットホームを離れる。こゝらは日本と同じである。流車も小さいし、レールも狹軌やし、日本の鐵道は全く英國を眞似たらしい。

英國の田舎は日本に能く似て居る。今は樹も野も皆青く、能く繁つて居る。老國丈あつて、家が皆黒くて古い。炊事の煙筒が二つ並んで、家々の屋根に出て居る。丁度糶のやうな形である。畑もなく、唯青草の上に、灰色の羊が群つて居る。英國は農國ではな

い。毛織物の國である。今度の嚮導者はメレンダーと云ふ名で、伊太利人である。彼れ曰く、七箇國の言語に通じて居ると、但し日本語丈は和英の會話書を持つて、片言で連りに饒べる。停車場につくと、新聞く、辨當くと云ふて笑かす。自分の毛のある手を出して、猿々と云ふ。去年の一周會員が、自分に猿と料名つけたと笑ふ。茶色のコート被て居るから、一層猿のやうである。赤ら顔の愛嬌たつぷりと云ふ、滑稽な人間である。メレンダーと云ふ意味は、辨當と云ふことになる云ふ。

午後一時、食堂へ行つた。一番終ひに、チースを持つて來たが、僕は初め果物かと思ふて、小刀を取つて、大きく切り、皿にのせると、鎌田君も少し切る。隣席の婦人が、何にか笑ふて居る様子に、其れと氣がつかずに喰ふと、婦人と大熊さんが腹を抱へて笑ひこける。僕は餘りの失策に、極まりが惡いやら、可笑しいやらで、姑しは茫んやりして居た。英國では必ず食後チースを出す。其れも紅塗つたのや、大けなのや、小さいのがあるから、我等には見初めなのだ。而かもけふのは、果物のやうに、皮が附いて居る

から間違ふた。婦人二人が、鎌田君に他の人が笑はれるけれど、後であつたから、其の事が無かつたのであると、辯解して呉れる。流石に英國の婦人も如才は無い。メレンダーさんは我等を大に冷かす。此の事は後日、洋行中の珍談となつた。
午後六時蘇格蘭のグラスゴー着。鐵道會社のホテルに入る。

グラスゴー

●同十一日 晴天 造船場||市廳||セント、マンゴー寺院||美術館||

詩人スコット||音樂教師

けさ馬車二臺並べて、グラスゴーの街を通はると、日本人として注目を受ける。故郷と澄して、市街を離れると、クライド川の一運河に出る。此處には、有名な造船所があるのである。馬車が停つて動かない。何んだ、唯外から見ただけかと、大に不平云ふて居ると、馬車はケーブルの船に乗つて、彼岸へ渡つた。矢張り見るのであつたかと、氣が

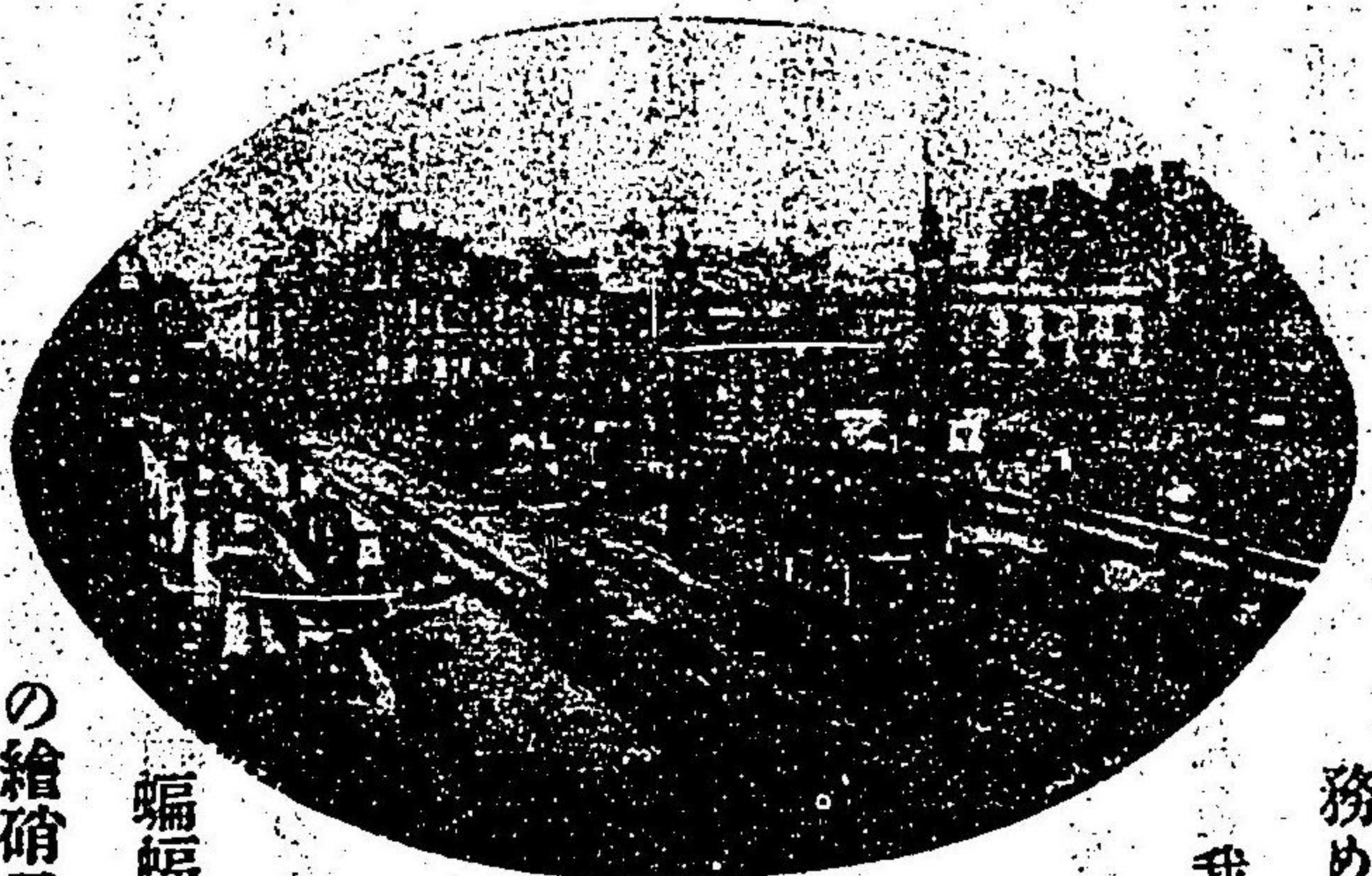
付いていと憎ぶ。見素ばらしい労働者や、汚い毛布を纏ふた女や、跣足の子供等の通はる町を軋らせて行く。不圖馬車は、ブラウンシップ、ビルディング會社前に停る。刺を通ずると、役人が親切に、構内を案内して呉れた。船も家も同じ理屈で、別に六ヶ敷い仕掛けでない。先づ龍骨を据へつけて、其れに足場で圍ひ、其中へ船骨を張らして、載せ掛けて居る。舷側の材料は、ちやんと下で組み合はしたものを、足場から、起重機で引上げる。實に造作のない話である。更に運河へ出ると、新造船が浮ひで居る。運河は狭い小さなものなれど、水深が極めて深かいさうである。其れも其の筈、三萬噸からの船を浮べて、平氣なんだから……我等は次ぎに、發電所、鑄造所、鐵工所、木匠所を見た。鑄造所へ這入ると、職工が眞黒ろな顔で、眞黒ろな服で働いて居る。木匠所へ這入ると、老幼の職工が、斧をふるひ、鑿を取り、鉋で木を削つて、一生懸命に働いて居る。斧、鑿、鉋、鉋にも、種々様々の物がある。其の他諸所を見て、會社に歸へり役人に禮云ふて、造船場を去つた。馬車をグ市の郊外に走らせて、正午前ホテルへ歸へ

ると、一日本人が我等の訪問に来て居る。大阪の山下氏と云ひて、こゝの名譽領事館に務めて居られるのである。けさ新聞で見たとかで、故さく

我等の爲めに、奈良漬を持つて來て下された。

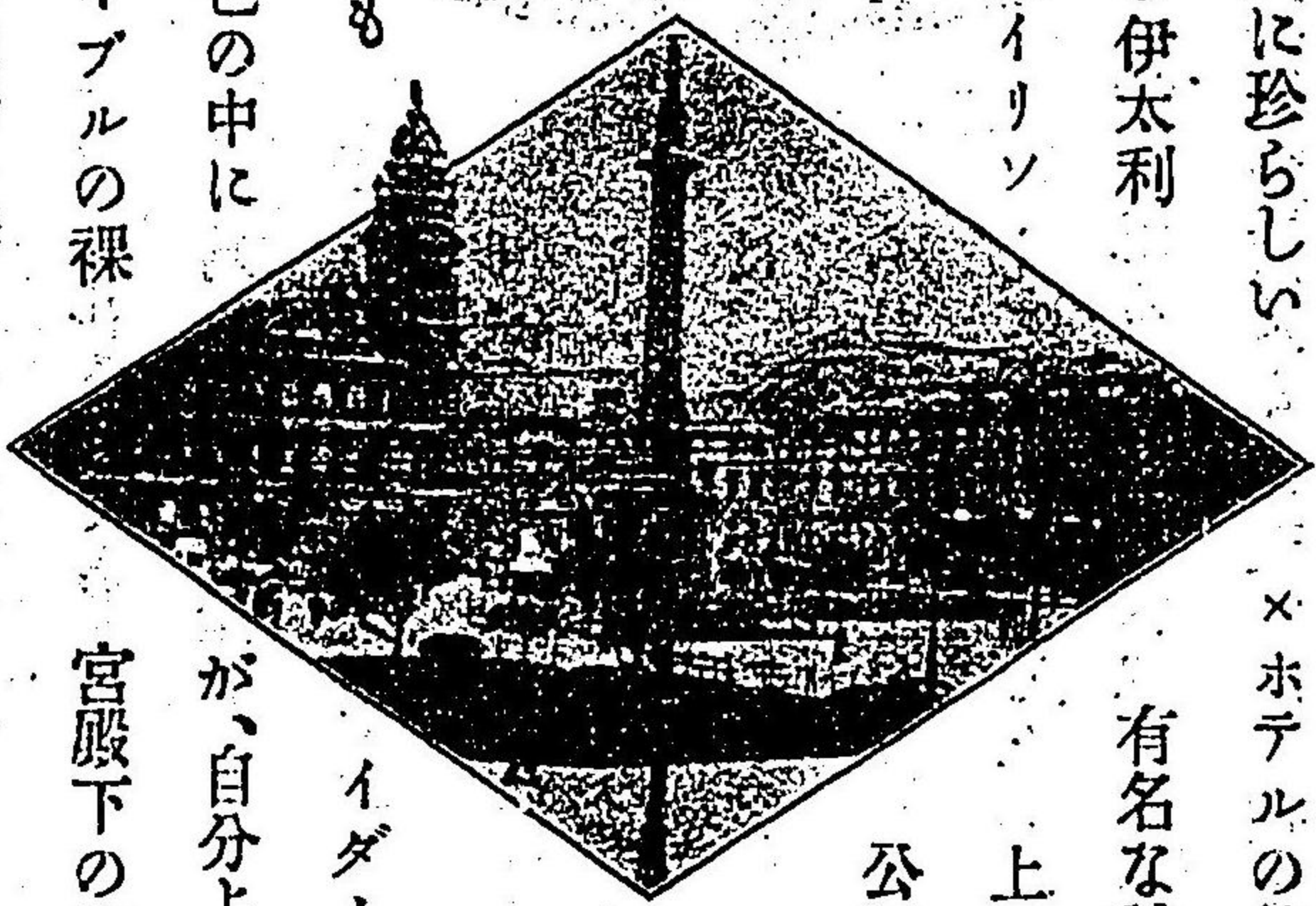
午後は市廳を見物した。大理石の建築で、内部はモザイクの裝飾で、眼も冴ゆるばかり美しい。會議所には特に新聞記者の席を設けてある。貴賓接待所には、立派な壁畫がある。こゝは先年伏見宮殿下の泊られた所である云ふ。何れも其の美麗な建築を賞して、其處を去る。馬車はセント・マンゴ寺院の前に出る。同寺院は千七百七十一年の建築である。

蝙蝠の羽翼のやうな天井が、柱と柱の間に繋がつて居る。基督の繪硝子の窓が、赤や、青い色で、いと目立つ。坊主が藁の心に



燈つけて、暗い所へ連れて行つて、古い所を見せる。一周して同寺院を出で、亦馬車で美術館へ行く。館内には道がに珍らしいものが多い。ターナの近代の伊太利ミレーの禽學、肖像畫ではフイリソプ四世、アン、リーグ、其の他、百姓の娘、春、鴨と湖水、百年前のグラスゴーの船渠等であつた。

像銅のトッコス



×ホテルの前には、彼の湖上の美人で、有名な詩人スコットの銅像が、塔の上に立つて居る。其の周圍が小公園になつて居て、綺麗な花が咲き亂れて居る、けふ案内した男は、平生は音樂の教師とやらで、閑になるとガイダーになると云ふ。彼れの妻君が、自分よりも上手なので、先年伏見宮殿下の御前で一曲奏でたさうな。

蘇格蘭の湖水

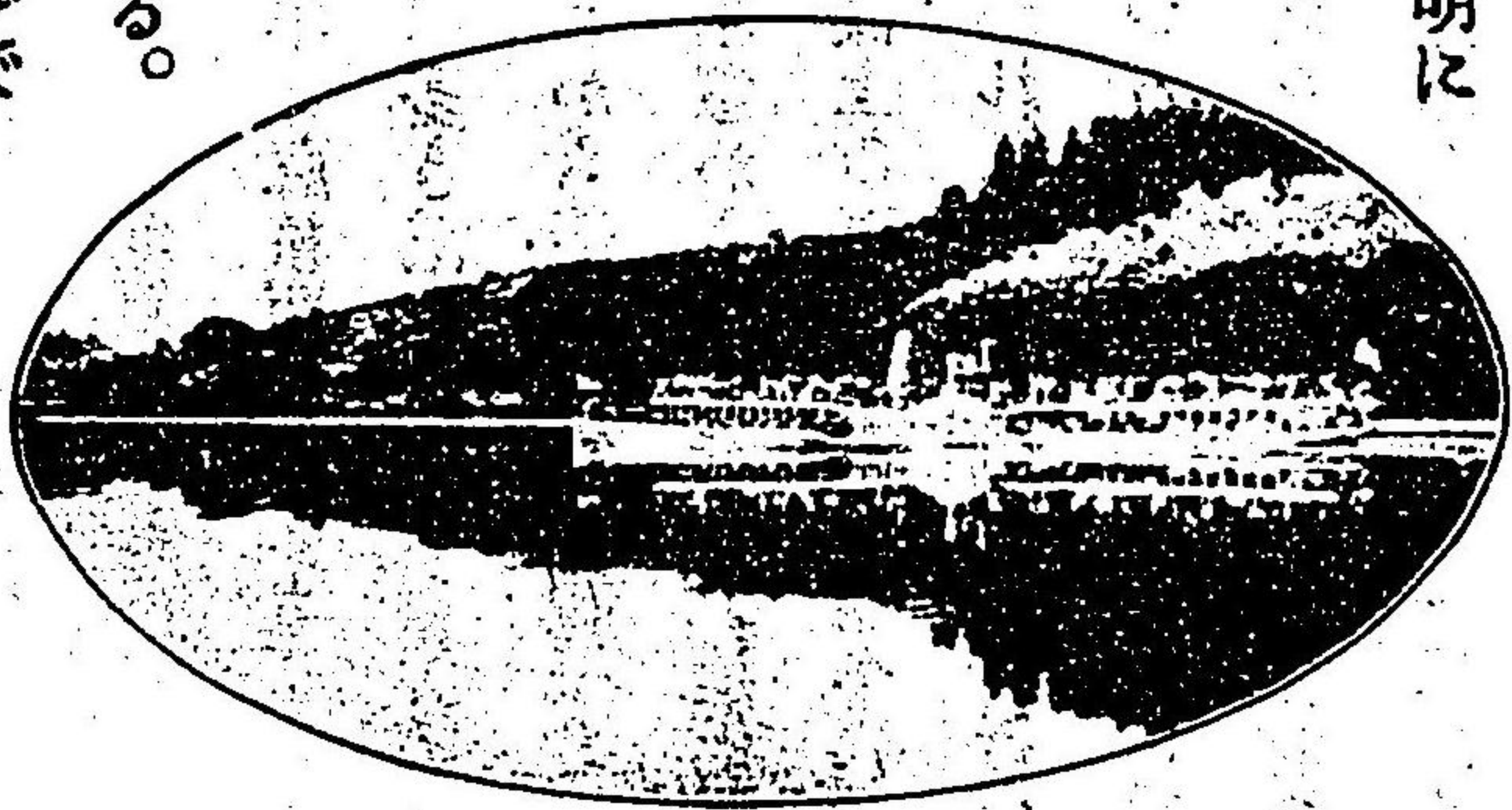
●同十二日 雨天 ロック、ロモンド湖||亞米利加人||群羊||蘇格蘭の山||カ

ツリン湖||湖上の美人||藁小屋||乗換へ多き汽車

朝グラスゴー出發、エチンバラへ向ふ。さなふりバープールから着いた宮島親子と、こゝで亦一所になる。山下氏故さく停車場まで送られた。車窓から、ブラウン造船場のマストが見ゆる。間もなく乗り換へ二度やつて、其れから湖上の汽船に乗り換へた。汽船はバロッチの繫場から離れる。僕と鎌田君と、雨風に吹かれながら、舢の方へ行つて、湖水のけしきを眺めた。傍に寫眞屋が居た。ガラスに映つる影を見よとて、鎌田君に促がす。其れから鎌田君は寫眞屋と馴染みになる。小島の間を通つて、紆ねく曲つて行く。忽ち山と山に圍まれる。或る處に、若い男と女が、上陸して直ぐボートに二人乗り込み、男は楫、女は楫を取る。ラス、ローワーデンナ、ターベット等を経てイング

アース子ードにつく。ホテル前で馬車を借り込み山道を上る。亞米利加人三人乗つて居たが、僕の隣席に居た一人、僕に話かける。私しは米國の文明に感心したとお世辭振り蒔くと、有難うと云ふ。互に名刺を交換して大に親睦となる。あゝ我等は未だ米國人と縁が切れないと見ゆる。大熊さんは壽で、人に笑はれる。メレンダーさんは滑稽な事云ふ。米國人はグラスゴートの新聞を見せて、我等一行の姓名が載つて居ると云ふ。茲に日本、英國、米國、伊太利の同盟が出来た。茫々たる蘇格蘭の山地に、馬車を走らせて行く。羊が赤子の啼くやうな聲でなく。車上の人啼き眞似すると、羊も馬車を追ふて来る。彼處にも、此處にも、灰色の羊が迂呂附いて居る。馳てストロナツクラチヤルの一ホテルの前に着た。此のホテルで

湖 ドン モ ロ ク ツ ロ



喫食後、此の前から亦汽船に乗り込む。だが岸から離れると、熾んに雨が降つて来る。此の湖水はスコットの詩に著るき、湖上の美人で名高い、カツリン湖である。雨が熄むた頃、上陸して亦馬車に乗り込み、蘇格蘭の寂びしい山道を走つた。山道と云ふても、唯見る青草の生れた一高原である。

高低起伏した山地を下ると、是は不思議！藁小屋を見附けた。其の見素ぼろしさ、古ぼけた昔の儘である。あゝ英國にも恁麼のがあるかと思へば、實に豫想しなかつた。亞米利加黨は、盛んに英國の悪口を云ふ。米國なら、自働車でも走らす所を、馬車でやる。斯那所は鐵道でも敷けば宜いのに、故さく馬車に乗つて、山越へとは氣が知れぬ。英國人は妙な所に、趣味を持つて居ると不平百出す。然かし僕は寧ろ此の古風な馬車旅行に賛成する。此の美しい蘇格蘭の山水を見たのは、實に嬉れしかつた。日本人の餘り踏み込まない英國の北部を見たのは、實に幸福である。午後五時頃アバーホイルの一ホテルについた。

夕方汽車に乗つたが、屢々乗り換へする。

暮れかゝるお城の天主閣に、ひらく

と鳥が飛びで居る。何だか大けな町が

来たなど思ふて居ると、スターリ

ングと云ふ停車場につい

た。こゝで亦乗り換へし

て出發したが、夜の九時

頃やのに、未だ空が白ら

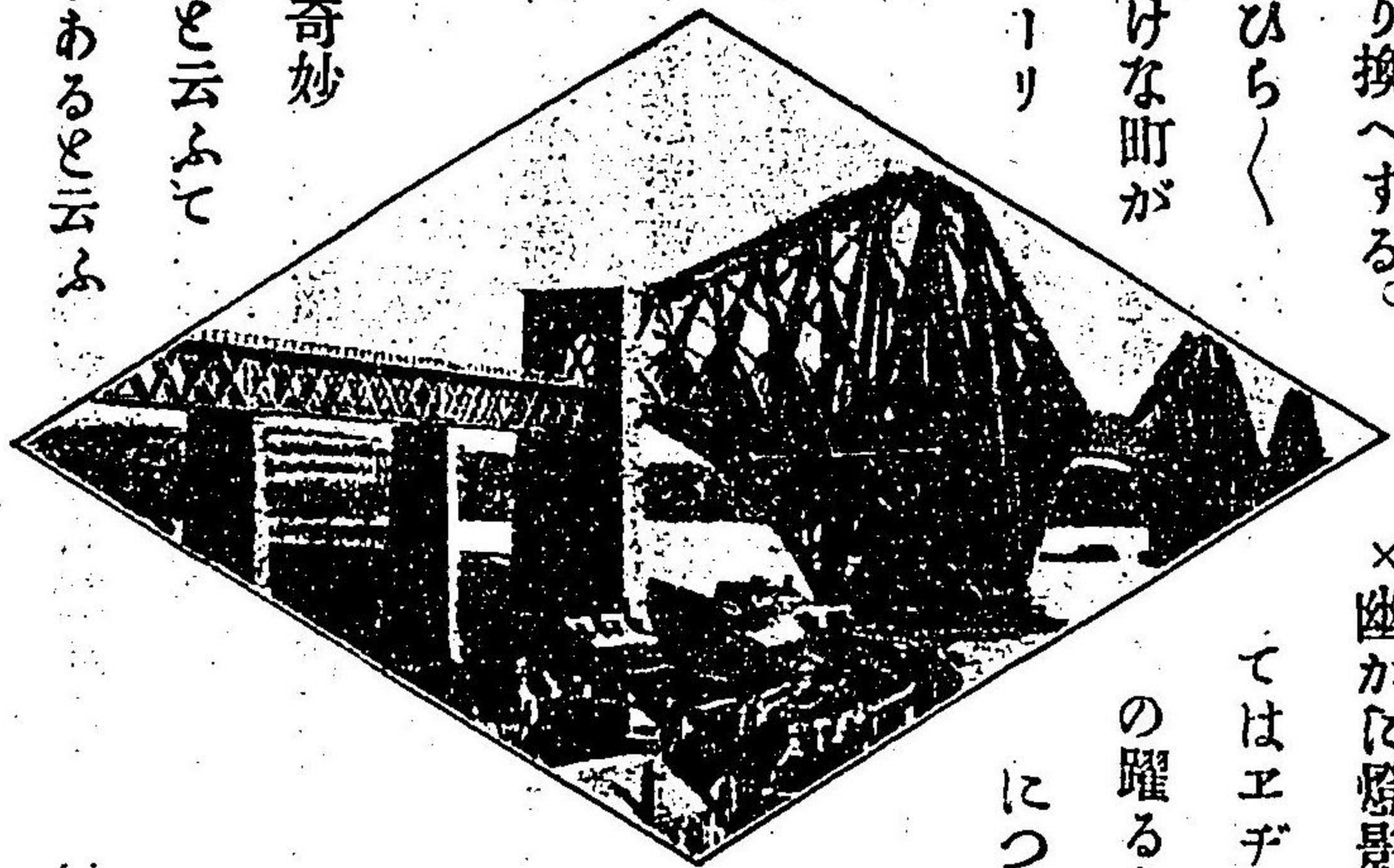
くして居る。全く暗く

なつた頃、錦帯橋のやうな、奇妙

な大鐵橋を渡る。フォース橋と云ふて

長さ實に千七百六十五ヤードあると云ふ

エジンバラのフォース橋



×幽かに燈影が灣の彼方に見ゆる。さ

てはエジンバラに來たかと、心

の躍るを抑へて待つ程に停車場

についた。

エジンバラ

●同十三日 晴天

プリンス街

スコットの紀

念塔

バラ

胃

蘇格蘭の疵 氣象臺 裁判所 大

學 昔の汽車 燈かけ

エジンバラは蘇格蘭の最も繁華な都會であつて、

印刷業の中心地である。けさ馬車に乗つて、古雅掬

すべき、瀟洒としたプリンス街を通つて、お城へ行

く。こゝは歐羅巴中最も美しい町だと云ふ。此の通

りに詩人スコットの紀念塔がある。元彼れはグラス

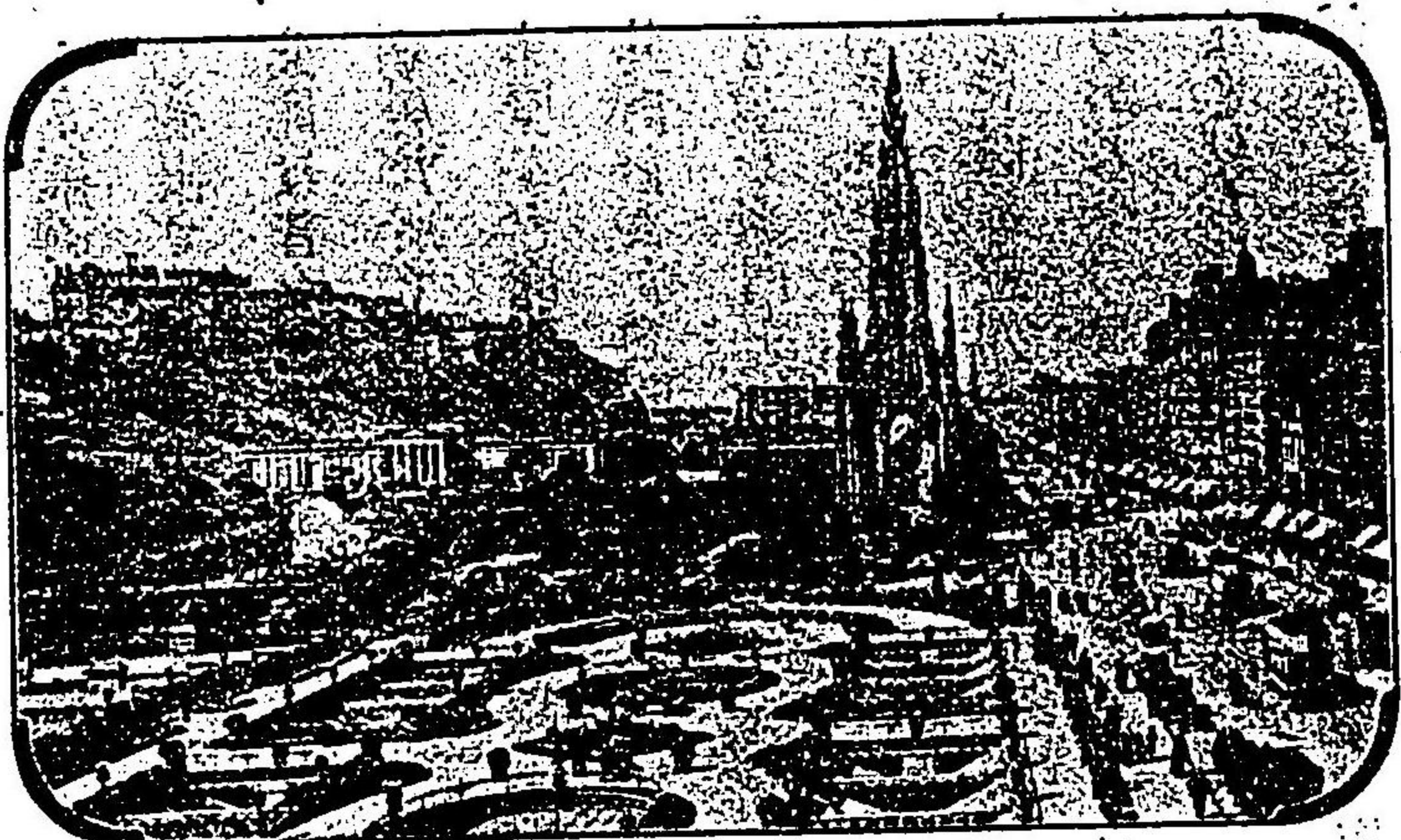
ゴー出でなく、此の地の産である。やがて歩哨の立

てる營門を通つて、城内に入る。城頭に立つて見れ

ば、エジンバラ市は一眼である。兵隊が城下から

仰向いて我等を見て居る。紀元六百十七年に、此の

城廓は王イドウキンに依つて築かれた。其の後久し



エジンバラ市のプリンス街

く英蘇兩國間に争ひ戦ふた所である。さて其處を去つて、兵營前へ來ると、兵隊が武装して出て來る。昔の宴會室の跡へ入ると、其處には、甲冑、刀劍の類が陳列されて居る。此處は昔女王メリーの住む

で居た所である

事歴など聞いて

其處を去り、間

もなく城門を出

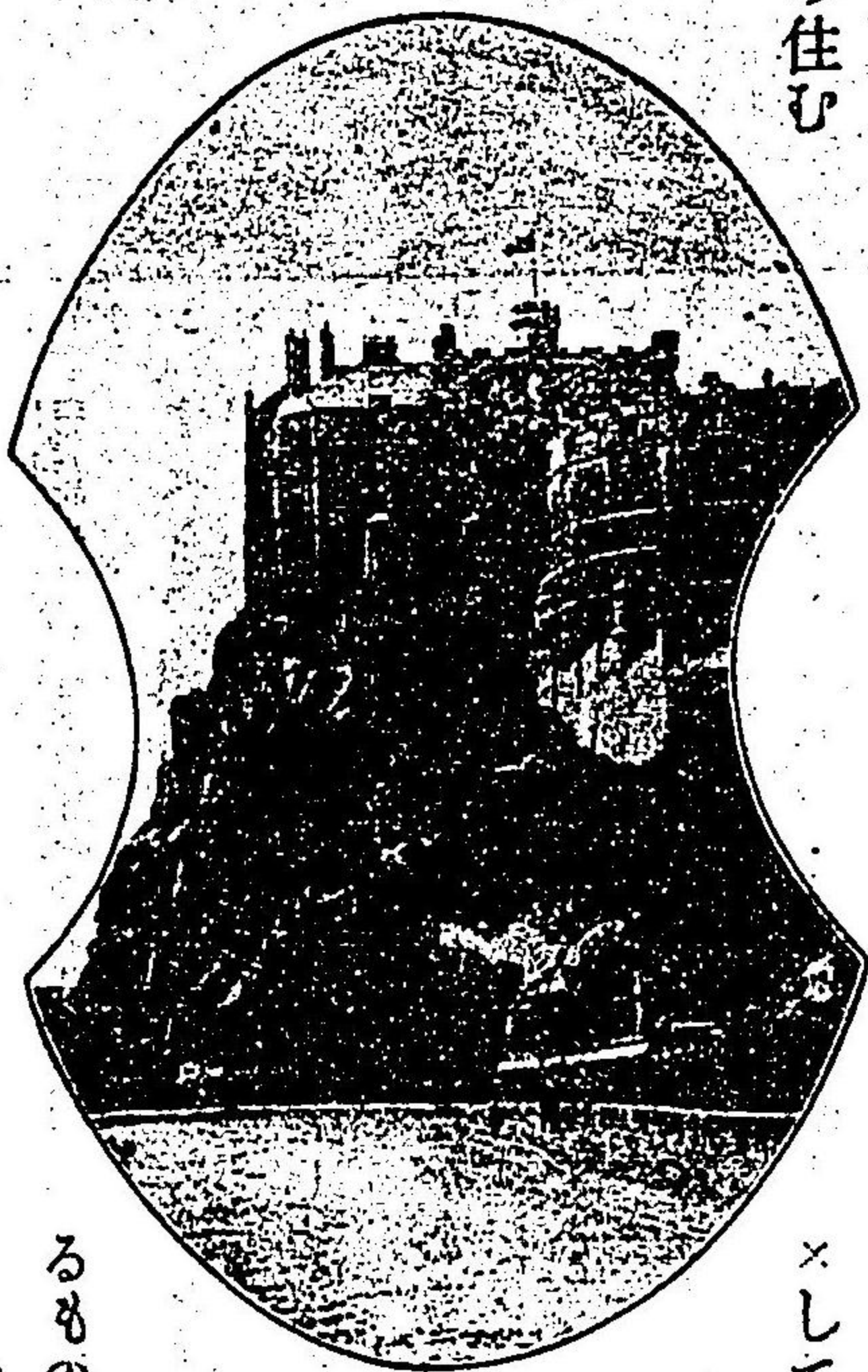
ると、其處に妙

な兵隊が整列×

おかしや、簫筆のやうな笛で、飴屋の笛のやうに、ペーペーと吹く。けつたいな軍隊やなど打ち笑ひつ、馬車に乗る。

城臺を打ち眺めて、坂を下り、町を離れて、山麓に出る。そこに羊が迂路々々して居る

城古のーラメンガエ



×して居る。白の上衣に、紋章付きの黒のパッチ佩いて、脚絆上に脛を出して居る古風な兵隊もあるものと見て居ると、

遙かの丘上に、柱ばかりの凱旋門がひよろりとして居る。是れは、英國がナポレオンをいはした紀念として建てたが、途中で經費がつきて、其の建築を中止した。其れで市民が蘇格蘭の疵と名づけたのやさうな。カルトン丘に登れば氣象臺がある。其處に、クリミヤ戦争で分捕つた大砲を据へ附けて居る。案内者笑つて曰う。貴方がたの國にも、露西亞から獲つた大砲が多いでせうと。丘陵を下り、民事裁判所前に出ると、不圖宮島親子と遇ひ、其處で訣れる。法廷に入れば、辯護士が卷髮の髻被つてぶらついて居る。古めかしい、何の真似かと笑ひながら傍聽席に入ると、狭い所で裁判をやつて居る。簡單なものかなと思ひつ、其處を出る。四百年前からある、エデンバラー大學の前を過ぎて博物館へ行く。同館で珍らしかつたのは、昔の汽車に使用した汽罐車が残つて居る。發電機、エンヂンなどの模型が硝子戸に入れてある。外からボタンを押すと、忽ち電氣が通じて、機關の各部が動き出す。其は器械運動の縦断面を見せる爲めである。中々宜い思ひ付と感心する。滑稽であつたのは、千里鏡の裏へ人が隠れると、手や顔が化物見

たいに擱がる。皆噴き出して大に笑ふ。けふの案内者は、英國人丈あつて、品が良い。案内ぶりもよく、唯要點のみ見せるから、大に宜かつた。歸途一寸美術館を見て、ホテルへ歸へる。

午後は休むで、夜三人で、ホテルからそゝる歩きに出た。こゝは米國とは違ふて。若い女が澤山出歩いて居る。或る高い處に上つて見たが、月が向ふから、ぼんやりと出て來る。エデンバラの市街は、今何處の家でも、燈かけが見ゆる。あゝ人生は、遠い國へ來ても、何にも變はり無し。

リ
ー
ヅ

●同十四日 雨天 リーヅ〓待て〓〓毛織物會社

朝エデンバラを出發して、夕方リーヅについた。我等プラットホームに下りかけると、メレンダーさん日本語で、待て〓〓。荷物を下ろして、下車し、其れから直ぐ近いホテ

ルに入る。早速クック社の支店長と、メレンダーさんに連れられて、ホテルを出で、リーヅの町を歩いて行くと、雨がふつて來たから電車に乗る。間もなく電車から下りて、毛織物會社へ行くと、その支配人の案内で、丁寧に製造所を見せて呉れた。古い羅紗を粉末にする所から、糸に紡むぎ、其れを器械にかけて、新らしい織物にする所まで見た。視察後支配人室で、厚く禮云ふて、同社を辭した。歩行中案内者云ふ、英國は米國とは違ふて、製造所の中を見せないが、今日は前から取り計ふて置いたから、彼のやうに親切に見せて呉れたのであるから、其の好意を御察し下さいと。

リーヅ市は英吉蘭の中央から少し北部にある都會であつて、有名な織物市場である。織物の外に、硝子、絹、鐵道車輛、革類等の工場がある。

●同十五日 晴天 倫敦着〓セント、アーミンスホテル

シエフィールドの鐵鑛製造地を過ぎて、夕刻倫敦に着いた。我等の泊つた旅館は、セント、アーミンスホテル……

世界第一の倫敦 (二)

●同十六日 晴天

バッキンガム宮 〓 ハイド公園 〓 アルバート記念塔 〓 リツチ

モンド公園 〓 ハンプトン宮 〓 キュー公園 〓 夜のウエスト

ミニスター橋 〓 英國議會

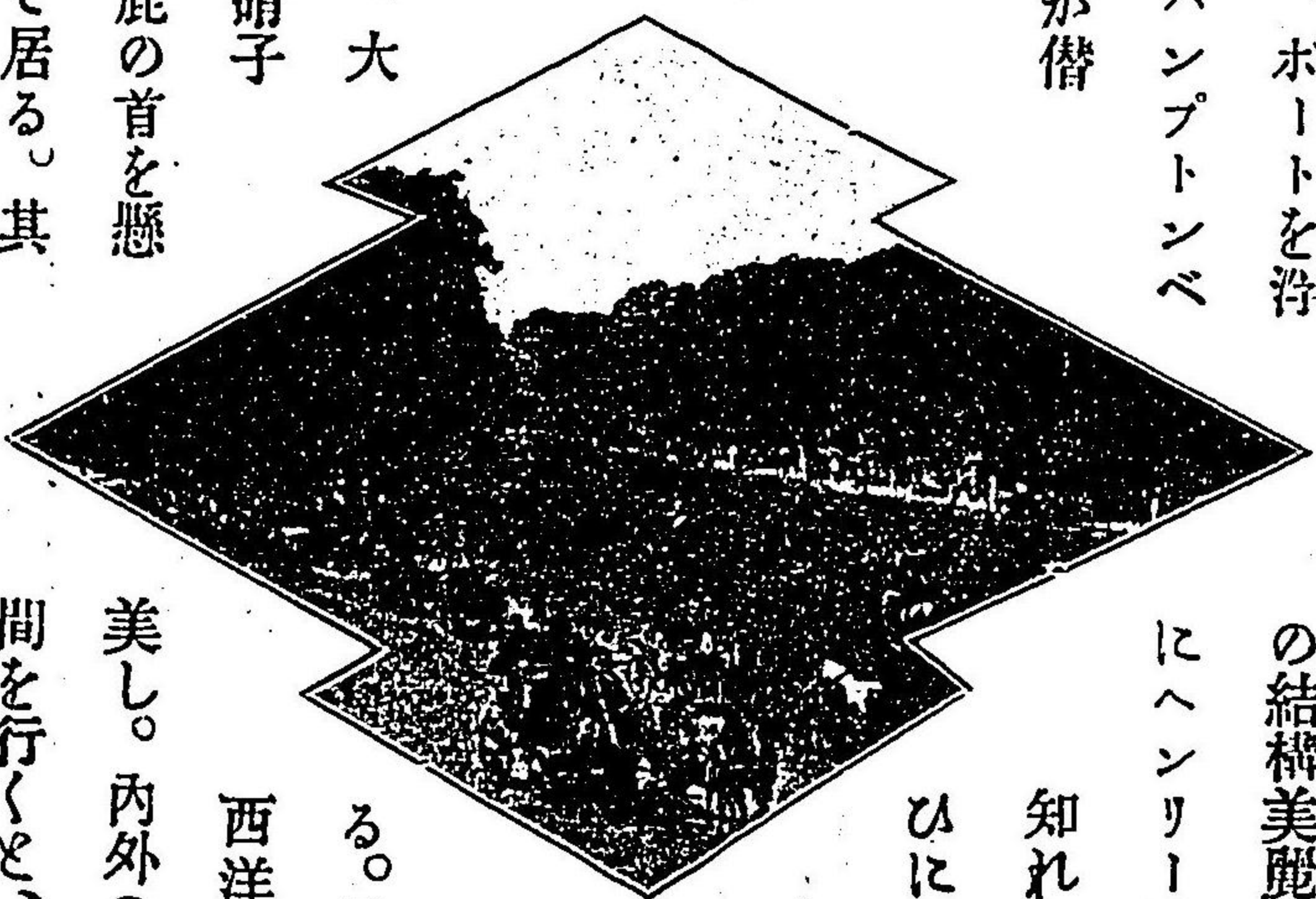
けふは日曜の事として、公園廻はりど決定し、倫敦の初見物に出掛ける。けさ馬車に乗つて、バッキンガム宮の前を通ほる。此の時僕と鎌田君と脱帽した。緋羅紗の服に、白房の帽を被ぶつた、活人形見たいな歩哨が、銃を肩にして動いて居る。姿勢の宜い事、綺麗な事世界第一である。ハイド公園のロツテンローの、廣い道路を走ると、今は白い栗の花盛りで、幾哩ともなしに、鬱蒼たる樹林が続いて居る。同公園を出で、アルバート親王殿下の記念塔前に来る。此の君は女王ヴィクトリアの夫で、賢明に渡らせられ常に文藝、科學哲學の保護者であつたから、歿後、縁故ある學者の像で、圍むた記念塔

を建てられたのである。更に進むと、澤山な跛者がやつて来る。是は今日日曜であるから、病院へ通ふのだと云ふ。教會の前を通つた時、案内者の云ふには、近頃日曜になつても、お寺に詣る者少なくなり、寧ろ哲學的の神を信するやうになつた。ティムス川のハンマースミス橋を渡ると、バーンスの郊外である。或る居酒屋で少憩後、リツチモンド公園へ行く。遙かに溶々として、ティムス川が湖水のやうに見ゆる。此處から見れば世界第一と、案内者自慢云ふ。惜しい事には、此の公園で、一日の清遊をやつて見る事が出来ない。恰度遠い所から、美人を見るやうな、心地がする。今更ら忙しい旅行と、いとかこち顔に、馬車に乗り込む。キングス、タウンの寂しい町を駈けると、グック社の遊覽馬車に、屢々出遇ふ。案内者笑ふて云ふ。倫敦で住みながら、未だ倫敦を知らぬ者が集つて、けふ一日乗合馬車で、見物に廻つて居るのであると。成程倫敦は廣い所だ。燈臺基暗しとは此の事を云ふにや。

廳てハンプトン宮の前へ出て来る。其の門前の飲食店で、晝食後、僕と鎌田君と萩原老

人と三人、テームスの清流に、ボートを浮た。三十分後、皆打ちつれてハンプトンベ宮に入る。此處は昔ウルシ僧が僭越を極めた跡で、ヘンリー四世に奪はれた王宮である。塔門の上に、十二支の時計が附いて居る。各室を巡ると、女王アンの寢臺、武器室などがある。大廣間に入ると、窓は美しい繪硝子で張り詰め、窓と窓の間に、鹿の首を懸け、四周に大壁畫をめぐらして居る。其

ハイドパーク内ツロテロ



の結構美麗を極めて居る様、如何にヘンリー王が贅澤をやつたか、知れやう。かくて廊下連たひにお庭へ出る。噴泉籬の如く漲ぎり、蔚乎たる茂林整然として、森樾を爲し、紅紫の花芝生の上に、娟を競ふて居る。日本の櫻も美しけれども、西洋の草花も亦いみじう美し。内外の遊覽客、肩摩轂撃の間を行くと、立派な葡萄棚の下に



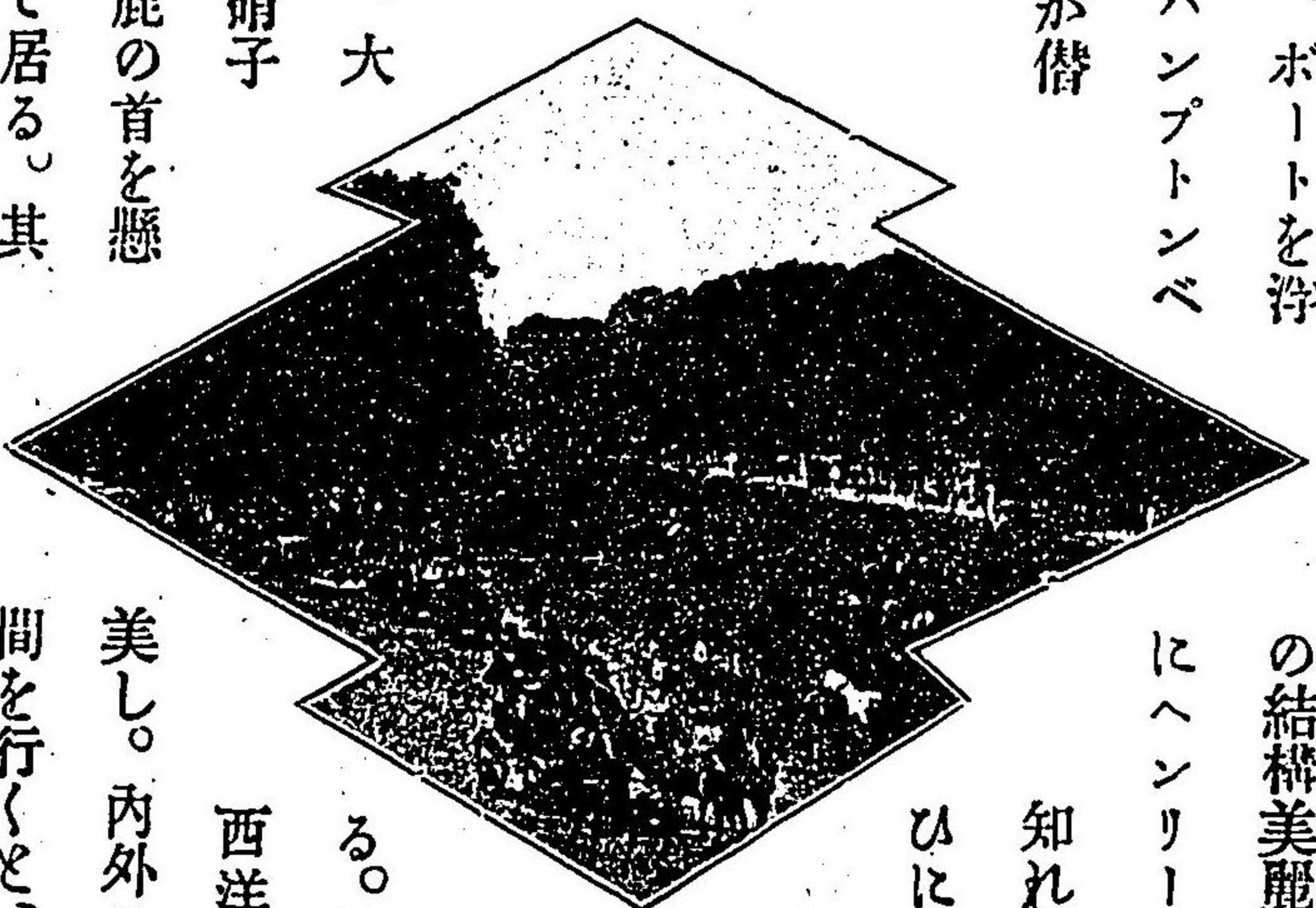
ハンプトンコート

出て来る。其れから獅子門を出ると、其處に待つて居た馬車に乗る。キュー公園内を散歩すると、けふを晴れと被飾つた女が、花の顔に誇つて、裳裾片手に、寒げ行くもいとおかし。熱帯植物の温室に這入つたが、流石に英國は大國丈あつて、珍奇な物を集めて居る。一番多いのは蘭科の植物である。餘り暑かつたから、外套持つて其處を出る。英人には公德心があるから、誰れも公園の樹を折る者が無いさうな。其れが不文の法律となつて、別に禁制の立札を建てる必要も無いと云ふ。是れでけふの見物も終り、馬車に乗つて、我等のホテルへ歸送を急いだ。夜は僕獨り散歩に出た。瓦斯燈散らつくセント、ジ

人と三人、テームスの清流に、ボートを浮かした。三十分後、皆打ちつれてハンプトンベ宮に入る。此處は昔ウルシ僧が僭越を極めた跡で、ヘンリー四世に奪はれた王宮である。塔門の上に、十二支の時計が附いて居る。各室を巡ると、女王アンの寢臺、武器室などがある。大

ハイドパーク内テッロロ

廣間に入ると、窓は美しい繪硝子で張り詰め、窓と窓の間に、鹿の首を懸け、四周に大壁畫をめぐらして居る。其



百三十四
の結構美麗を極めて居る様、如何にヘンリー王が贅澤をやつたか知れやう。かくて廊下連れひにお庭へ出る。噴泉瀧の如く漲ぎり、蔚乎たる茂林整然として、森樾を爲し、紅紫の花芝生の上に、娟を競ふて居る。日本の櫻も美しけれども、西洋の草花も亦いみぢう美し。内外の遊覽客、肩摩穀撃の間を行くと、立派な葡萄棚の下に



ハムプトンコート

出て来る。其れから獅子門を出ると、其處に待つて居た馬車に乗る。キュー公園内を散歩すると、けふを晴れと被飾つた女が、花の顔に誇つて、裳裾片手に、寒げ行くもいとおかし。熱帯植物の温室に這入つたが、流石に英國は大國丈あつて、珍奇な物を集めて居る。一番多いのは蘭科の植物である。餘り暑かつたから、外套持つて其處を出る。英人には公德心があるから、誰れも公園の樹を折る者が無いさうな。其れが不文の法律となつて、別に禁制の立札を建てる必要も無いと云ふ。是れでけふの見物も終り、馬車に乗つて、我等のホテルへ歸送を急いだ。夜は僕獨り散歩に出た。瓦斯燈散らつくセント、ジ

エームス公園を抜け通つて、ウエストミニスター橋を渡る。テームス河の沿岸に聳ゆる議會の塔高く、時計動いて、ガン〜と寺の鐘のやうに鳴る。あゝ英國は飽く迄で保守的の國である。河岸に電燈の連れる所、一寸中の島公園のやうである。

無線の二階附きの電車橋上に通ふて居る。橋から後戻りして、議事堂前へ來ると、煌たる燐燈、砥の如きコンクリートの道路に反射して、鏡の如く光つて居る。途上の市民を見るに、如何にも落ち附いて、世界一の市民と云ふ自信力で以て、歩いて居るやうに見える。殊に不思議なのは、男女必ず腕を組み合はして、歩いて居る事である。赤い軍服被た軍人も、水兵も同じである。寂びしい公園のへりを歩いて行つたが、僕は恁麼男女に幾くも出遇ふたか知れない。

(二)

●同十七日 晴天 テームス河畔||グイクトリア街||ロンドン塔||ガータ勳章の謂はれ||金剛石の王冠||セント、ポール寺院||ネルソン、

ウエリントンの墳墓||グック社||博物館||大使館||山座參

事官

あゝテームス河畔に馬車を驅つた。昔チヤールス一世が斬頭臺の露と消れた前を通はるセシルホテルの家根の上に、旗の蹴れるは、丁抹の王子が泊つて居るのだと云ふ。象形文字を刻じた埃及の塔が岸に立つて居る。河岸に義勇船を繋いで居る。是は有志の市民が、海軍の練習をやる爲めなのである。ウオータロー橋を横に見て行くと、遺言取調べ所、辯護士事務所などの前を過ぎる。グイクトリア街に曲がると、此處は商業地で、馬車と馬車、自動車と自動車、荷車と荷車で、一杯に詰つて、動けないやうに立往生して終ふ。其れを雲を突かんばかり背の高い査公が、旨い具合に差配して、通はられるやうにする。世界に名高きタイムス社は、案外小さい、古い家であつた。救世軍本部の前を通はり行くと、案内者の云ふには、ブリス大將は神のやうに、崇められて居ると。市長官舎、株式取引所、老淑女と呼ばれたる英蘭銀行などの前を通はり、ランバースと云ふ

銀行家の集つて居る街を過ぎると、歴史的譚に富むだ、ロンドン塔タワーが現はれた。

ロンドン塔タワーは古るいお城である。一千七十八年征服者ウキリアム王是れを建て、チャールス二世以下歴代の王、皇后が此處に住んで居た。即位式の際には、市中を通つて、ウエストミニスターアベへ行くのが常例であつた。今は皇室の寶物を藏めて、衆人の看覽に供して居る。唯見る幾多の塔が、黒味が、つた練瓦の城廓に立つて居る。塔にはホワイトタワー、アウターワード、バイワードタワー、ミッツルタワー、ライオンタワー等がある。此のロンドン塔と云ふのは、タワー橋の架れる左岸にあつて、英國史の最も趣味ある紀念物である。我等は切符を買ふて、小學生徒と共に城内に入る。門前の緋服の歩哨が今將に交代をやつて居るところである。最初に、昔罪人を川から引き上げて、鐵牢に入れた溝を見た。次ぎに隅屋倉に上つて行くと、王子や、謀叛人を幽閉した獄舎がある。即ち幾多の悲劇を演じた所である。城内を巡つて見ると、十五六世紀頃の兵器、分捕品が陳列されて居る。西洋の具足は、日本のやうに、緘では無い、甲も鎧も悉く鐵板

で、頭も、顔も、胸も、胴も、脚も、手も皆鐵で覆ふのである。馬のつら迄も鐵で裝ふて居る。能う是れで戦争が出来たと思はれた。されど日本の甲冑と比較したら、面白からうと思ふ。例へば、胸當てが真中で膨れて居るなど、自然に日本と一致して居る點ならん。唯西洋のは全部鐵であるから、矢も、又も中々通はらないのである。其の他刀、劔、槍、銃、大砲などが置いてある。刀劔とか銃などは、花模様形つて、壁に掛けてある、別に日本刀も硝子戸に入れてあつた。首枷、手枷などの、昔罪人を苦しめた道具まで揃ふて居る。殊に珍らしいのは、ガータ勳章を見たのである。先年日本へコンノート親王殿下が、英國皇帝陛下の使節として、我が天皇陛下にガータ勳章を献せられた事があつた。此の勳章は王侯、貴族で、最大の勳巧者に下賜されるものである。勳章と云ふても、唯胸に飾る丈でない。頸飾の外に、鞆止めを附ける。抑々其の謂はれが面白い或る夜舞踏會があつた。花の如き少女が、不圖した事から鞆止めを落した。是れを見た或る貴公子が、其れを拂ふて少女に渡した時に、看客が一時に哄つと笑ふた。然るに王

の制し給ふに、惡しきを思ふ者に禍ひありと諫められた。是れが後に有名な話になつて
 ガータ勳章には轢止めを附ける事になつた。我等は此の詩的譚に傾聴して、タワーを出
 る。昔女王アンや多くの名士が斬首された跡などの墓を見て、又他のタワーに入る。此
 處は皇室の寶庫で、歴代の王が即位した時、用ゐた衣冠、油注ぎ、椅子などが並べてあ
 る。硝子戸の中に、鈍金に拇指大の金剛石を彫めた王冠が、燦然として、眼も眩らむば
 かりに光つて居る。人は指輪一つでさへ、珍重がつて居るのに、大けな金剛石を、惜し
 氣も無しに附けて居る。實に驚かすには居られない。亞弗利加から獲つた大金剛石の模
 型も、飾り附けてあつた。王冠は無論の事、油注ぎに至るまで、即位式に用ゐらるゝ道
 具は悉く鈍金である。此處に納まつて居る丈でも、何億萬圓となる。優に戰國艦何隻で
 も出来る。唯々驚歎の外何物も無い。我等は茫然としてロンドン塔を去り、此の興味あ
 る古城に訣れた。

次ぎにセント、ポール寺院を訪れた。其の一大伽藍の大圓塔が、倫敦全市から見ゆる。

是れで、如何に壯大なるか、知れるであらう。幾層の石階を踏むで、堂内に入ると、無
 数の椅子が並んで居る。一抱へもある石柱が、すらりと樹つて居る。奥の禮拜堂には、
 金光燦爛たる壁畫の前に、十字架の基督を祀つて居る。僧侶の好意で、特に地下室に下
 りる。其處には、無数の名士の墳塋がある。建築家クリストファーの墓は床下丈である
 此の人はセント、ポール寺院を建てた人である。彼れの遺言に、我れは此の寺院を建て
 たから、立派な墓は要らない、此の寺院が、即ち我が紀念であると云ふたさうだ。彼の
 トラファルガルの勇將ネルソン提督と、ウォータローの英將ウエリントンの墓がある。
 何れも英國がナポレオンと戦ふて捷ち、國家を泰山の安さに置いた豪傑である。英國人
 が、此の兩人を非常に尊重にするのは、かゝる理由に基づく。
 歸途クック社の本店に立寄る。僕はクック社の信用狀で、多額の現金と引換へた。英吉
 蘭銀行の札は、實に驚くべきもので、實に薄すツペらな半紙一枚である。如何に英國の
 貨幣制度が、信用を尙ひて居るか、解かるであらう。

晝食後、喫煙室に待つて居ると、紐育で残つて居た棕十君が米國から着いた。そこで會員が揃ふたから、皆と一所に馬車に乗つて、博物館へ行つた。其處には非常に珍奇な寶物がある。然かし残念な事には、限りある時間に制せられて、思ふやうに見られなかつたが、先づ大略を云へば這麼物——肉筆聖書、^{マクナカルタ}大憲章の文字、梵語、支那哲學、コーラン印版、皇帝直筆、各國スタンプ、昔の音譜、詩人の筆蹟、ミルトンの筆、四條派、光琳の浮世繪、古メキシコのモザイク、アッシリアの陶器、石器の貸借法及び家屋賣買の契約書、埃及の菓子、麵麩、菓實、鬘、クレオパトラの木乃伊(?)、棺、王妃の木乃伊に指輪、希臘の甕、トロイ戦争の瓶(落城)、埃及の化粧道具、繪の具、習字、書物、木の石版、玩具、賭物、那翁の煙草入れ、シーザ時代の遺物(英國に於ける)等……最後に埃及の大ソフヒングスが、仁王さんのやうに並んで居る處へ出て来る。實に稀大の掘出物である。此處の博物館は、古今東西の工藝、美術の一切を網羅して居る。埃及、印度希臘、羅馬、フィニシヤ、シリヤ、アッシリア等の遺物、伊太利ポンペイの發掘品など

何れも古代文明の遺跡を知るに、絶好の参考品たるを失はない。さすがは、大英國の博物館であると感した。

我等は應て駐英大使館を訪問した。大熊君が同郷の山座圓次郎氏は居られませぬかと、書記官に尋ねると、杯居られます、其れではと云ふて、奥へ行くと、其の人が出て來た氏は打ち見た所、平凡な風采で、蠻からで、一寸田舎紳士見たいな人である。大熊君が山座氏に何うです、外務大臣でせうと云ふと、氏は莞爾と笑ふ。其れも故ある事で、太陽と云ふ雑誌に、未來の外務大臣の候補者として、第一位にあつたからである)氏の曰く、明日牛肉の透鍋でも一所に行きませうと。異議なく賛成、直ちに可決した。

(三)

●同十八日 晴天

トラファルガル街||美術館||ハイド公園内||女の乗馬||犬の墓||透鍋||ウエストミンスターアベ||偉人の墓||旅の縁||繪葉書賣り||プラチナの時計||演劇||料理屋

けふも亦、がた馬車にがたつかれながら、出で行く。官省の集つて居る町を通つて、何時も能く通はるトラファルガル街へ出て来る。街角スケイプの中央に、子ルソン提督の一大高塔立ち、其の下方の四隅に、獅子像伏して居る。此の塔の後方に、美術館がある。古今の名畫、各國の繪畫など、各々年代を逐ふて、陳列されて居る。伊太利、和蘭、佛蘭西、西班牙及び英國の諸派に分つてある。和蘭派の特色としては、細密な點で、近か寄つて見ても、樹の葉など細く畫かれて居る。伊太利は無論の事、西班牙に名畫が多い。英國では、ターナの瀛車と云ふ傑作がある。初め瀛車と云ふものは、畫題にならぬ物と云ふことであつたが、ターナが



トアラガール街角

例の畫風で瀛車を描いてから、一時に聲價を高めたさうである。又同氏のリッチモンド公園の大畫幅は有名である。昔の畫では、ラファエルのマドンナと云ふのがある。其の價格實に七十萬圓であると云ふ。再びハイド公園へ行つたが、けふは前日と異なり、公園内を巡ぐる。競馬場に、女が男の山高帽被つて、馬に跨つて行くものいと多し。或る籬垣の内にある。犬の墓を見た。是は愛犬家が犬の爲めに建てた、小さい大理石の墓である。墓守りに、寫眞買ふて、馬車に乗つて行くと、草場に寢轉ぶ多くの男女石のやうに見ゆる、灰色の羊群など、眼につく。公園内のテームス川の、橋上を渡ると水清く流れて、其の兩岸に、平らの道が附いて居る。樹木蒼々と繁つて居る、他の道路を走つて行く。如何にも涼しげな樹蔭に、馬車を止めて、公園の風景を賞して居ると折りしも木の葉はらくくと散つて来る。馬上の男女、棚外をのそそと廻つて居る。我等はさなふの約束通り、大使館へ行つた。山座參事官は、我等の哀れながた馬車を見て、一笑してあれかと云ふて乗られる。如何に氏が城廓を構へない人であるか、解

かるであらう。其の平民主義の軽い處が、大に氣に入つた。此の人と一所に、馬車を走らせて、日本俱樂部へと行く。姑ばし膳立ての出来る迄で待つて居て、ボーイの案内で、食卓についた。献立を運びで呉れるのは、英吉利の女である。久しぶりで白い飯と牛肉の透鍋で、たんのうした。山座×



ウエストミンスターキアー

に歸へられ、我等は午後三時馬車の來るのを待つて、豫定の如く、ウエスト、ミンスターキアーへ向ふ。

×氏は、矢張り日本人には日本食が旨いやうだと云はれる。食後再び喫煙室で談話が初まる。山座氏は先き

ウエストミンスターキアーは、上下両院の隣りにあつて、其のゴシック式の建築が、古色蒼然として聳つて居る。昔ころが倫敦の一部に過ぎなかつたが、此の寺院を中心として、漸次擴つて、大倫敦の中央になつたとか云ふ事である。倫敦の事を云へば、必ず此の寺院の名が出て來る。倫敦へ來て此の寺院に詣らねば、折角やつて來た甲斐が無い。現在偉人の墓前を通つて、豪傑の風姿に接したら、甚麼に愉快か知れない。同寺院は元セント、ピータ寺院と呼むたのを、東方のセント、ポール寺院に對して、西の寺院乃ちウエスト、ミンスターと名づけたのである。アベと云ふのは、寺院若しくは禮拜堂と云ふ意味になるさうな。ウキリアム一世が始めて此の寺院で即位してから、歴代の王は皆こゝで戴冠式を舉行された。現皇帝エドワード七世も、此の寺内で、踐祚の式を擧げられたのである。剩さへ此の寺院は、王室の御廟所なるのみならず、英國一代の名士の墳墓が麁集して居る。是等の名士は國葬として、此處に埋められる慣例である。然かも、單に日本のやうに、政治家や、軍人のみを珍重がるのでない。學者も、藝術家も、俳優

も皆こゝにある。先づ脱帽して、此の靈地に入ると、正面は大禮拜堂である。其の周圍に偉人の墳墓が銅像式に並んで居る。中には靴ぐら踏むでも構はぬ床下の墓もある。日本人の考へから云ふと、甚だ奇異に感ずるが、歩いて通はらねばならぬ所にあるから仕方ない。其處は自由の國で、形式を尙ふ東洋人の考へ及ぶ所でない。何にも偉人だからとて、左う持ち上げなくても宜い。僕は偉人、豪傑の輩を土足で踏むたのが、頗る愉快であつた。有名な墓を、記憶の儘舉げて見やうなら、政治家では、グラッドストーン、ピット、バッキンガム侯爵、王ではエリザベス女王、アン女王、蘇格蘭王、メリー、ヘンリー七世夫婦、ウキリアム一世、學者ではニュートン、ダーウキン、文學者では、沙翁、テニソン、マコーレー等であつた。墓碑の彫刻に奇妙なのがある。中にも、憔悴枯槁せる病人に、下方から惡魔が胸に矢を向けて居るのがあつた。是は肺病で死んだと云ふ寓意なさうである。總じて西洋の墓は彫刻的であつて、感情に訴へるのか主になつて居る。元來此の寺院は狹隘であつたが、墳墓がふへるから、附ぎ合はして、今のやうに擴がつ

たと云ふ。其れで一々説明を聞きながら、寺院内を歩くのに、並大抵でない。やがて奥の院の禮拜堂へ出て来る。其處で窓硝子の謂はれを聞いて居たら、不圖蘇格蘭で一所になつて、エヂンバラのホテルで訣れた米人三人と顔を見合はし、打ち喜ぶで手を握つた時、彼時から變はりないかと親切に尋ねて呉れる。あゝ旅の縁は不思議な物、蘇格蘭の山で親しくなり、亦ウエストミンスターで出遇ふた。僕は此の時深かく人類の平等を感じた。互に惜しき訣れに、袂を放つて、其處を出て行く。最後にエドワードの神壇を見て、同寺院を出る。

車上の我等に、繪葉書賣りが走つて来て、買ふて呉れと迫まる。男と女と居たが、女の方に買ひ給へと云ふに、逐ひ僕も其の方に買ふてやつた。あゝ可笑しやと云ふ中に、馬車は動いてウエストミンスターを去つた。一寸クック社で、支配人に遇ふてから、同僚と別れて、僕はメレンダー君に連れられて、鎌田君と一所に、自動車に乗つて、ベンソン時計店へ行つた。兄さんに頼まれた。プラチナの片硝子の時計と云ふのは、同店の

専賣に係かるのである。其の時計を注文すると、店員の爺が置卓子の上へ差し出す。誰れしも、普通の銀側しか見て呉れない、損な時計なれど、価格はと云へば、眼がまひさうな高價である。而し幾くも高くても、仕方ない。一旦兄さんに頼まれたのであるから買つちまつた。日本の珍客と思ひけん、自分が歸へる時、其の爺が恭々しく扉の前迄で送つて出た。

夜は鎌田君の知れる一英人ウード氏に遇ひ、三人一所に、芝居見物に出掛けた。劇場へ行くには、西洋の習ひとて、フロックコートを着用した。男爵俳優の務めたと云ふ、ライシユーム座へ入り、真正面の棧敷の椅子に依ると、今正に劇を演じて居る最中であつた。藝題は佛文學者作「バスチーユの捕虜」と云ふのである。俳優の動作と説明とに依り略々了解出来るやうになる。畢竟、双子の王子が戀愛の爲め争ふて、牢獄に投せられた弟が、忠義な家來に扶けられ、悪黨な兄が牢屋へ投り込められると云ふ悲劇である。筋は解かつたが、戀の爲めに、兄弟が争ふなんて氣に入らん。芝居は、どかどかと街

路に出る。皆靴だから、日本のやうに、下足番に折し合ふ煩雜が無い。二人は倫敦有名の料理屋へ連れて行かれる。我等は美食に飽きながら、啾啾として起る樂奏を聞く。今鳴る曲は獨逸のワグネルの作であると云ふ。天井にはぐるぐる扇風器が廻つて居る。食堂一杯に白いテーブルが置かれて居る。夜の十二時であるのに、客人で詰つて居るのは、大方芝居の歸へりなのである。ウード氏は、彼の劇場で、今夜見た藝題の前に、ハムレットを演じて居たと云はれる。食事済むで、其の門口で、氏に厚く禮を述べると、何う致しましてと云ふ。同氏と訣れて、二人馬車を驅つて行つたが、コンクリートの道路に當る蹄の音、唼々とひいて、瓦斯の燈影とよくとする、ウエストミンスターへの前を行つた時、嗚呼我が心は如何なりしぞ。

(四)

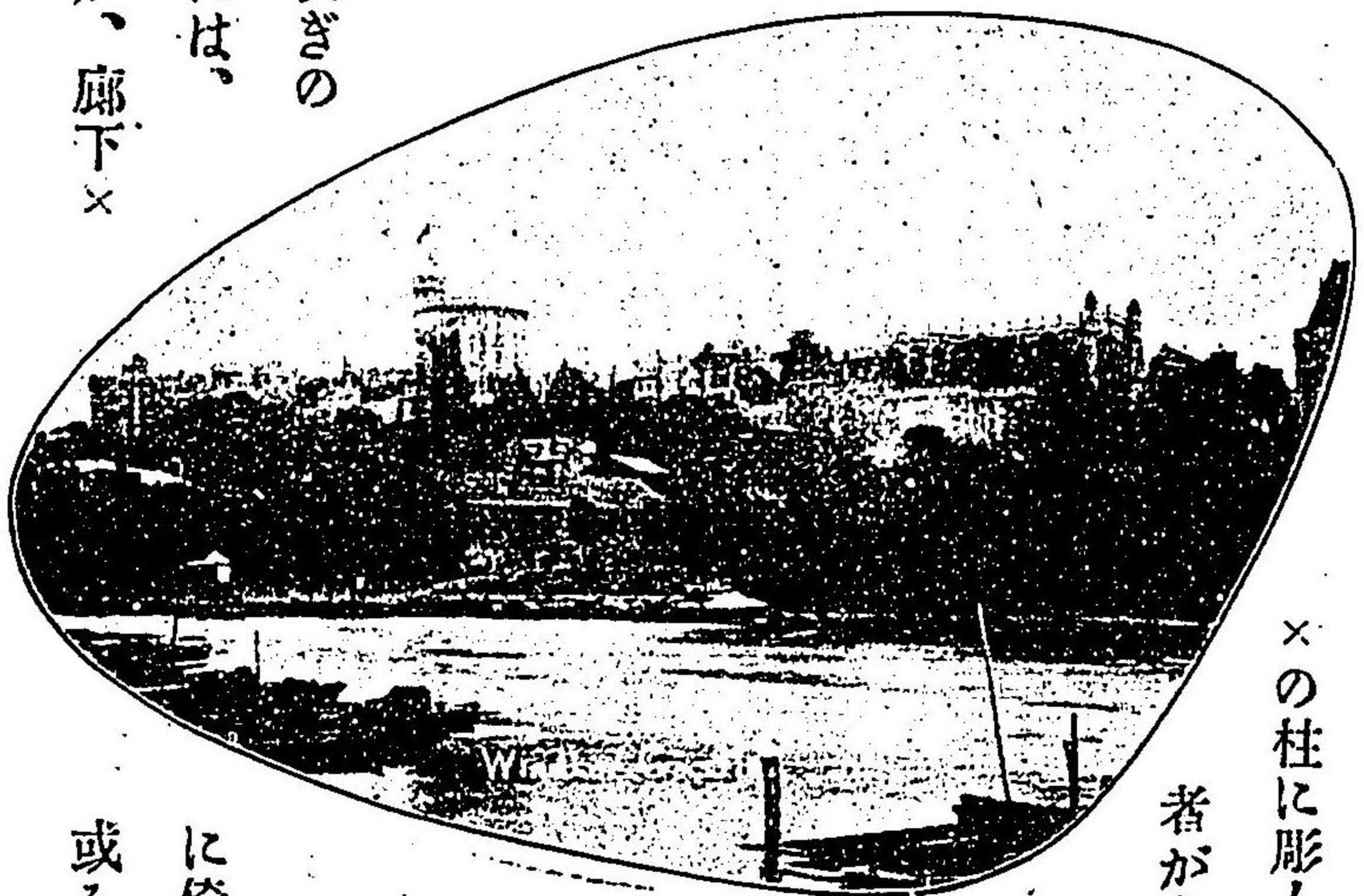
●同十九日 晴天

ウキンズル宮 || 王城の拜觀 || 菊花の御紋章 || 日本の武器 ||
ガータ帶勤者菩提所 || 絹帽の學生 || 城壁遠望 || セルブリツ

けさしも地下鐵道で、倫敦を發し、程なく綠野連なる平原に出づ。二十哩隔つた小都會について、ウキンヅル宮へと行く。其の途中、繪葉書など買ひ購めて、其の儘其處に預ける。宮城の位置はテムス川の高地に臨み、郭樓の中央に臺閣高く聳ゆる。此の城は元ウキリアム、コンクエラの創立に係り、所謂ノルマン式とやらで、剛毅な風を備へて居ると云ふ。且ヴィクトリア女皇の時に、改築されて、壯麗な事、世界有數の宮殿と云はれるさうである。今は現皇帝の離宮であつて、夏時の間、此處に住はせられ、冬時の間、バツキングム宮に住はせらるゝと聞く。即ち我等の訪ひし頃は、陛下御不在の時であつたから、特に拜觀を差し許されるのである。王城の拜觀とは、我れく日本人には夢想だに出来ない所である。僕は日本にも、宮城の拜觀が、一般の國民に自由に出來るやうになつたらと思ふ。

我等は多數の見物人と、一所になつて、ノルマンゲートから、ウキンヅル宮に入る。國

賓室、寢室、讀書室などとして、善美を盡さぬ物はない。各室には、歴代の王の肖像、油畫など懸け連らねて居る。天井からの、釣燭臺に、水昌が鈴成りに垂れて、ざら／＼と光つて居る。説明者が一部室毎に鍵下ろして、次ぎの部室へ連れて行く。其處には、ガータ勳章佩用者の紋所が、廊下×



×の柱に彫り込めてある。不圖説明者がやつて來て、彼所に日本

のがあるを指す。成程菊花の御紋章である。我が天皇陛下の御威徳こゝに及べるかといふ欣ぶ。各室を巡つて行くと、會議室に出る。其の中央に、長卓子を据へつけて、其の周圍に椅子を寄せつけて居る。或る室には、我が皇室より

御寄贈になつた、蒔繪の手篋笥などが、飾られてある。次ぎの室には、昔の兵器が陳列されて居る。其の中に、日本の武器も飾られて居る。陳羽織、陳笠までも置かれて居る。其れから各室を廻つて、歩るさ憎くい、すべくの床を踏むで、やつとこゝ外に出る。ガータ、ナイト、チャペル即ちガータ帶動者菩提所へ這入つたが、其處にはガータ勳章佩持者の旗を列らね、又其の紋章を彫り抜いてある。此の寺院はガータ勳章を賜はれる人の爲めに、菩提を務める所である。我が天皇陛下の御紋は何處にあるかと探して居ると、僧侶が好意を表して、彼處にあるから、讀經壇に上つて見ても宜いと云ふ。別に上らんでも解かつたから、其の儘出て終ふた。

繪葉書屋で、先きの買物を受取つて、料理店に入り、晝餐を認めて、鎌田君と二人郊外に出る。縁爲す野邊に憩ひながら、遙か城壁を望むと、古雅愛すべきお城が見ゆる。鎌田君は連りに詩的だと褒める。やがて歸へりかけると、其の途中イートンカレッヂの學生に遇ふ。其の服裝が一寸變つて居る。絹帽シルクハットを被つて、上衣の下の釦を一つ端づし、

ズボンの裾を巻くり上げて居る。是れが此の學校の特徴であると云ふ。イートン中學校はウキンゾル宮の上から能く見ゆる。グラッドストーンや、ウエリントンなど出した學校として有名である。

我等が倫敦へ歸つてから、セルブリッヂ商店へ行つて、大分土産物を買ひ購めた。

(五)

●同廿日 晴天 總領事館||正金銀行||商業會議所||ピツカヂリ街

けさ山座氏の、英吉蘭銀行看覽の承介状を持つて、總領事館へ行つた。所が領事館よりも正金銀行が宜いと云ふので、其れから同銀行へ行つて、懇願すると、同銀行から使が英吉蘭銀行へ行つて、やつと看覽の許可を聞いた。英吉蘭銀行を見やうと思ふたら、其の手續さが並大抵でない。大熊君の職務として、例に依り、商業會議所へ立ち寄る。英國の商業會議所は、米國の如く、政府から獨立して居ると云ふ。歸途、倫敦の最も繁盛なピツカヂリ街を通はる。

●同廿一日 晴天 英吉蘭銀行―世界金融の中心―百萬圓を一手に握る―札の

トン子ル―博覽會―奇抜な遊戯

英吉蘭銀行は世界金融の中心である。彼の日清役の償金、日露戦争の際募集せし外國公債の如きも、大抵は此の銀行と取引した。斯く日本の爲めには、最も深い関係のある銀行である。けさ正金銀行から、一英人の案内者と共に、ロンバート街に立つ、英吉蘭銀行を訪ふた。同銀行の外観は、壁黒く汚れて、左程立派でも無けれど。内部の整頓して居る事と、完備して居る事は、世界に例のない大銀行である。

先づ最初に、日清役の際、外債募集の會議を開いた協議室を見た。次ぎに係員の承認を経て、金庫に入れば、車臺の上に、鈍金の板幾重も置かれて居る。僕は一本持たされたが、實に重い板であつた。而かも是れ丈で、百萬圓と聞いて、エ、と驚く。僕は此の時、百萬圓を一手に握つたのだが、活殺自在の黄金かと思へば、實に恐ろしくなつた。

人は是れが爲めに働き、是れが爲めに死ぬ者、幾くらあるか知れない。實に不可思議な神通力を持つた金塊である。外に多くの金囊を握つたが、是れにも多くの金貨が詰つて居た。我等は唯夢見る心地して、茫然として金庫を出る。能く斯かる所を見せたものと皆云ふ。英人は一旦手続きさへ済めば、其の人を信用して、毫も疑はず。此の點は、日本人には薬にしろくてもない。英人の豪らい所である。又貨重器と云ふ器械がある。是れは塵一つでも、忽ち目盛りが現出すると云ふ。極く微妙な作用を有する器械である。其れから、貨幣検査場へ行つた。其處には貨幣の重量の正、不純を計る小さい器械がある。卓上の同器械が、自働的に働いて、目方の足らぬ金貨右に落ち、正しい方は左に落ちる。恰かも金が水に流れて落ちるやうである。其處から、爲替券、紙幣の印刷場へ行つて見る。一臺に二枚づゝの紙幣を刷り出して、其れが一枚ごとに、皆番號が違ふ。機械の廻轉と共に、繼續して一萬枚も刷られる。而かも番號が違ふて出るのが、此の機械の特色ださうな。紙幣は例の薄すべらな白紙で、十磅、二十磅、五十磅、百磅の各種で

ある。此處を見て保管室へ行く。其處には壹千萬圓からの札がある。一遍發行して、歸へりし札は發行しないで、保存し、五年後に焼くのだと云ふ。俗に是れを札の粉と云はれて居る。百十一年後に戻りし札は紀念の爲め飾られて居る。又百萬磅即ち千萬圓の貳百年前の記名手形が置かれて居る。其の他に破つた札を入れた籠があつた。是等の古い紙幣を見て、札のトン子ルに入る。終ひに暗くなつて歩かれないやうになる。やつと暗闇みを抜けて出て、初めて吐息ついた位である。各事務室は各銀行と別に變はりなけれど、流石に大英國の銀行丈あつて、英領印度其他屬國との取扱局を置いて居る。ソシテ此の銀行には、唯一つの中庭があつて、噴水がふき出て居る。やがて同銀行を出たが玄關には、深紅燃ゆるばかりの、襦袢を被た門番が居た。歸途二階立ての自動車に乗つて、ホテルへ歸へる。

午後は、瀛軍に乗つて、英國博覽會へ行つた。未だ何にも整はず。唯廣い庭園を彷徨いて、奇抜な動運を試みた。僕は萩原君と二人で、^{フキツフラツツ}最高懸垂と反動器械に乗り、又泉水池

に、電氣ボートに乗つて見た。此の博覽會の敷地は、來年日英博覽會のある土地である。今夜から大阪の白山君が加つて、伯林まで行く事になつた。是れで一同會員六人である。

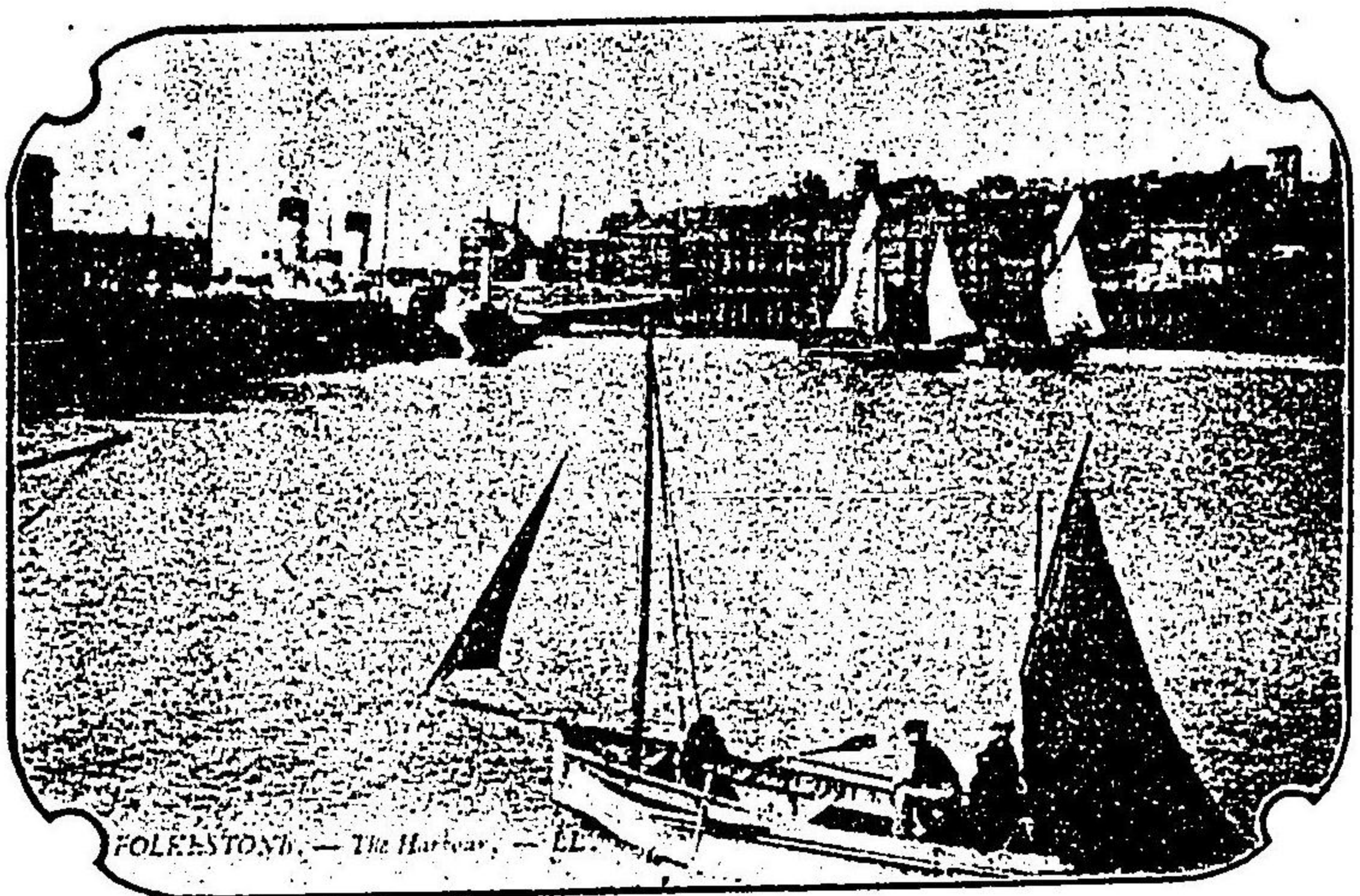
第五編 南歐日記

百六十

ドーバ海峡

●同廿二日 晴天 龍動を去る||フォルクストン岬||氣持ち宜いドーバ海峡||
英雄の憾み||カレー港||巴里迄で全速力

けさ高架鐵道に乗つて、龍動を去る。汽車はフォルクストン岬まで全速力で走つて、棧橋から汽船に乗り換へた。けふ倫敦から巴里へ遊びに行く者非常に多く、皆甲板上に群つて居る。汽船は棧橋から離れ、徐々にドーバ海峡へ突き進む。僕は獨り船橋に身を寄せて、懐しげに英國の方を望むで、あゝいつ亦汝の顔を見る事が出来るだらうかと、いどい感慨に堪へなかつた。僕は鎌田君を誘ふて、食堂へ行き、レモ子ードで渴を治した。二人は亦甲板上へ出て見たが、波穏かに風をよくと吹いて、氣持ち何とも云へない。



岬ノトスグルカフ

僕は此の旅行中、此のドーバ海峡程愉快に思ふた事はない。早や對岸佛蘭西の陸が見えて來た彼の不世出の英雄奈拿倫が、此の狭い海一つの爲めに、英國に勝つ事が出来なかつた。嗚呼彼れが英國の空を眺めて、甚麼に残念であつたらうかと察した。一時間半でカレー港に着いて、込み合ふ税關で、檢査なしに通つて、直ちに汽車に乗る。黄昏がる、佛蘭西の野、草木繁つて緑濃き其の色得も云はれず。僅かに一章帶水を隔て、是れ丈の相違あるかと皆云ふ。點燈後食堂に居ると、ウェイターがあわたくしく皿を運びで行く。是れで佛蘭西人の周章者である事

が解かる。汽車は一時間六十哩で、最大急行列車なのである。カレールから巴里迄で全速力で走つて、夜の九時頃に着いた。停車場で税關の検査を受けて、馬車に乗る。旅館はウキンゾルホテル……

花の巴里（二）

●同廿三日 晴天 凱旋門||トリアノンス||ヴェルサイユ|宮殿||ボア大公園

朝馬車に乗つて行くと、道路が四方八方に通じた真中に、凱旋門が巍然として聳へて居る。是れが奈拿倫一世が塊地利に大捷を奏して、得意揚々として歸つた時に、建設に取り係つた門である。其の門の壁には、奈翁が大勝を得た戦争畫を彫刻されて居る。此の凱旋門は佛國人の最も誇りとして居る紀念物である。公園の街路を走れば、樹木鬱乎として森の如き間を過ぎ、巴里の田舎に出で、トリアノンス宮へ行つた。こゝはルキ十五世が贅澤を極めた所であつて、後に奈翁の住み込む王宮である。奈翁一世の使用

した玉突臺、ナポレオンが最初の妻ジョセフィンを離縁して、憂愁に耽つた居間、ナポレオンの寢臺、女王ヴィクトリアの寝ざる寢間等がある。なせ女王が寝なかつたとなれば、奈翁の寢臺に寝て、彼れの煩悶を察して、寝られなかつたからである。其の他十九世紀初頭の御輦、虎の籠などがあつた。あゝ回顧すれば、昔は榮華を極めた所であつたらうが、今は見物人の靴に踏まれるやうになつたとは、實に憐れな話である。

更に馬車を馳せて、ヴェルサイユへ行つた。宮前の料理屋で、晝餐後有名なヴェルサイユ宮殿を見たヴェルサイユ宮は革命の導火線となつた、有名な場

巴里公園街路



所である。路易十四世が豪奢を極めた榮華の跡、罪もない十六世が却つて怨まれ、バスチーユの牢獄破壊と共に、熱狂せる暴徒の亂入する所となつた。あわれ一國君主の身を以て、斷頭臺の露と消れた一大悲劇を持つて居る。而かも普佛戦争の際、此の宮殿は普軍の占領する所となり、ウキルヘルム王の即位する所となつた。あゝ其れを聞いた佛蘭西人の心中や、如何であつたらうか、今は大統領の選挙場となり、王朝時代の美術品を集めて、公衆の縦覧に供して居る。いでや是れよりヴェルサイユ宮の見物を初めやう。正門前に路易十四世の馬上の銅像がある。其れを見て、當年國民議會を開いた一室に入れば、志士ガムベッタなどの椅子が置かれて居る。其れから北側の各室を巡つて見る。シヤールマン大帝以來の戦争畫が、大壁畫になつて居る。本館にはルキ十六世の結婚室があつて、裝飾の美を極め、鏤玉燦爛として輝いて居る。長い廊下に出ると、舞踏室がある、迂濶りすると、滑べりさうになる。此處は普佛戦争の時、普軍の野戦病院となつた所である。南側の御殿に入れば、其處にはボナパルト、ナポレオンの一代記を描いた

大油畫が出て居る。殊に奈翁が千軍萬馬の中に馬を進めて、立てる姿の颯壯たる英雄の倂忍ばれる。彫像室には奈翁最後の塑像が置かれて居る。彼れが椅子に倚つて、手に歐羅巴の地圖を展いて視つめて居る顔、いかにも悲痛の情に堪へない。各室を見て終つて庭園に出る。緑滴る森池を圍みて、茫々漠々鬱蒼として打續いて居る。げにや昔王侯貴族が花の朝、月の夕宴樂に耽りて、民の憂を知らなんだのも、是れが爲めと思はれた。振り返れば、輪奐の美を極めた樓閣、嚴として連つて居る。さすが玉敷の御宮の跡と思ひつ、立ち歸へると、軍人が刀を携げてやつて来る。昔日本で見た軍人の風と餘り變はりない。

巴里へのかへるさ、ボアの大公園に立ち寄る。一酒保で、咽の渴きを止めて居ると、女が我等の前を通つて、日本語でお早うと云ふて去る。我等可笑しくなつて大に笑へば、彼の女亦此方向いて、莞爾と笑ふて居る。フランス女の愛嬌の宜いには感心した。かくて皆打ち連れて、森林内を歩き盡くすと、一大丘上に現はれる。兒童等が坂を這べり

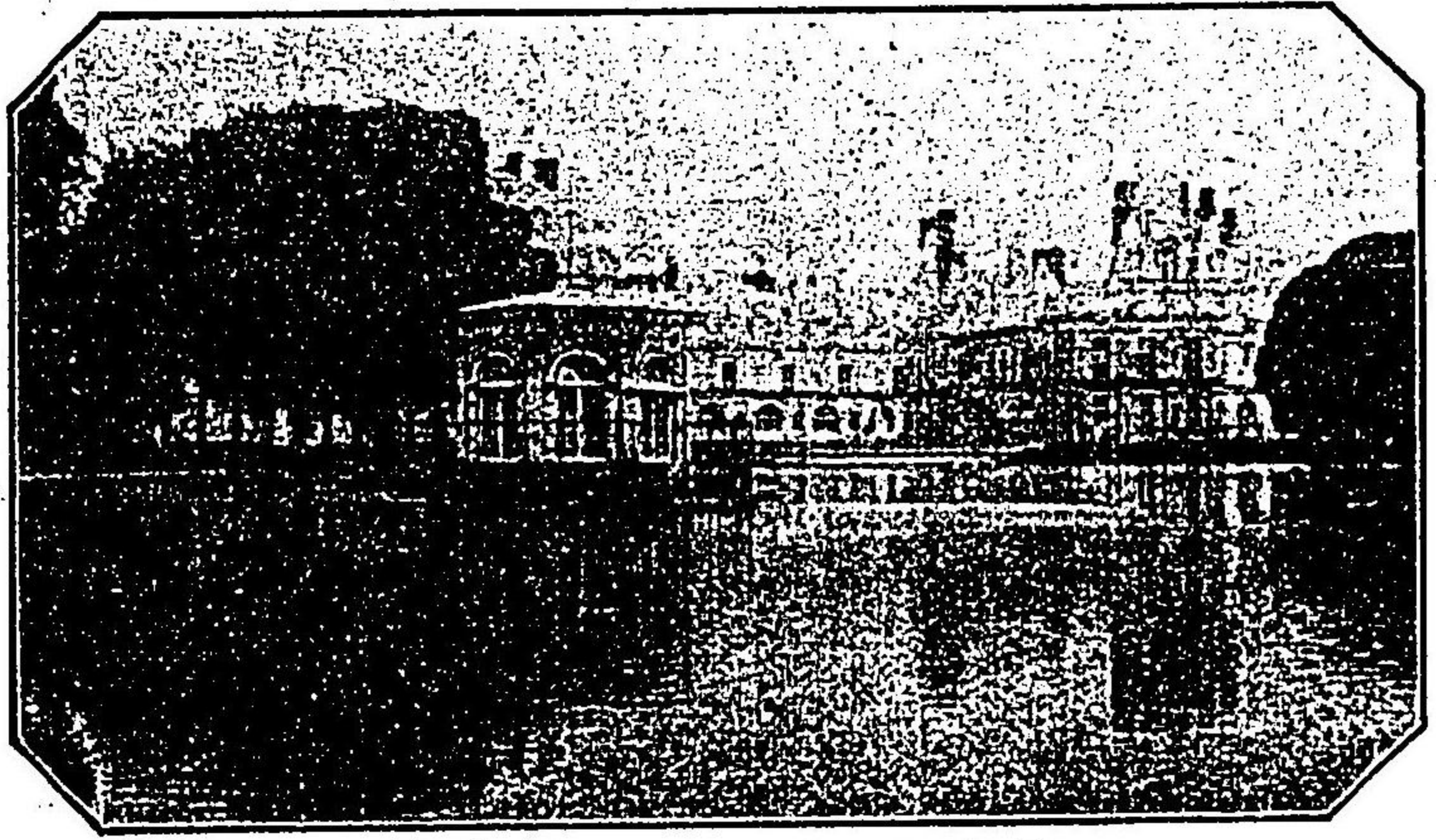
落ちて居るあり、大噴水
が高くふき出るあり、又
遠くには、エツフェール
塔が雲を凌がんばかりに
突立つて居る。あゝ巴里
は公園の都である。公園
は世界第一である。花の
巴里は公園である。

(二)

●同廿四日 晴天 フ

オンテンブロ

んちやん騒わぎ



城古のロアンテンオフ

けふは巴里から汽車に乗
つて、フオンテンブロの
田舎へ行つた。停車場か
ら馬車に乗つて、フオン
テンブロ迄で行くと、其
處に古ぼけたお城がある
ルキ七世の作城で、實に
一千百三十七年に建てた
のだと云ふ。洗禮の門壁
には剥けて居れど、ミケ

百六十六

松林 || オペラ座

|| 涼酒保

ランゼロ、ラファエルなどの弟子の描いた名畫がある。昔厨所から、こゝへ料理を運ぶ
のに、地下室があつたさうである。其處を去りて庭を歩いて行くと、大けな池がある。
森の影倒さに水に移りて、何とも云へず。手を拍てば、ばかつくと緋鯉が出て来る。
パン二片三片放つてやる。恁麼こと日本とちつとも變はりない。某館の前に唐獅子が置
かれて居る。我等其れに這入つて見ると、清國から分捕つた戦利品ばかりである。支那
の美術品でも、中々西洋に負けない立派な物がある。外に日本の骨董品も陳列されて居
た。其處を出で、或る宮殿の前へ行く。外観は汚げなれど、内部を見れば、裝飾の華
麗と、彫刻の精緻とに驚ろくであらう。見物を特に許されて、各室を巡つて見る。禮拜
堂、奈翁の帽、彼れの頭髮、セントヘレナの木と棺内の碑、マリアント子の浴室、奈翁
の書翰、後妻の寢臺、愛兒の寢臺、大臣の集會所、ルキ十五世時代の机、奈翁の椅子、
玉を盗まれた椅子、マリアント子後の結婚室、同後の音楽室、侍女室、ダイアナの廊下
圖書室、ルキ十五世誕生の室、舞踏室、羅馬法王監禁室等皆見るべき物ばかり。天井畫

百六十七

壁畫、欄間の彫刻、及び天井の彫り物何れも華美を極めて居る。殊に痛切に感じたのは奈翁がウオーターロの敗戦に、帝位より下る事を誓ひし契約書である。筆のふるへる跡いかに憤慨に堪へなかつたかを知るに足る。我等見物終はりて、外に出で、其料理店で中食をやる。

食後玄關に出て居ると、村の人等馬車に乗り込むで、樂器を入れて、どんちやん騒わぎをやりながら、勇しく出てゆく。景氣甚だ面白し。やがて料理店を去り、町を歩いて行くど、町の真中に牛の碑がある。是は此の町に、加賀のお千代見たいな、ボンナと云ふ女の詩人が居たさうな。其の女の爲めに建てた石碑である。折り能く馬車が迎ひに来たから、其れに乗つて此の町を離れる。

やがて有名なフォンテンブロの大森林に差し懸かる。行けどく松林で、何時行き果てるか知れない。松と云ふても、日本のやうに枝ぶりの宜いのでなく、杉のやうな松ばかりである。坦々たる道路此の間に通つて居て、さすがに睡むくなつて来て、うどくす

る。其中森林内を通り過ぎて、停車場へ來ると、恰度瀛車に出遇ひて其れに乗る。

夜、僕はオペラ座へ行つた。巴里へ來て、オペラを見なければ、土産話が出来ないと、奮發して行つた。建築の壯大な事云ふ迄でもない。大理石の階段、柱など實に雄麗な物だ。劇場は奥まりたる所に控へて居る。ゲーテの作とやら、何んでも鍛工師の藝題である。舞臺の前には無数のヴァイオリンと種々な樂器を合奏す。陰氣な舞臺で暗く、鍛冶家が一心不乱になつて、刀を鍛へると、遂には石をも斷ち割つて給ふ。電氣が仕掛けであると思ひ、石から火花が出た。第二幕目には、此の男が刀を携げて洞窟へ向ふと、大けな大蛇がのろく出て來る。其れ來たと此の男飛んで行つて、刺し殺すと、大蛇がゲーゲーとスチムを吐きよつた。其の時女神の聲が幽かに聞ゆる。是れから後が見ものなれど、厭やになつたから、オペラ座を出た。一寸八重垣の昔譚に似て居る。畢竟オペラとは歌劇であつて、我國の能狂言の一層進歩した物である。登場俳優が音樂と合唱して劇をやる、其れをオペラと云ふので、日本では未だ眞の歌劇を有しない。

ホテルに歸へると、山崎君が僕を待つて居られた。此の人は巴里へ留學に来て居る文學士先生である。同君とホテルを出で、寄せを見てから、涼酒保でレモネードをやる。巴里では暑つくなると、軒先さへテントを張り出して、夜遅うなる迄で、酒保を開くのである。是れで巴里の夜は、何れ丈賑ふやら解からぬ。最うおそいからとて、馬車に乗つて、ホテルへ一所に歸つた時、僕は田邊君の親切は嬉しいです。君の家は金持ちだらうが、何故ヘクツク社の團隊に加つて來たのです。巴里は二日やそこらで解かりません。明日僕案内しませうかと云はれる。馬車中で、遠慮なしに、互に話して居る中に、ウヰンヰルホテルの前に着いた。門前で同君と別れて、ホテルへ這入つた時は十二時頃……

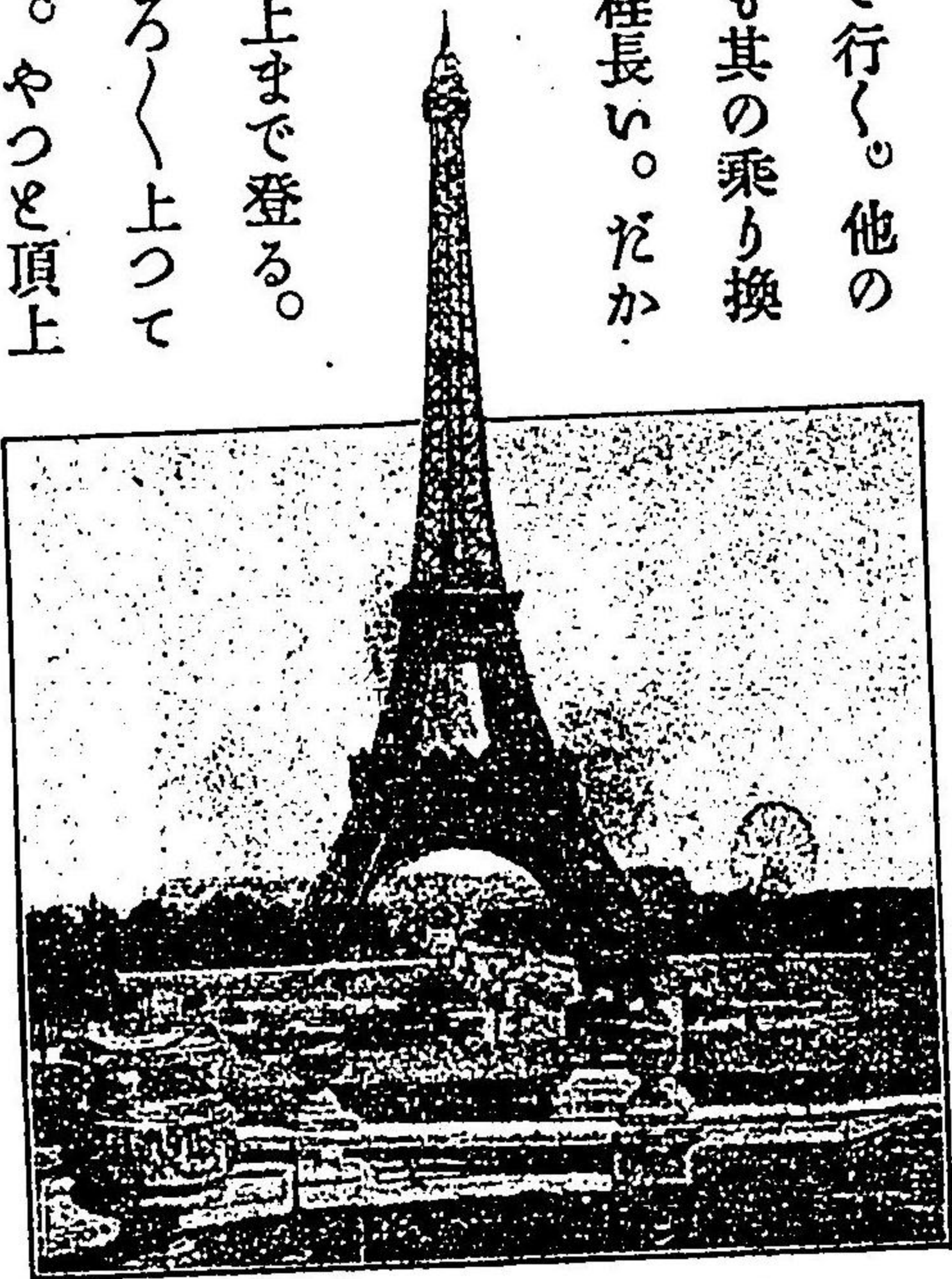
(三)

●同廿五日 雨天

エツフェール塔 栗野大使 商業會議所 ノートルダム寺院
院 ールブル ランドマガセン

雨ふるけさ巴里の橋に馬車をやりて、何所へ行くかと思へば、高く聳ゆるエツフェール

塔であつた。此の塔は萬國大博覽會の時に建設した物で、悉皆鐵材で組みたてた高塔である。頂上まで器械で行けると聞いて、コリヤ上らさんばあるべからすと、云ひ捨て、ケーブルに乗ると、斜にツイと上つて行く。他のケーブルに乗り換へる事二度、而かも其の乗り換へに、停留場で待つて居る時間が餘程長い。だから頂上へ行くのに、實に容易でない。其の中エレベーターが下つて來たから、其れに乗つて、眞直頂上まで登る。米國流なら、一思ひに昇る所を、そろ／＼上つて行く。否や早や辛氣臭くてならない。やつと頂上に達して、瞰下ろすと、巴里全市は愚ろかの事、田舎の方迄で、見ぬない所がない。試みに名刺を捨てると、ひら／＼と舞ひながら、散つて行つて、幽かに消ゆる迄で見



エツフェール塔

ると、森の彼方に隠れて、見ぬないやうになる。一二回試みて、廊下を廻れば、其處に獨逸人で、奇妙な切抜きをやつて見せる。人をモデルに使ふて、鉄で黒紙切りぬいて、其の人の輪廓寸分も違はぬやうにする。皆其の特技に感心して、已が姿を切り抜かし、繪葉書に貼りつけて貰ふ。其奴が日本語で、ベリナイスの事を教へよと云ふから、「宜しい」と云へば、莞爾と笑ふて、宜しい〜と云ふ。兎角して居ると、下降のベルが鳴る。周章て、エレベートルに乗りス〜と下つて終ふ。上下實に一時間もかゝつた。歸途大使館に寄つて、栗野氏と面會し、挨拶して同館を出る。ホテルで晝食後亦馬車に乗つて、商業會議所に寄り、最も古きノートルダム寺院を訪ひ、ルーブルへと向ふ。セーヌの沿岸に沿ふて行くと、一書店がある。こゝは昔ナポレオンが、此の書店の二階に居たのやさうな。彼れはこゝから對岸のルーブルを見て、將來彼の宮殿に住むでやらうと思ふたらうと、案内者笑ふて云ふ。橋を渡つてルーブルの中に入る。ルーブルは路易十四世の建てた王宮で、奈拿倫一世及び三世の時に増築した所である。

今は世界第一の美術館である。埃及の發見物、希臘時代の柱人形、奈翁即位の圖、ラファエルの宗教畫、ラファエル初年時代の自畫、西班牙人ムリロ作マリア天上の圖、獨逸の人物畫家ホルベーン作、ツロヨンの牛追ひ、グロス作奈翁モスコイ敗戦の圖、レブラン作歴山凱旋の圖など、大に見るべき物があつた。ルーブルの華麗壯大なる事云ふまでもない。

夕方ホテルへ來て居られた山崎君と、巴里第一の百科店グランドマガセンへ行く。

●同廿六日 晴天 ハイカラーストラスブルグを過ぐ瑞西の山水 綺麗なホテル

けふから夏服と被更へて、逐うと巴里仕込みのハイカラになつて終ふた。此處は二食の事とて、朝はホンの茶とハムエキス丈ですます。さて漸やく巴里を出發する事となり、メレンダー君の催促に、馬車に乗り込むで、ホテルを去る。僅か二日で、花の巴里を振り捨てる。あゝ何うしやう……今更ら何と思ふたかて仕方無い。停車場へ來て終ふた

×ホテルである。

ルザーン

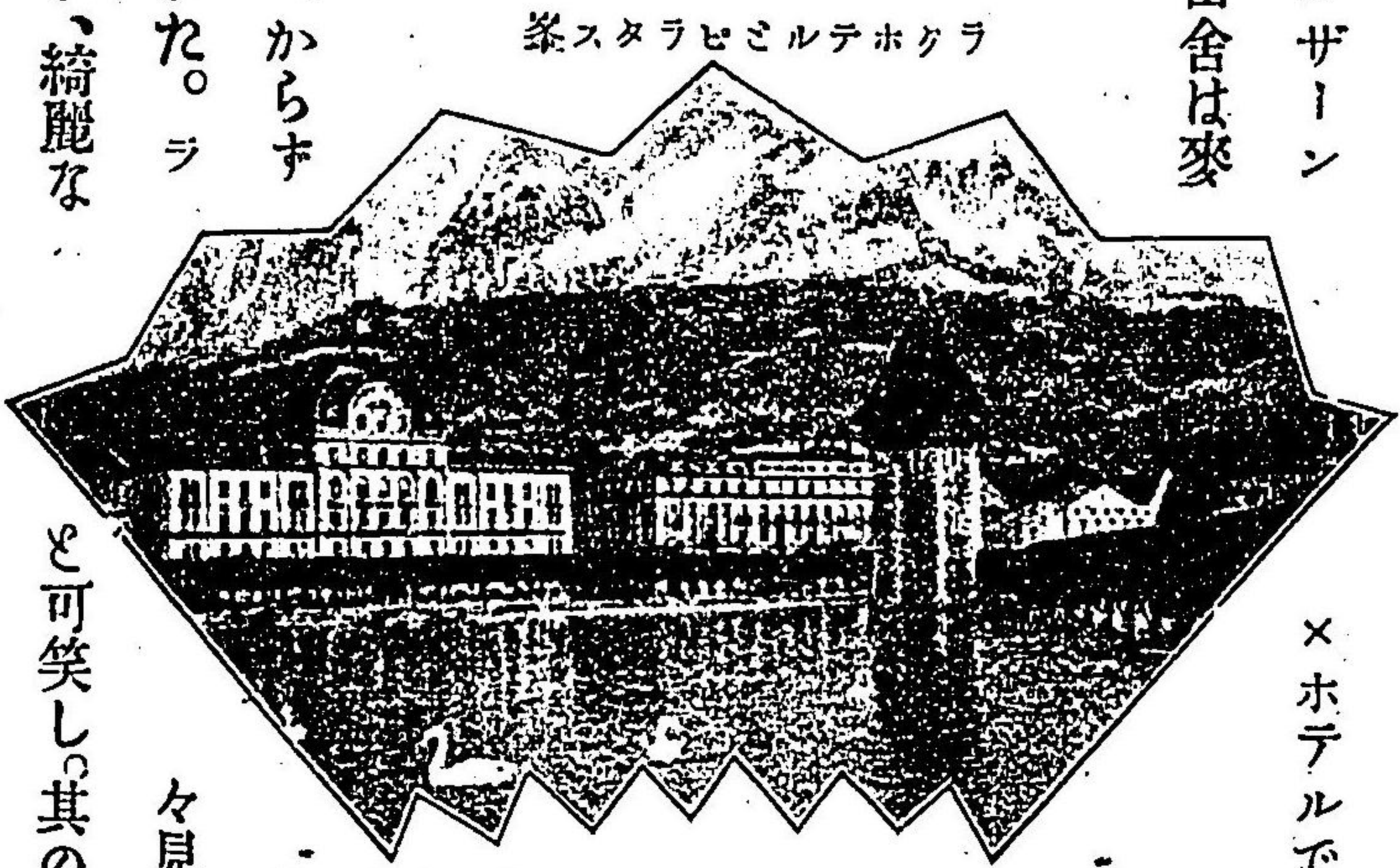
●同廿七日 雨天 湖上

の汽船 登山鐵道

リジのホテル 雪氣

色 獅子像

朝ホテル前から汽船に乗つて
雨ふる湖上を進む 雨に霞む
俊嶺、緑濃き湖岸の氣色、點
々見ゆる白聖赤瓦のさまなど、い
と可笑し。其中グイトズノーに着いた。其



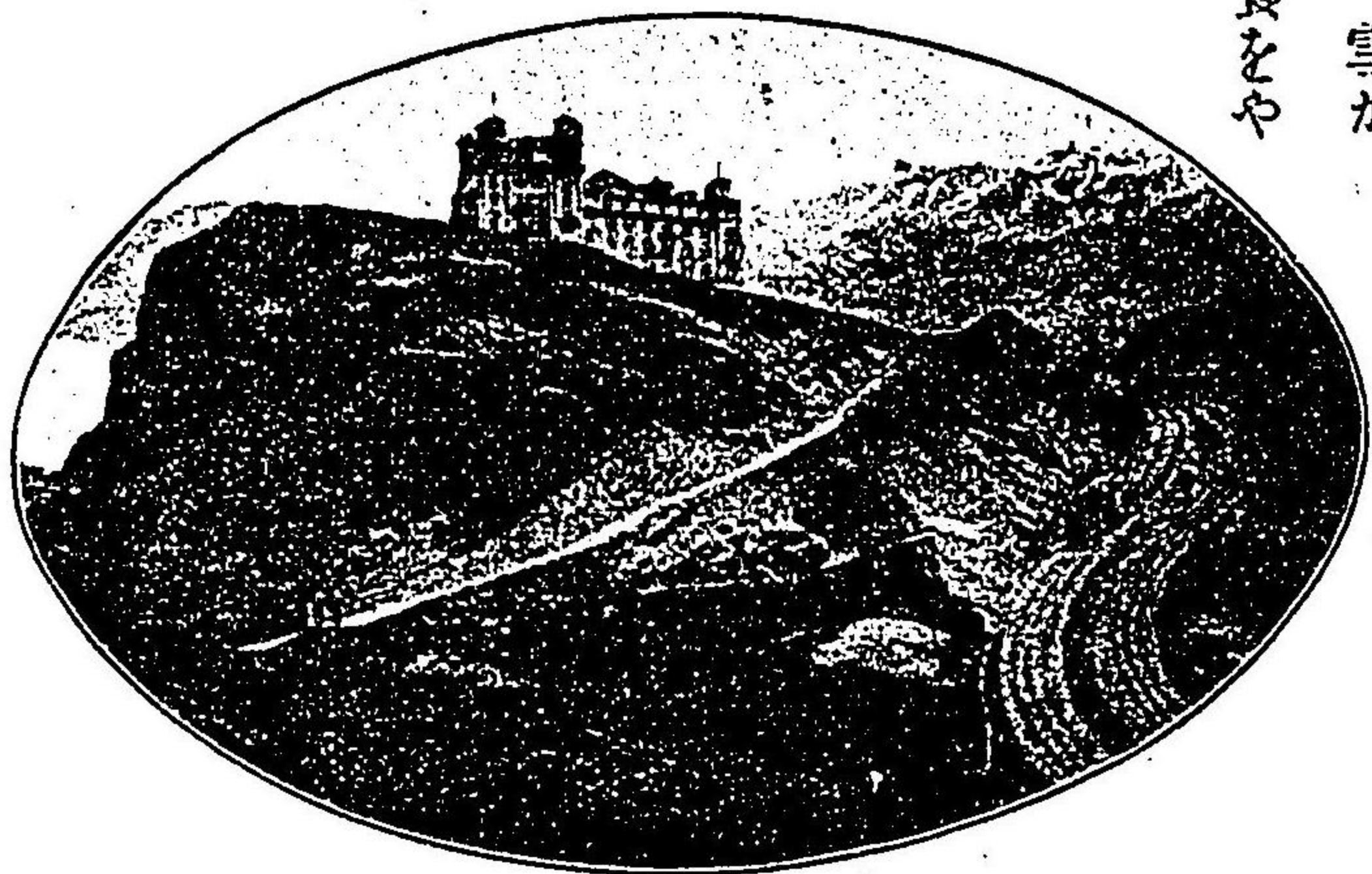
ホテルグランド

かくて汽車に乗つて、ルザーン
へと出發す。佛蘭西の田舎は麥
畑で、能く耕されて居
る。獨佛の國境ストラ
ズブルグを過ぎ、間も
なく瑞西に入り、税關
の調べを受けて、他の
汽車に乗り換へた。暮
色蒼然たる頃、瑞西の
山水を見る。秀麗云ふべからず
午後九時ルザーンに着いた。ジ
グホテルは今までに無い、綺麗な

處からアプト式の汽車に乗つて、リジの絶頂に登る。雪が
ちら／＼降つて、眞白ろになつて居る。ホテルで晝食をや

る。メレンダー君が連りに、猫の泣き眞似をやつて
ニヤ／＼と云ふから、皆大笑ひさ。やがて汽車に
乗つて、山を下る。途中洞穴のトンネルを過ぎ、再
びグイトズノーから汽船にのる。雲名残りなく齋れ
て、ルザーン湖の景、一層美し。

ルザーン市から數町歩いて行くと、獅子像が山の岩
壁に彫刻されて居る。是はルキ十四世の爲めに。身
を捧げた瑞西護衛兵の紀念碑である。僕と大熊君は
皆と別れて、ルザーン市の状況を見て廻はつた。



リジ山の頂のホテル

アルプス山中

●同廿八日 晴天 ピラタス山 湖水 物真似 長いトンネル 伊太利に入る
 朝窓から見ると、ピラタス山の秀峰聳へて、厚化粧せる姿いと美し。汽車に乗れば、早
 やルザインを後にして、右に左に湖水を迎へるせはしさ、畫にも及ばぬ氣色である。げ
 に瑞西は世界の公園とたゞせられる丈あつて、其の景は天下の絶勝である。

汽車中メレンダー君は例の猫の泣き真似をやつて、何所に猫が居るかど、疑はれる位で
 ある。先生は注文に應じて、動物、鳥の泣き真似をやつて見せる。如何にも巧みなので
 皆噴き出して笑ふ。而し一番うまいのは矢張り猫だ、メレンダー君は物真似の名人で、
 中々の愛嬌家である。汽車は有名なるアルプス山中に差し懸かる。摩天の俊嶺空に續き
 白皚々の雪峰遠く走つて居る。全山悉く巖質を露出して、巍峩として聳ゆる姿、神斧鬼
 鑿も是れには及ばじと思はるゝ位である。分水線が奇抜な屈曲線で、空際を切つて居る

將に男性的の山脈である。無數の龍崖の如く、岩に碎けて落下する光景、壯快論へんに
 言なし。此の山中には、五十からのトンネルがある。線路は勾配の急なる爲め、螺旋形
 にグル／＼廻ふて居る

×アルプス山中を下つて行

今通つて來た線
 路の下を潜つて
 トンネルに入り
 トンネルを出で
 る、亦線路の下
 を潜ぐる。幾十
 回もグル／＼巻きに、
 此の頂子で帯の如く×



景の中山スブルア

く。實に奇妙
 な工事ではあ
 るまいか。ゴ
 エスチエネス
 と云ふ墜道は
 長さ九哩に及
 び、世界第一の唱あり。是
 れを潜ぐるに、實に十五分

もかゝつた。瑞西の南端ルガノ湖に沿ふて、伊太利に入れば、又コモ湖現はる。某驛に

ついで税關吏が寛大に見道がして呉れる。午後三時五分ミラノに着いた。

ミラノ

寺院—劇場—墓地

ミラノは伊太利金融の中心地であつて、絹布、羅紗の製造地である。停車場を出ると、メレンダー君の母と妹が迎ひに来て居たから、相抱いて、接吻をやつて居た。ミラノはメレンダー君の故郷なのである。我等は彼れと別れて、他の案内者と一所に、馬車に乗つて、直ぐ見物を初める。カブールの銅像の前を過ぎ、先づ最初にツオモ寺院を訪ふ。此の寺は規模の大けな事、羅馬の本山に次ぐと云ふ。天井は彫刻のやうなれど、其の實畫である。禮拜堂には長い蠟燭に燈がついて居る。十二世紀頃の燈臺、歐洲第一の窓、祈禱所、ラファエルの畫の窓など珍らし。奥の方に、帝王の爲めに、顔の皮剝がれた使徒、マルサの銅像が建つて居た。面白い奴やと云ふて、寺院を出づ。勸工場へ寄ると、

棟と棟の間にガラス天井を張つて居る。馬車に乗つて、ミラン同盟の碑、エマヌエル門の前を通つて、スカラ座の前に停る。今は芝居をやつて居ないが、舞臺、樂屋、棧敷など丁寧にを見せて呉れる。スカラとはミラノ侯の皇后の名である。亦馬車に乗つて、ミラノ侯の邸宅、フンバルト王の銅像の前を過ぎ、奈翁一世及び三世の爲めに記念した、凱旋門の前へ来る。競馬をやる町を通つて、王宮前を出で、立派な墓地へ行く。墓は多く大理石で作り、非常に巧妙な彫刻を施して居る。悲哀、時などの寓意的彫刻の外に、盲啞學校長の死を弔ふと云ふ意味で、盲兒の花を捧げて居るのがある。十一月六日には、此の墓地に悉皆燈がつくさうである。やがて馬車に乗つて出て行くと、うるさい程葬式に出遇ふ。道行く伊太利人、日本人珍らしで、立ち止つて見て居る。いとおかし。グランドホテルにつくと、メレンダー君が前へ出て待つて居た。二階から市街を覗くと、アクトなど町通はりに釣して、中々よささうなれど、人氣の悪い所とて、伊太利旅行中は夜外出しない事にした。

ゼノアの港

●同廿九日 晴天 田殖る||離宮||墓地||軍隊||港||コロンブス

午前九時ミラノ出發、ゼノアに向ふ。女が畑に田殖るして居るから、日本に能く似て居ると皆喜ぶ。アペナンの墜道を潜れば、碧い海現はる。此の時初めて地中海を見た。正午前ゼノアに着、直ぐ停車場前のホテルに入る。

午後ホテルを出で、馬車に乗る。最初に離宮の拜觀を爲す。コロンブスの卵子、是は彼れが卵子の底を割つて、机の上に立てたと云ふ殻である。而し恐らく偽物であらう。ゼノアと土耳其との戦争畫、商業神の天井畫、セントポーロの布畫、金の時計臺、朝の禮拜堂、エマヌエル二世の寢臺、玉座など皆見るべし。

馬車に駕乗、港に沿ふて行く。炎熱燦くが如く、茶褐色の壁に照りつけて、一層暑の苦し。丘上に古城趾廢殘の跡、港に立てるマストの少なき、いかにも中世紀の昔と比べる

と殘れて居る。獨り地中海の波の色ばかり、昔に變はらず。

ゼノアの郊外、有名なカムボサントの墓地を見る。墓には上中下の差別があつて、上等は廊下に沿ふてあり、下等は中庭に唯シヨンポリ十字架建てた切り、さて石造の廻廊を巡ると、實に驚くばかりの、大理石の墓がすらりと並んで居る。宛るで、衣物の綾が浮いて出で、透かして見ゆる位で、少しも本物と變はらず。基督昇天の彫刻などは、雲がひらくと湧きさうになつて居る。能う這麼堅い大理石に彫り附けたものと感心する、親を喪ふて棺側に立つ子女、或は良人に別れて泣く妻など、皆意味を持つた墓が、惜し氣もなく行列して居る。中にも、或る醫師が金錢を蒔き散らして居る立像があつた。其の譯は、此の醫師が俺が死んだら、資産を慈善に寄附して呉れと、遺言したと云ふのである。總べての墓が皆斯う云ふ風であるから、何れ丈の金がついへて居るか知れない。墓見物と云へば縁氣もない話なれど、此處の墓ばかりは、美術的の墓地であるから、見て置く必要がある。其の彫刻が眞に入神の技藝なので、唯々驚歎せざるを得ない。され

ど其の彫刻なる物が、大抵死を悲しみ歎いて居る所ばかりである。即ち伊太利の振はないのは、一つに恫慄悲哀な美術に、長技を持つて居るのと、國力の發達しないのに、詰らない墓に骨折つて居るからだと思ふた。門を出て、後、ラムネに渴を醫し、馬車に乗る。

餘り暑ついたので、傘さしたが、意氣地が無いと思ふたから、亦すばめる。恰度土ばかりにまみれた軍隊が、樂隊を吹奏してやつて来る。思ふに、行軍の歸りならん。脚腫など汚れて、一層穢なく見えた。我等馬車を停めて、帽振れば、馬上の將校も、之れに應じて舉手を爲す。かくて日に照りつけられて、きたないゼノアの町を通つて、ホテルに歸へる。

夜食をすまして、ホテルの玄關に立てば、コロンブスの銅像が立つて居る。銅像と云へば、立派に聞てへど、何にセメンの汚ない塑像である。

●同卅日 晴天 暗がり道中 塵と暑つさ 長い食事 大理石の山 ピサの斜

塔 哀われな田舎 黄昏羅馬に着

けさ程ゼノア出發、羅馬へ向ふ。アペナウンの山脈が海岸に沿ふて居るから、長い間墜道を潜らねばならぬ。九十からの墜道で、宛るで暗がり道中に異ならず。其れに汽車の塵の多いのと、暑つさで、斯様不愉快な旅行は、又と無い。午後一時食堂につくと、幾皿も出て、一時間程かゝる。伊太利名物の饅飴が出る。其の食事の長いには、ほとく屏口した。漸やく此の山脈を離れると、遙かに大理石で、眞白になつて居る山が見ゆる。伊太利は大理石の本場丈あつて、盛んに沿道に截り出されて居る。午後四時頃ピサの斜塔が野の中に見えた。傾ひいて居るのが、鳥渡面白い。伊太利のさびれた田舎を見ると、哀われな感じがする。未だ都會を見ない中に、批評するのは、チト早や過ぎるが、其の國の文明は田舎を見れば、略々解かる。塵と暑つさに苦しむた我等は、日の傾むく頃、稍々凌ぎやすうなつて來た。黄昏古羅馬の跡見ゆそめて、何とも云へぬ思ひがする。午後六時と云ふに、羅馬に着、停車場前のコンチネンタル、ホテルに入る。

羅馬 (一)

●同卅一日 晴天 古羅馬||市内見物||聖彼得寺院||コロシヤムの演武場||フ
 オーロの跡||シツピオの墓||名物の酒||胎内潜り||カラカ
 ラの浴場||無量の感慨||盆祭り

羅馬は一日にして成らずとかや、げに一代の豪華を極めた羅馬は、決して一||やそこら
 で興らなかつた。羅馬の滅亡は如何にも脆弱であつた。けれど羅馬の建國は中々容易
 で無かつた。紀元前七百五十三年チベリス河畔の七丘に集つた民族が、歐亞に跨る大帝
 國を建設したのは、全く羅馬人が國家的感念に強く、武勇を尙むたからである。古羅馬
 は共和政治、三頭政治、帝政政治の三時代を経て分離し、西羅馬帝國、東羅馬帝國の二
 つとなつた。前者は北方の蠻族ガリヤ民族に亡ぼされ、後者はコンスタンチノーブル帝
 に依りて、僅にボスフォラス海峡に餘生を保つ事が出来た。中世以後は即ち羅馬法王時

代となり、近世になつて、所謂サルヂニア王エマヌエル二世の、伊太利統一となつたの
 である。

けふは楽しい羅馬の見物、ガタ馬車に乗つて行くと、剝げた茶褐色の家ばかり並びで居
 て、一向氣乗りのしない街である。されど名所故蹟に至つては、道がに羅馬でなくては
 夜が明けぬと思はしめる。王宮の前を通つて、或る大噴水の前へ来る。是はトレヴィの
 フオンタナーと云ふて、昔ローマが英吉利を征伐した時の記念碑である。有繫は美術國
 丈あつて、思ひ切つた彫刻をやつて居る。勇士が真中の岩上に突立つて、其の岩の両側
 に、男が腋も張り切らんばかりに、寶螺貝を吹いて居る。如何にも奇抜な彫刻である。
 此處の水を飲むと、必ず二度ローマへ來なければならぬやうになるさうだ。次ぎにセン
 ト、アグニス寺へ行く。天井に一つの窓がある。是れが爲めに、光線の疏通能く、廣い